
**アラサー女と14歳の魔女 ~ 異世界から銀髪魔女が転
がりこんできたので、可愛がってやります~**

黒木春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アラサー女と14歳の魔女 ～異世界から銀髪魔女が転がりこんできたので、可愛がってやります～

【Nコード】

N0625EV

【作者名】

黒木春

【あらすじ】

仲谷塔子、28歳独身。

残業は独り身の寂しさからストレスが爆発した塔子は、ある日自宅で酔っぱらっていた。

そんな時、突然部屋に魔女を名乗る少女・エトナが現れる。

異世界から逃げてきたという彼女は、行くあてもなく傷だらけのボロボロだった。

塔子は成り行きでエトナを部屋に住ませることにするが、素直で素朴で愛らしい彼女を気に入りどんどん可愛がっていくようになる。エトナも、優しく温かく迎えてくれた塔子に懐き心を寄せていく。

そんな、アラサー独身女と幸薄な魔女の年の差同居百合。

現在更新は週1ペースです。

追記：人生が色々と多忙になっているので、少し滞っています。

泥酔のち、魔女 前編

自棄酒をした。

涼しい風吹く5月下旬のことだ。

抱えていた仕事で泥沼になって残業を余儀なくされ、3つ年下の妹（婚約済みの恋人持ち）から『2人で温泉来ちゃった』と浴衣姿のラブラブツーショット写真がメッセーシアプリで飛んできて、陰鬱な気分ですLDKの自宅マンションに辿り着いたかと思えば郵便受けに『仲谷塔子様へ』と高校時代の同級生から結婚式の招待状が届いていたのである。

28歳（独身）の私の心に、こう……渾身の一撃がクリティカルヒットし、プチッと何かが切れた。

私は「めでてえなあ、ちくしょうが」と唸るように言って招待状を鞆に捻じ込むと、踵を返して最寄のコンビニへ向かった。

アルコール度数の高いチューハイを10本と適当なつまみ、翌日のサラダなどをカゴにぶち込んでレジへGO。顔なじみの若い女性店員とアイコンタクトだけで「何も聞かないで」「ご自愛ください」と意思疎通した後、電子マネー会計で足早に退店。

帰宅した私はジャケットを投げ捨て、暑苦しいんだよクソツタレがとシャツのボタンを二つ開け、チューハイ片手に有料ネット配信サービスの映画を開いた。

映画はスプラッタホラー。

複数の若い男女のカップルが山奥の別荘で乱痴気騒ぎをしている

中に殺人鬼が現れ、次々惨殺していくという映画である。

「へっ、ざまあみる」

所構わず恋人とキスを繰り返していた尻軽女が惨たらしく死んだところでそう吐き捨て、チューハイを流し込んだ。

だがその直後、涙が出てきた。

なにしてるんだ自分 と、ふと我に返ってしまった私は己の惨めさと虚無感を自覚してしまい、心が耐え切れずに自然と泣いてしまったのである。

「ふっ、ふふふっ、ははは、あっはっはっはっは!!!」

滑稽さで、笑いが込み上げてくる。

涙も、後から後から溢れてくる。

寂しさで心が挫けそうだった。

だが、今ここで挫けてしまえば負けだと思った。

酔え。酔ってしまえ。べろんべろんに。

そうすれば、現実なんて考えずに済む。

アルコールよ、すべてを流し去ってくれ。

恋人どころかまともな出会いすらない仕事一辺倒の惨めな独身アラサー女という現実を忘れるため、私は冷蔵庫に残っていたビールやワインまで持ち出し、片っ端から空けた。

リビングに空き缶と空き瓶、そしてつまみの袋が散乱したが、もはや散らかすだけ散らかしてしまえの精神だった。

いいんだ、明日は休みなんだから。

好きなだけ飲んで、潰れてしまえ。

くたばれ、現実。

そう願いながら、私は新しいチューハイを開けた。

ソロ酒盛りを始めてから数時間、2本目のスプラッタホラーを見終わった頃には深夜3時過ぎだった。

私はすっかり酔っ払い、ぽへーっとフローリングに寝転がっていた。

頭はふわふわし、視界はぼんやり。身体はぼかぼかに火照っている。

二日酔い確定だ。

明日が休みでよかった。

「ふふっ、寂しくなんかないんだから……ふふふっ……くそう……」

うつらうつらしながら、つぶやく。

「べつに恋人なんていつだって作れるし……ただ一緒にいたい人が見つからないだけだし……お姉ちゃんだって恋人くらい……恋人くらいなあ……！ 10年以上いねえけど……でも……あー、やつぱダメかもしれないなあ」

人生が険しい。
ちよつと泣きそう。

「何でもいいから出会いがほしい……」

これは涙か飲みすぎの嘔吐か。

とにかく何かが進み上げてきそう、気持ち悪かった。

……ちよつとトイレでリバーズしてこようか。

そう思った瞬間、隣室で何かが崩れる音がした。

「うえっ……？」

隣室は、寝室兼書庫だ。

積んであった本のタワーが崩れでもしたのだろう。

会社から家賃補助されて住んでいるこのマンションは防音が万全なので物音自体は心配ない。

「ほつとっ……」

だが、呟いた矢先にさらにもう一度本が崩れる音がした。

ドミノ倒しのごとく負の連鎖が起こっているのかもしれない。

私はこれ以上の惨劇を阻止するために立ち上がった。

「ああ……めんどくさ」

覚束ない足取りで歩き、ドアを開けて電気を点ける。

すると予想通り、床に積み上げていた仕事で使う資料書や実用書、文庫やマンガなどが散乱していて。

そして、その崩れた本の中心にはボロボロの布切れを纏った何か

がいた。

「は？」

その何かは人の形をしていて、もつと言えば女の子らしかった。くすんだ長い銀髪が無造作に広がり、整った目鼻立ちの顔は薄汚れている。整った目鼻立ちをした顔は薄汚れている。深海色の瞳には怯えと疲労の色が濃く、華奢過ぎる手足は擦り傷だらけで、震えていた。

女の子だと断じたのは、身体の輪郭と胸の僅かな膨らみから。

ボロボロの布切れだと思っていたのはどうやら衣服のようだが、汚損が激しい。

長らく身体を清めていないのか、鼻につく臭いがした。

「……なにしてるの？」

酔いと独身アラサー女のドロ沼思考のせいで最低な気分だった私の声は、意図せずしてドスが利いていた。そのせいか、ボロボロの少女は悲鳴を漏らす。

だがすぐに勇気を振り絞るように唇を引き結び、私の足元まで四つん這いで寄ってきた。

立ち上がることはせず這い蹲ったまま。

少女は顔を上げ、無理やりな笑顔を取り繕う。

「あ、あの、お騒がせしてすみません……その、決して怪しい者ではなくて……いえ、怪しいんですけど……少しだけ、少しだけ猶予と言いますかお話を聞いていただけたら嬉しいです……！」

焦燥の滲んだ早口。

それから彼女は縋るような声で、

「ここに住ませていただけませんか？ ……なんでも、しますので」

そう言った。

泥酔のち、魔女 後編

「ごめん、ちよつと何言ってるのか分からない」

突然ここに住みたいと頼み込まれた私は、当然のことながら困惑気味にそう返した。

少女は、私の返答を想定していたのだろう。

黒く汚れた指で頬に触れ、何かを誤魔化すように曖昧に笑う。

「そ、そうですね……いきなり現れて住ませてくださいなんて、滅茶苦茶ですよ。ごめんなさい……あの、でも、わたしはぶんこ以外に行き場がなくて……それで、その……か、家事とかしますから！ 内職も、さ、裁縫とか得意なので……！ あと、あと、マッサージとか！ 家の中で出来ることだったらなんだったって……今はできないことだって、頑張って覚えますから、その……えっと……」

9

少女は必死に言葉を並べる。

彼女のみずばらしい姿と相まって、それはただただ憐れみを誘う光景だった。

私は彼女の言葉を、眉間に皺を寄せ黙って聞いていた。

やがて、少女の笑顔が崩れる。

「……ごめんなさい。いきなり、こんな……」

這い蹲ったままの格好で、少女は顔を伏せた。

言つべき言葉が見つからないのか、束の間の沈黙が下りる。

私は酒のせいなのか今の状況に対してなのか分からない頭痛に表情を歪めつつ言う。

「少しいい？ まず、前提がすつ飛びすぎ。あなたは誰？ それにその格好はどうしたの？ 銀髪だし明らかに日本人って感じしないけど、服とか怪我とか……何があつたらそうなるの？ 必要なら警察でも救急車でも呼ぶけど」

「あ、あの……それは、その……」

「おまけにここマンションの4階なんだけど、どうやって部屋に入ったの？」

「えっと……」

顔をあげた少女は、喘ぐように口をぱくぱくさせる。

目は泳ぎ、しどろもどろだった。

一度に言い過ぎただろうか。

私は軽く咳ばらいをしてから、問いかける。

「ごめんなさい。まずは名前から教えてもらえる？」

「は、はい……！ あ、あの、わたし、エトナって言います」

「エトナちゃんね。あなた、何があつたの？」

「それは、その……」

名前は聞き出せたものの、エトナはまた黙り込んでしまった。

「何か、言えない事情があるの？」

彼女の惨状を見るに、会って間もない私には言えないようなことだつてあるかもしれない。それならそれで仕方ないと思つていると、しかし彼女はおずおずと口を開いた。

「言えないわけではない……です。ただ、信じていただけるか……怖くて……」

「ほんとのことを話す意思はあるのね？」

「は、はい……！」

エトナは必死に頷いた。

この様子だと、嘘をつくような心配はないだろう。

私はしゃがんで彼女と視線の高さを合わせ、穏やかな声で言った。

「なら、ちゃんと聞いてあげるから言ってみて」

「わかりました……！」

エトナは、這い蹲った体勢からぺたんと座り込むような体勢になる。

そうして私のことをまっすぐに見つめ、言った。

「あの、わたし魔女なんです」

「………魔女？」

私は思わずぽかんとした。

この段階になって、お酒の飲みすぎで幻覚を見ているのかあるいは夢でも見ているのではないかと疑い出す。だがほっぺをつねっても痛いだけで、みずばらしい銀髪の少女は変わらず目の前にいた。

「信じていただけないのは承知しています……でも、本当なんです。私は元いた世界では魔女と呼ばれる存在で……それで、この世界についさつき逃げてきたんです」

「……ごめん。さすがに『はい、そうですか』とは言えないんだけど、あなたが魔女だったこととか、別の世界の人だっという証明はできる？」

酔って頼りない頭をどうにか回し、尋ねる。

だがエトナは、力なく項垂れて首を横に振った。

「それは……少し、難しいです。世界を渡る魔術 『狭間跨ぎ』
ウオルストラ
っていうんですけど、それを使ったばかりなので魔力が尽きてしま
っていて……今は簡単な魔術1つお見せできません……」

ひどく申し訳なさそうにするエトナを見て、なんだか私まで申し
訳なくなってくる。

だが、だからといって質問を止めるわけにはいかない。

「別の世界から渡って来たってことだけど、言葉が通じるのはどう
して?」

「それは、『狭間跨ぎ』
ウオルストラ
の効果です。……術者が異世界で問題なく
過ごせるよう、言語や一定の知識がインプットされるようになって
いるんです。えっと……異地適応ステイルと呼ばれてます能力だとか……」

「……この家に突然現れたのは偶然なの?」
「はい……。本当は行き先もある程度選べるはずなんですけど……
私の魔力不足のせいかな、不安定になってしまっ……すみません、
本当に。……迷惑で邪魔で厄介なのは、自分でも分かっています……」

エトナの声が、若干湿っぽくなる。

「……………」

私は唇を軽く噛みつつ考える。

話の内容は突拍子もなかったが、不思議なことに彼女が嘘をつい
ている気配は感じられなかった。そもそも、嘘をつくならつくでも
っと現実味のある嘘をつくものだろう。すべてを話したわけではな
いだろうが、今必要なことは引き出せたように思う。

エトナは異世界から来た魔女で。
私の家に、住みたいらしい。

整理すれば、詰まるところこうなるわけで……はて？

私は、ふと湧いた疑問を口にする。

「ねえ。あなたの話がほんとだとして、1つ訊きたいんだけど」

「は、はい」

「どうしてここに住みたいの？ 異世界から逃げてきたとして、こんな狭ッ苦しい部屋なんかより快適な場所なんていくらでもある
うぷっ」

言いかけたところで、マズいことになった。

「ごめ、ちよっ、待ってて」

私は言うやいなや、トイレに駆け込む。

このせり上がってくる感覚は 嘔吐。

便器の前に蹲った私は、先ほどまで飲み食いしていたものをリバー
ースした。

涙と鼻水まみれになりながら、アラサーの独身女が吐き散らす惨
状が繰り広げられる。

「うう……ぢぐじょう……」

粗相を乗り越えいくらかスッキリした私は、洗面所でうがいをして
冷水で顔を洗ってからエトナのもとへ戻った。

「ごめん、ただい」

言いかけて、止まる。

エトナが、床の上で力尽きたかのように小さな寝息を立てていた。決して寝心地がいいとは言えない床の上で、すやすやと。よほど疲れていたのだろうか。

「……まあ、今日はもういいか」

酔いと頭痛と眠気が、私を『何もかも保留』という選択肢に誘った。

それにエトナの寝顔があまりに穏やかだったため起こすも忍びない。

しかし、このまま少女を放置しては身体を痛めかねない。ベッドに運んであげよう。

「やっぱり臭うなあ、って軽っ」

少女をそつと抱きかかえた私は、思わず小声でつぶやいた。曝け出された手足の細さからして分かっていたはずだが、想像を上回る軽さだった。お世辞にもいい食生活を送ってきたようには感じられない。あと、やっぱり臭い。

「これどう考えても面倒ごとだよねえ……」

苦笑してぼやきつつ、エトナをベッドに横たえて布団を掛ける。この布団やシーツは後日洗濯だと思いつつ。

「……私も寝よ」

ふらふらした足取りでリビングへ向かった私は、風呂にも入らないままソファで眠りについた。

ああこれ、起きたら身体バツキバキだなあ……。

お腹がペロペロらしい

日差しの眩しさを、まぶた越しに感じる。

「んっ……うっ……」

私はゆっくりと目を開き呻く。
頭痛がする。

完全に二日酔いのそれだ。
顔をしかめてスマホを確認すると14時を過ぎていた。

「昨日の私のバカヤロウ……水……」

恨みはましくぼやき、立ち上がる。

ソファで眠ったせいで身体がバキバキだった。肩や首回りの違和感が著しい。

二十代前半まではどこで眠ったって快眠できたはずなのに……若さがほしい。

「……そもそも、なんでソファで寝たんだけ」

首をグギギギと鳴らし、幽鬼のような足取りで台所のウォーターサーバーまで歩く。

冷水で喉を潤し、ズキズキと痛む頭で昨晚のことを思い出そうとして。

「あ、あの、おはようございます……!!」

「ごぶっ、げぼげぼ　え、は？　なに？」

不意打ちの声に、私は水を吹きだして咽せた。
ボタボタと品の欠片もなく水滴をフローリングに垂らしつつ振り返る。

すると、ソファのすぐそばに千切れ解れボロボロになった布切れ一枚を纏った、くすんだ銀髪の少女が正座していた。
寝ぼけてフラフラしていたせいで、今まで気がつかなかった。

「……誰？」

警戒と困惑を露わにして尋ねる。

少女は正座のまま背筋を伸ばし、緊張した様子で。

「さ、昨晚ご挨拶させていただいた魔女です。エトナです……！
昨晩は突然の来訪、たいへん失礼いたしました……！　それで、あの、ベッドまで……あ、ありがとうございます……！」

そう言っつて、深々と頭を下げた。

「魔女？　エトナ？　それにベッドって……あっ」

ようやく記憶が戻ってくる。

映画を観ながら泥酔した後、寝室で物音がしたかと思えば倒れた数多の本に沈むようにして彼女　エトナとやらがいたのだ。話の途中で彼女が眠ってしまい、私も酔いが回っていたためうやむやのまま夜を明かしたのだが……。

「夢じゃなかったんだ」

改めて見るエトナは、日本人離れした端正な容姿をしていた。

歳は10代前半といったところか。

汚れみずばらしい格好をしているが、それでもなお褪せない魅力を感じる。

髪を手入れし着飾れば、きっと万人の目を惹く見目麗しい少女になるだろう。

ただ、明らかに痩せ細っているのが気になる。

それに、顔色があまりよくないようにも見えた。

「っていつか、まだいたんだ……」

まさか私が目を覚ますまで律儀に待っているとは思わなかった。

普通はこう……逃げるなり消えるなりするんじゃないの？

「すみません……わたし、どこにも行き場がなくて……」

「そういえば昨日もそんなこと言ってたね」

「昨晚はお話の途中で眠ってしまった……すみませんでした。それで、改めてもう1度、ここに住ませていただきたいとお願ひしたくて」

「突然来た見ず知らずの子に住ませてくださって言われて、はいそうですかって頷くと思う？」

「…… 思いません。だ、だから詳しいお話を」

そこまで言つて、エトナのお腹がくくくきゅる……と鳴った。

途端に彼女の頬は赤く染まり、弱々しい誤魔化し笑いが浮かぶ。

「お腹減ってるの？」

「いえ、その……… はい」

「起きてから、何か食べた？」

「いえ、なにも……」

「食べるもの持っていないの？」

「ないです……」

弱々しく首を振るエトナ。

そのお腹が、もう一度鳴った。

「……すみません。気にしないでください」

そう言つて、彼女は作り笑いを見せる。

あまりにぎこちなく、痛々しい。

さすがに見ていられなくて、私は思わず訊いた。

「ご飯作つてあげようか？」

「……っ！」

一瞬、エトナの瞳が輝いた。

だが、彼女はすぐに己を戒めるように俯いてしまう。

「ご飯は食べたいです……でも、その、お返しできるものがないので……いただけません。……それに、ただでさえ図々しいお願いをしているのに……」

「お返しとか余計なこと考えなくていいから。ご飯食べたほうがちやんと話せるでしょ？ お腹空いてしんどそうにしてるの見てると、私も落ち着かないし」

言つて、やれやれといったふうのため息をこぼして微笑する。

するとエトナは、拾われることを期待する捨て子犬みたいな瞳で見上げてきた。

「……本当に、いいんですか？」

「まあ、あり合わせで適当に作るから変に期待されても困るけど。」

あと、食べたらちゃんと話すこと。いい？」

「はい……！　ありがとうございます……！」

エトナが、初めて混じりけのない澄んだ笑顔を浮かべた。

「ソファにでも座って待ってて。すぐ作っただけから」

そういう顔してるほうが1000倍可愛いじゃないかと思いつつ、私は台所に向かう。

が、すぐに1つ言い忘れていたことに気がついて振り返った。

「自己紹介がまだだったね。私、仲谷塔子っていうの。堅苦しいの苦手だから、塔子って呼んで」

「は、はい……！　えっと、その、改めてありがとうございます。」

「トコさん……！」

エトナが私の名前を口にした。

それに微かなくすぐったさを感じつつ、冷蔵庫を開けて手早く作れるメニューを吟味する。

今日が休日で、心底よかった。

じゃあ、とりあえず一緒に住もうか

「お待たせ」

ソファの前に小さい丸テーブルを置き、料理を並べる。

冷凍ご飯で作った豚肉炒飯、昨日コンビニで買った蒸し鶏とレタスのサラダ、味噌を溶いて乾燥具材を投じただけの味噌汁。あと、お水。

10分弱で完成した献立を前に、エトナはきよとんとしていた。

「どうかした？」

食べられないものでもあったのだろうか。

難なく会話が成立していたせいであまり意識していなかったが、彼女は日本人ではない。どこるか、彼女の話が正しければ異世界人だ。

食文化が根本的に違う可能性すらある。

それとも単純に期待を大幅に裏切る質素なメニューだったのだろうか。

あまり褒められた食生活を送っていない私なんかの雑メシではなく、ふわっふわのパンケーキや卵たっぷりフレンチトーストをご所望だったとか……？

などと心配になる私をよそに、エトナはおずおずと尋ねてきた。

「……あの、これぜんぶ食べていいんですか？」

「そうだけど、もしかして多かった？」

「いえ、そうではなくて……こういう、ちゃんとしたご飯久しぶり

なので、その……びっくり……そう、びっくりしてしまっ……いい匂い……それに、湯気が立ってるご飯なんていつ以来でしょう……」

テーブルに顔を近づけたエトナは、ふにゃっと笑う。

「……今まで何食べてたの？」

「カビた固い黒パンとか、たまにクズ野菜のスープ……とか。あとは、あんまり思い出したくないようなものばかりで……ちよっと色々あつて貧乏だったの、その……あはは」

今度は誤魔化すように笑った。

笑い事でもないだろうに。

彼女の細すぎる手足が、満足な栄養を摂っていなかったことを饒舌に物語っていた。

だが、ここでこれ以上何か言うのは野暮だろう。

言葉よりも、エトナには食事が必要だ。

私は座布団に座りながら促す。

「早く食べなよ。温かいほうが美味しいから」

「は、はい。えっと　魔を統べし尊き御方よ、此の糧への導きを感謝致します」

エトナは何かの映画で見た修道女のように目を閉じ、両手を組んで祈りを捧げた。

それからスプーンを右手で掴み、炒飯をすくって口に入れる。

どこかぎこちなく咀嚼し、こくと飲み込んだ。

それからエトナは、

「ほあ……」

と、吐息をこぼし頬を緩めた。

かと思つと炒飯の皿を左手で持ち上げ、見た目にそぐわぬ豪快さで一気にかきこみ始める。

「おお……！」

食べっぷりのよさに、思わずビビる。

エトナは炒飯を一気に平らげ、フォークを持ち替えてサラダを黙々ともしゃもしゃ食む。味噌汁はお椀を両手で抱えて気持ちいいくらいに飲み干し、最後に喉を鳴らして水の入ったコップを空にして。

嵐が過ぎ去つたかのようなテーブル上を見て、私はぼかんとする。だが、その驚きを上塗りするようにエトナは急に泣きじゃくりはじめた。

「え、ええ？ どうしたの？ ちょっと、急に食べてお腹痛くなつたの？」

それとも美味しくなかつたとか？

「あの、ごめんなさい……！ ちがうんです、そうじゃなくて……！」

エトナは銀髪を振り乱して否定する。

それから両手の指で一生懸命涙を拭いつつ。

「ごめんなさい、びっくりさせてしまって……こんなおいしいご飯、本当にひさしぶりで……あたたかいご飯がこんなに幸せだなんて思

わなくて……あきらめずに生きててよかったなって思ったら、我慢できなくなつて……ぐすつ、ごめんなさい……ちよつとだけ、待ってください……」

そう絞り出し、流れ出る涙を細い指で何度も拭う。

「……なにそれ」

私はエトナを見つめ、ぽつりとこぼした。

喉の奥がきゅつと狭まり、息苦しくなる。

胸が詰まるとは、こつという感覚なのかと初めて自覚した。

身なりや言動から、ログな暮らしをしてこなかったのだらうとは察していた。

だが食事一つで、それも私が即席で作ったお世辞にも立派とは言えないご飯でここまでのリアクションをされるのは、さすがに予想の範疇を超えている。

きつと、よほど疲れていたのだらう。

だから昨晚、ちよつと目を離れた隙に床の上なんかで眠ってしまったのだ。

きつと、よほど腹を空かせていたのだらう。

だから、アラサー女の雑メシごときでここまで泣いたりするのだ。

「……」

ふと、思考が回る。

疲れ果てて空腹で。

なのに彼女は昨晚、それを一言も訴えたりはしなかった。
あくまで私に事情を説明し、言葉を尽くすことだけに終始しよう
としていた。

今日だって私が起きるまでこの家にある食糧には一切手を付けた
様子がなかった。

律儀と言ってしまえば、それまでかもしれない。

だが、そんな簡単な言葉で済ませていいことでもない気がした。

「……ねえ。どうして私が起きるまでお行儀よく待ってたの？ そ
んなにお腹が空いてたなら、勝手に冷蔵庫なり棚でも漁って何か食
べればよかったじゃない」

疑問を、そのままぶつける。

エトナはどうか涙を止め、潤んだ瞳のまま答えた。

「そんなことできません……そんなことしたら、怒られて追い出さ
れてしまいます……。トーコさんに嫌われたら、ここに住ませてほ
しいっていうお話も聞いてもらえなくなりますので……」

「その住みたいっていうのが分からないんだけど。異世界から来た
あなたには他にいくらでも行き場があるんじゃないの？ こんな狭
い部屋じゃなくて」

「……行き場なんてありません」

力なく笑って、エトナは立ち上がった。

どうしたのかと思えば、窓を開けてベランダへ出て行く。

「何してるの？」

「見ていてください」

短く言ってエトナは、ベランダの手すりの向こう側に右腕を伸ばした。

途端、手すりを越えた右腕が青い炎に包まれた。

「いぎっ」

エトナが苦鳴を上げ、右腕をベランダ内に引っ込める。同時に、青い炎は幻だったかのように消えた。

だが、焼け焦げた右腕はそのまま。肉が焼ける独特の匂いが、私にまで届く。吐き気がした。心臓が早鐘を打つ。

ベランダで蹲ったエトナは、脂汗を浮かべて言う。

「『狭間跨ぎ』^{ウォルストラ}という言葉は……覚えていますか？」

「……あなたがこの世界に来るために使った魔術だっけ」

「そうです。あれには莫大な魔力が必要で……でも、わたしにはそんな魔力ありませんでした。それでも無理やりに不完全な『狭間跨ぎ』を発動させたので……。その代償として、今のわたしはトーコさんが住んでいるこの部屋以外では、生きられないようになってしまっているんです」

「……あの炎はなんなの？」

エトナの焼け焦げた右腕から目が離せないまま、震える声で尋ねる。

「わたしが持っていた文献には、『鉄槌の焰』^{マレスファイア}と載っていました。

……本来存在してはならない異物を跡形もなく排除する、浄化の炎だそうです。どの世界にも存在する、わたしのよような異世界からの

来訪者を消し去る世界維持機能だとか……。『狭間跨ぎ』を正しく発動させれば、世界維持機能を欺いてどこにでも行けたんですけど……」

「でも、あなたの魔術が不完全だったから、私の家から出ると燃やされるようになった……？」

「そうです……」

「だから、ここに住みたいってわけか」

エトナが弱々しい微笑みとともに頷いた。

ようやく合点がいく。彼女がこの家に固執するワケが、これ以上ないくらいに理解できた。あんな炎に焼かれる以上、出られるはずがない。

そこで、ふと気づく。

ベランダで蹲ったままのエトナの右腕が、いつの間にか元に戻っていた。

いや、正確には戻り始めていたというべきか。

まるで巻き戻し映像のように、焼け焦げていたはずの腕が透き通った肌へと復元されていく。

「エトナ、その腕……」

啞然とする私に対し、エトナは曖昧に笑う。

「わたし、こう見えて不死なんです」

「……不死？ 不死って、死なないってこと……？」

「……そうですね」

私の言葉に、エトナは笑みに悲哀を滲ませながら言った。

「死ねなくて、魔女で……それで、元の世界で色々な面倒ごとになっ
てしまっ……だから、逃げてきたんです」

エトナがベランダからリビングへ戻ってくる。
そうして私の目の前に膝をつき、縋るように見上げてくる。

「もう、どこにも行き場がないんです」

そう言って、額をフローリングにくっつけて。

「だから、どうか……わたしをここに置いてください」

くすんだ銀色の長い髪が垂れて広がる。

エトナは、頭を下げたまま震えていた。
そのつむじを見つめ、私は。

「そっかー。……じゃあ、一緒に住もうか」

至極あっさりと、そう言った。

「……あ、え、本当ですか？」

エトナが拍子抜けを通り越えて、信じられないといった表情をし
て顔を上げた。

「だってさ、もし私があなたのことを追い出したらあの炎でたいへ
んなことになるよね」

「……全身火だるまになりながら、終わることない地獄を味わいま
す。……不死なので」

「それマズいよね。後味最悪だし、トラウマになりそう」

私は立ち上がって伸びるする。
それから柔和に微笑んで見せて、

「それにさ、まあいいかなって気分なんだよね。一緒に住んでみてからあれこれ考えてみたって遅くないっていうか。ちょうど1人暮らし寂しいなって思ってたし、家事とかしてくれると助かるし。なにより、あなた可愛いし」

「……………っ!？」

「可愛いってというのは、結構大事なのよ？」

くすくす笑い、頬を赤らめたエトナの前に屈んで右手を差し出す。

「そういうわけで、よろしくねエトナ」

エトナは私の顔と手を交互に見た後、綺麗に復元した右手を伸ばしてきた。

彼女の小さな手はほんの少しやわっこくて、温かかくて。

「……………本当に、いいんですか？」

「あなたの事情とかまだよく分からないけど、ひとまずってことで1人暮らしの寂しいお婆さんの家によっこそ。なんてね」

「そんな、トーコさんすごく綺麗なお姉さんです……………!! 優しいし、ご飯も美味しかったです……………だから、あの、その……………うあっ……………」

言葉の途中で、エトナがまたぼろぼろと泣き始めた。
繋いだ手の上に、彼女の涙が落ちてくる。

「ごめんなさい……………あの、ありがとっございます……………!! 本当に、

ありがとうございます……！！」

エトナは、涙まじりの笑顔でそう言った。

くたばれ現実と呪い、出会いがほしいと望んだら異世界から小さな魔女が転がり込んできた。

なら、まあ、それでいいかなって感じた。

魔女は傷だらけ

「まずはお風呂ね」

エトナと一緒に暮らすと決めた私は、すぐさま言った。

「お風呂……ですか？」

「だって、あなた臭うし」

「あっ……」

私の率直な一言に、エトナは申し訳なさそうに縮こまる。

「すみません……わたし、汚かったの忘れてました」

「責めてるわけじゃないの。私の部屋だっでご覧のありさまだし」

空き缶などが散乱した混沌たるリビングを見て、苦笑。

「シャワーの使い方は分かる？」

「たぶん、大丈夫です……。この世界のシャワーがどういったものは、『狭間跨ぎ』の知識適応能力のおかげでわかりますので。……」

「世界が違つと、ぜんぜん仕組みも違つんですね」

「エトナの世界のシャワーはどんな感じだったの？」

「魔石でお湯を出していました。魔石に火や水の魔術文字を刻んで、魔力を込めるだけで火や水が出せるようにして……この世界と違つて、日常に魔術が根付いてたんです」

「ファンタジーだなあ。じゃあ、エトナも魔術って使えるの？」

「わたしは、その……」

なんとなくの興味で尋ねただけだったのだが、エトナは言葉を詰まらせた。

それから誤魔化すように笑って、

「わたしはあまり魔術は得意じゃなくて……『狭間跨ぎ』だって不完全な状態で使ってしまうくらいに未熟ですし、そのせいで今は魔力が尽きていて……。しっかりと休めば魔力は戻るはずなので、その時にはなにか魔術をお見せできればと……」

「そっか。無理はしないでほしいけど、ちょっと楽しみにしとくね」

エトナの様子に若干の違和感を覚えはしたものの、気のせいだろう。

「そつだ。お風呂、お湯張ってあげようか？ ちょっと待ってもらうことになるけど、肩まで浸かりたくない？」

「い、いえ、シャワーだけでも充分です……！」

「そつ？ 気持ちいいと思うんだけど」

「お、お気持ちだけいただきます。臭いと迷惑になってしまいますし……はやく綺麗にしたいので……」

エトナは、自身の汚れた着衣や手足に目をやり、羞恥と申し訳なさから身体を縮こまらせる。

早く綺麗にしたいという気持ちはよく分かるので、私はそれ以上湯船を勧めることはしなかった。

「ゆっくりお風呂は、また次の機会にしようか。浴室は廊下の右手、洗面所の奥ね。タオルは入り口のラックに置いてあるから、自由に使っちゃおうだい」

そう言って、浴室の場所を手で示す。

しかしエトナは、すぐに向かうことはせずにその場でもじもじしながら躊躇いがちに視線を寄越してきた。

「どうしたの？」

「あの……実は、着替えがなくて……すみません……どうすればいいでしょう……？」

「あー、そうか」

私は、彼女の格好を見て苦笑する。

汚れた布切れ一枚でかろうじて肌を隠しているエトナは、身体一つでこちらの世界に渡ってきたため私物の類など一切持っていない。

「ちなみに、下着とかって付けてるの？」

「……（ふるふる）」

エトナは頬を赤らめ、無言で首を振った。

ノーブラなのはなんとなく察していたが、まさかノーパンツだったとは。

「よし、じゃあとりあえず私のを貸すから、ひとまずそれで我慢してもらってことで。シャワー浴びてる間に用意しとくから。」

「我慢だなんてそんな……あの、ありがとうございます」

「いいのいいの。ほら、シャワー浴びてきなさい」

「はい……！」

エトナはぺこっと一礼した後、とことこと洗面所兼脱衣所に向かっていく。

その背中を見送り、私は寝室に入る。

昨晚エトナが使った寝具を洗濯しなければならない。

律儀なことに、布団は綺麗に畳まれていた。

だが、汚れたエトナが一晩使っていたためどうしたって臭う。

布団やシーツを外してそれぞれ予備の物に交換し、汚れた布団は大きなビニール袋に放り込んだ。後でクリーニングに出しておこう。たまに会社の後輩が泊まりに来るため、それ用に準備してあった布団がこういった形で役に立つとは思わなかった。

シーツなどの、自宅の洗濯機で洗えるものを抱えて洗面所へ向かう。

洗濯機に放り込み、スイッチを入れた　その時。

「ひゃうっ!?!」

突然、扉一枚隔てた浴室からエトナの悲鳴が聞こえた。

それから、転んだらしき派手な音。

「すごい音したけど、大丈夫?」

私はとっさに浴室の扉を開けた。

途端に、顔面に冷水がぶっかかってくる。

「……………何してんの、エトナ」

「あの、ごめんなさい!　お湯を出したはずなのに冷たいお水が出てきて、びっくりしちゃって……………」

どうやら冷水に驚いた拍子に転んでシャワーを手放してしまったらしい。

そして、タイミング悪く扉を開けた私にシャワーが向いたわけだ。

エトナは浴室の床に尻餅をついて涙目になっていた。ちょうど私

と向かい合う形だったため、微かに膨らんだ胸やしなやかな腿などが目に映る。……だがそれ以上に、素肌にごびりついた汚れや手足の生傷、そして胸元や脇腹などに痛々しく残された傷痕が目に残った。

「エトナ、その怪我……」

思わずこぼれた言葉に、エトナは慌てて身体を抱いて傷を隠そうとする。

だが、すぐに細い両腕だけでは隠しきれないと気づいたらしく、曖昧な笑顔を作る。

「すみません、お見苦しくて。……ちょっと色々あって、でも今は平気ですから」

「平気って、でも」

「……忘れたいものばかりなので。……すみません」

「っ……」

弱々しい笑みを作るエトナに、私は声を詰まらせた。

そんな顔をされてしまっただけ、これ以上訊くことなんてできない。

「……無理はダメだからね。痛かったり苦しかったら、ちゃんと言うようにして」

「ありがとうございます。……すみません、気を遣わせてしまって」「別に」

気を遣ったわけではない。
本心から心配なだけだ。

だが、エトナの事情にいきなり踏み込みすぎたのも確かだった。会って間もない相手に何もかもを語るほど、人の過去は軽くはない。

ましてや、見るからに過酷な日々を生き抜いてきたであろう彼女の過去なら、なおさらだ。

いつか彼女の痛みを少しでも和らげてあげられるようになれたらなと、漠然と思う。

切り替えよう。

私は気を取り直して給湯器のパネルに目を向けた。どうやら運転ボタンが押されてない。お湯が出ないわけだ。

知識として給湯器パネルの存在をインプットされていないのか、それとも単にそこまで意識が向かなかっただけなのか。

どちらにせよ、私がびしょ濡れになったことに変わりはないわけだ。

であれば、取る手段は1つだろう。

「うん、こうなったら一緒にシャワー浴びよっか」

私も昨日は風呂どころか化粧も落とさず寝てしまったわけで。

スキンケアで信頼関係を築く第一歩になるかもしれないし、一石二鳥だ。

一緒にシャワー

「あの……トーコさん、これは逆ではないでしょうか……？ その、わたしがお世話になる立場なんですから、わたしがお背中を流すべきでは……？」

「どう見ても流すべきはあなたの汚れなんだから、気にしないの」

バスチェアにエトナを座らせ、私はその背後に膝立ちになった。

ボデイタオルをたっぷり泡立たせ、彼女の小さな背中を撫でるように洗う。

「んっ……くう……」

エトナの唇から、吐息まじりの声が漏れる。

「傷に沁みた？」

「沁みたというかくすぐつたいというか……と、とにかく平気です」「ならいいけど。痛いときは痛いって言ってね」

鏡越しにほにゃつと笑いながら頷くエトナを確認し、手を動かす。ほっそりとした肩、浮き出た肩甲骨、脇腹、臀部……上から下へ、丁寧に泡で覆っていく。

それなりの期間身体を洗えていなかったのだろう。泡が黒茶色っぽく濁る。

「これは洗い甲斐があるなあ」

「お恥ずかしいです……」

「ダイヤの原石を磨いてるみたいで楽しいけどね」

「ダイヤ……ですか？」

「だって、エトナって綺麗にすればきつと見違えるほど可愛くなりそうだし」

「そんな、綺麗とか可愛いとか……わたし、そういうのとは無縁です……」

身を縮こまらせて、エトナがこぼす。

だがその耳は、先ほどまでよりもほんのり赤らんでいるように見えた。

年相応の女の子らしさを感じて微笑ましくなりつつ、一度泡をシヤワーで流す。

瑞々しい肌が、露わになる。

それは同時に傷痕をより鮮明にもしたが、それは仕方あるまい。

「それじゃ、前も洗うからこっち向いて」

「へ？」

私がさらつと言つと、エトナがきよとんとする。

それから慌てて両腕で胸を抱いて隠しつつ、首を振った。

「さ、さすがに前は自分でします！ させてください！！ さすがに、その、いけません！！」

「つべこべ言わないの。我慢なさい。あっ、こら抵抗しないの。あんまり往生際が悪いと無理やり押し倒して隅の隅まで念入りに見ながら洗っちゃうわよ？」

バスチェアから立ち上がろうとするエトナの肩を押さえつける。

華奢な見た目通り、彼女をバスチェアに押し戻すのは簡単だった。

「で、でも、抵抗しなくてもどのみち洗うんですよね!？」
「もちろん。それになんでもしますって言ったでしょう。だから、大人しく私に洗われなさい」
「あうう……」

羞恥たつぷりに呻きつつも、エトナは観念したようだった。
バスチェアの上でもぞもぞと小ぶりなお尻を動かして、180度ぐるん。

そうして、私と向き合う形になる。

彼女の身体は、やっぱり細い。

肉付きが薄く多少ではあるがあばらが浮いている。胸のふくらみも申し訳程度。

「そっいえばエトナって何歳？」
「えっと、14です」
「私のちようど半分かー。若いなあ」

微笑しながら言いつつも、内心ではエトナの栄養不足を心配する。肉とか、たくさん食べさせてあげたらいいかな。

そんなことを考えつつボディタオルを再度泡立たせていると、ふとエトナの視線を感じた。

彼女は恥ずかしそうに、だが目を離せないというふう私をもっと詳しく言えば、私の胸を見ているようだった。

「私の胸がどうかした？」
「はっつ、あ、こ、ごめんなさい……なんでもないです……」

エトナはぶんぶんと首を横に振って否定する。

「ほんとに？ その割には、私のおっぱいまじまじと見てなかった？ ほれ、言ってみ。別に怒ったりしないんだから」

悪戯っぽく笑いかけながら、問いかける。

するとエトナは、顔を真っ赤にしつつもおおずおおずと囁いた。

「その……トーコさんの胸、おおきくてやわらかそうでいいなって……その、わたし小さいから……。って、あ、や、ごめんなさい。い、今の無しです。へ、変なこと言っちゃいましたごめんなさい！」

口にした途端、エトナは目を白黒させて手をわたわたさせる。

「ぷっ、ははっ。そっか気になるんだ、あははっ」

私は妙にツボってこらえきれずに笑ってしまふ。

それから、不意打ちでエトナを抱き寄せた。

無駄に育って正直邪魔だと思っていたGカップの脂肪に、エトナを埋もれさせる。

「ふひゃっ、トーコさん！？ あのこれ、さすがにダメです……！！
！ わたし汚いですし、ふわふわでダメに……なります……！！」
「どうせ洗うんだしいいのよ。うん、よしよし。そっかそっか、エトナはおっぱいが気になるお年頃かあ」

「だ、だってトーコさん綺麗で格好良く……おまけに胸まで大きくて、なんだかズルいっていいですか……あうあう……これ、やーらかくて……ふあああ……」

子猫がじゃれつくように甘もがきするエトナ。

その声が、段々とろけたものになっていく。

そういえば会社の部下（女の子）と温泉旅行に行った時も、興味深そうに揉まれたなあ。やっぱり男女問わずおっぱいって気になるもののかなあ。

なんて考えつつ、エトナの濡れ銀髪を撫でてみると、次第に彼女も脱力して身を任せてくるようになった。

「ふふ、よしよし」

今度は、細い背中を優しく撫でてやる。

エトナは一瞬ビクツと身体を震わせた後、ふう……と吐息をこぼす。

胸がくすぐつたい。

かと思えば、エトナが顔をあげた。

「あたたかくて……とても落ち着きます」

潤んだ瞳ととろけた表情で言っ、ほにゃつと笑うエトナ。それがあまりに可愛くて、きゅんとした。

「お気に召したようでなにより」

「……やみつきになりそうです」

「こんなのでよければ、いつでももしてあげるけど」

「……それだけで、こっちの世界に来てよかったなって思えます」

ゆるゆるな笑顔のまま言っ、エトナは躊躇いがちに私の腰に手を回してきた。

応じるように、私は少しだけ強く彼女を抱きしめる。

狭い浴室には、シャワーの音と二人の微かな息遣いだけ。

まだ出会って間もない少女と一糸纏わぬままで抱き合っているというのも冷静に考えるとどうなのかと思わなくもなかったけれど、やっとエトナがリラックスしているようで嬉しくなる。

彼女の肌にも刻まれた傷の数以上に、きっと彼女の心は傷だらけで。

そのすべてを癒してあげたいなどという傲慢な考え方はできないが、私にもできることがあるならしてあげたいなと思った。

たった14歳で、生まれた世界を捨てて 狭い一室でしか生きられない今を選んだエトナ。

そんな少女の手を成り行きとはいえ掴んだ私には、たぶん、相応の責任がある。

まあ、責任なんてたいそれた言葉抜きに、なにかしてあげたいだけなんだけれど。

しばらく抱き合った後、私たちはどちらからともなく肌を離れた。

お互いに今さらな羞恥が湧いてきて照れ笑いを向け合いつつ。私は改めて、エトナの身体を丁寧に優しく洗ってあげた。

いってきます

「やっぱり、美人さんだ」

シャワーを浴びて着替え、ドライヤーで髪を乾かしてあげた後のリビングにて。身綺麗になったエトナに、私は満足げに言った。

袖や裾がだぼだぼな薄手のパーカーを着た彼女は、照れ笑いする。

「お洋服ありがとうございます」

「ごめんね、サイズ大きいのしかなくて」

「いえ、とてもあたたかいです」

エトナはそう言って余った袖　いわゆる萌え袖の部分を口元に当てて表情を綻ばせる。かわいい。

だが、服のサイズが2人の間でまったく合わないのは由々しき事態である。

私の身長が169、エトナが145くらい。

手持ちのスカートやズボンはどれもサイズが合わなかったため、今のエトナは下にはショーツしか穿いていない。パーカーの裾が太腿のまんなかあたりまで隠してくれてはいるが、ちょっといかがわしいわけで。

「まずは服と日用品かな」

ぼそりつつぶやき、スマホを見る。

時刻は16時過ぎ。

駅前の店々で必要な物を最低限揃えた上で夕飯の買い物をするれば、

ちょうどいい時間になりそうだ。

「エトナ、ちょっと出掛けてくるね」

「お出掛け、ですか？」

目をぱちくりさせ、聞き返してくる。

「晩御飯の買出しにね。あとは、あなたの着る物とかも必要だから」とするとエトナはハツとした後、ふるふると首を振った。

「わたしの服だなんて、そんなご心配なくです……！ お貸しいただけるものだけで充分ですし、トーコさんのお金を無駄に使っていただけなくても……！！」

「いや、さすがに下着を毎度貸すのは複雑っていうか」

「じゃ、じゃあ下着穿きません。なくても平気です」

言っや、エトナはおもむろにショーツを脱ごうとする。

「ステイステイ、脱がないの。同居人がノーブラノーパンは気まずいってば。これから一緒に暮らすんだし、服とか日用品とかは言わば必要経費だから」

「でもわたし……大事なお金を使っていたらいてもお返しできるよ。うなことがないので……ただでさご厄介になっているのに……」

居心地悪そうにエトナは俯く。

私はため息をひとつつき、彼女の正面に立つ。

それから俯いているエトナのほっぺを両手でむぎゅっと挟んで、上を向かせた。

「と、トー」さん？」

「最初にちゃんとやっておくね。私これでも結構貯金はあるの。それこそあなた1人養うくらいには。あなたを住ませるって決めた時、当然お金のことも承知の上だから」

「で、でも、わたしにはそんな価値……」

価値という言葉が彼女の口から出たことに、少し寂しくなる。

そんな言葉、普通に生きていては出てこないはずだ。

「価値だなんて、そんなことは考えなくていいの。あなたが元いた世界でどういう風に生きてきたのかは知らないし、聞かれたくなさそうだから聞かないけど……でも、今のあなたは私の同居人。もつとえば、庇護が必要な子ども。私はあなたに似合う服を着せてあげたいし、美味しいご飯を食べさせてあげたいのよ」

「……いいんですか？」

「これでも甘えられたり頼られたりするの好きっていうかさ。だから、いっぱい世話を焼かせてくれると嬉しいわけ。あなたのためにお金を使わせてちょうだい」

「……わかり、ました」

若干潤んだ瞳で、エトナは言った。

私は彼女のほっぺから手を離す。

すると、エトナはぺこっと頭を下げる。

「ありがとうございます。……トー」さんがわたしに必要だと思っただものを買ってもらえると嬉しいです」

「ん。ちなみになんだけど、下着って色とかデザインの希望はある？」

「え、えっと……そういうのを選んだことがないので、その……と、トー」さんが選んでくれたものならそれで……」

「ふうん。じゃあ、とびきりエッチなのとか買ってきてちやおうかな」
「え、エッチなのはその、わ、わたし、その……！……と、トー
コさんが選んでくれたものなら、その……着けますけど……」

顔を真っ赤にしてもじもじするエトナに、私はくすくす笑う。

「冗談よ。あなたに似合いそうな可愛いのが買ってきてあげるから」
言っ、私は手早く外出の準備を済ませる。

どうやらエトナはこの世界の文字は問題なく読めるようなので、
寝室の本を好きに読んで待ってもらうことにした。

「それじゃあ、行ってくるね。冷蔵庫の飲み物とかも、好きに飲ん
でいいから」

ソファにちょこんと座ったエトナにそう言い残し、私はリビング
を出て玄関へ向かう。

靴を履き、ドアノブに手を掛ける。
そのタイミングで、背後から足音。

「どしたの？」

振り返り、廊下に立つエトナを見る。

すると彼女は緊張したふうに、

「あの、いってらっしゃい……お気をつけて、です」

そう言った。

それに私は軽い笑顔で応じて、

「いってきます」

家を出る。

通路を歩き、エレベーターを呼び出す。

一階から上がってくるエレベーターを待ちながら、私はふと思っ
た。

「いってきますって言う相手がいるの……なんか、いいな」

エトナ・1 留守番

ドアが閉まりカギが掛かる。

塔子の足音が遠ざかっていき、やがて聞こえなくなる。

その瞬間、エトナは腰が抜けたかのように廊下に座り込んだ。

「よかった……」

両手を胸にあてて、安堵をこぼす。

気を抜けば涙が溢れそうだったが、きゅっと唇を引き結んでこらえた。

美味しいご飯、温かいシャワー、清潔な衣服。

そして何より、一緒に住もうという優しい言葉。

どれもエトナが心から欲していたことで、でも自分には過ぎたる願いだと諦めていたものばかりだった。

なのに塔子は、そのすべてを一瞬で叶えてくれた。今まで出会ってきた数え切れないほどの魔術師が誰一人聞いてすらくれず冷笑や侮蔑を投げつけてきた願いを、である。

「トー「やん……」

貸してもらったパーカーの余った袖を、口元にあてる。

すんと鼻を鳴らすといい香りがした。洗剤か、それとも塔子の匂いか。どっちもだといいなとエトナはなんとなく思った。浴室で抱きしめてもらった時のやわらかさや甘い香りまで思い出してしまい、エトナのほっぺがほんのり紅色に染まる。

「あれ、すごく……ドキドキしました……」

微かに熱を帯びた声で言い、微笑する。

このまま生きるくらいなら、死んでしまうほうがいい。

そんな覚悟を秘めて、エトナは不完全な『狭間跨ぎ』ウォルストラを行使した。行き先は完全にランダムであり、異世界に辿り着いた瞬間に『鉄槌マレスの焰ファイア』で焼かれることも想定していた。

塔子には不死だと説明したが、唯一の例外として『鉄槌の焰』に焼かれ続ければエトナとて死ぬ。読み漁った文献によれば『不死』という概念自体を燃やし尽くすのだとか。『不死』の焼却には時間がかかるため焼かれる不死者は精神が先に砕け、見るに耐えない醜態を晒す……とも記述されていた。

自分がそうならなかったのは、幸運以外のなにものでもない。

「トーコさん……」

もう一度、恩人の名を親愛をこめてつぶやく。

胸がきゅっとした。

初めての感覚だったけれど、心地いい。

恋も愛も知らず、それどころか友人すらいなかったエトナにとって、この甘やかな感情がなんなのかまだ分からなかった。

ただ、大切にしたいのはたしかで。

「……なにか、トーコさんのお役に立ちたいです」

つぶやき、立ち上がってリビングに戻る。

塔子には寝室にある本を好きに読んでいいと言われたが、彼女が自分のために買い物をしてきているのを思うと、自分もあの人のために何かがしたかった。

「……掃除なら、わたしにもできますよね」

空き缶やつまみの空き袋が散乱したリビングを眺め、ぼつり。

『狭間跨ぎウォールド・ストラ』に内包された現地適応能力が発動し、ゴミの分別が必要なことが閃きのような感覚で理解る。

エトナは、コンビニの空き袋にテキパキとゴミを入れて部屋の隅に置いた。

たったそれだけで、惨憺たる様子だったリビングがそれなりになる。

「トーコさんて、結構ズボラなんでしょうか……？」

だとすれば、今後も自分が役に立てる機会はありそうだな。
嬉しくなつて、つい口元が緩む。

だが次の瞬間、右の胸に激痛が走り、エトナはその場に蹲った。

「うぐっ、かはっ……ひぐっ……」

胸を押さえ、歯を食い縛る。

呼吸が苦しくなり、視界が涙で滲んだ。

心臓を直接殴られたかのような耐え難い痛みが、断続的にする。

浅い呼吸を繰り返しながら、エトナはパーカーと、その下に着た薄いシャツを捲りあげる。膨らみかけた胸　その心臓のあたりを中心に、こぶしほどの大きさの黒く禍々しい紋様が浮かび上がって

いた。

それは苦しみ喘ぐエトナを嘲笑うかのように蠢いている。

「あぐっ……けほっ、はっ……じほっ……」

咳き込む。

それと同時に身体の奥底から冷たくおぞましい何かが入り込んで来て、エトナは慌てて口元に手を当てた。

「はあ、はあ………わかって、ます………」

顔を蒼白にし、声を絞り出す。

口から離れた手のひらが濡れていた。

それは唾液や胃液でもなければ血でもなく、黒く粘ついた液体だった。

よろよろと立ち上がり、転びそうになりながら洗面所へ向かう。

手と口を洗い、洗面台に痕跡が残らないように入念に水を流した後、エトナはその場にくずおれた。

「だいじょうぶです………わかっています………わたしは人でも魔術師でもなくて………魔女だっ………ことくらい………わたしが、一番わかっています………」

肩で息をし、自分に言い聞かせるように唱える。

「少しでいいんです。………少しだけ、待っていてください。せつかく、トーコさんみたいな素敵な人に辿り着けたんです。最後まで、夢を見させてくれたっていいじゃないですか………」

心臓に手を当て、ひたすらに乞う。

それから再び服を捲くって見ると、浮かび上がっていたはずの黒い紋様は幻だったかのように消えていた。

「トーコさんがいない時でよかった……」

蒼い顔に安堵を浮かべ、エトナは立ち上がる。

自分が何者なのか、塔子には絶対に言えない。いや、言う必要はない。

いずれ何もかも消え去ってしまうのだから。

「……トーコさんにはやく、会いたいです」

無意識につぶやいた後、エトナは台所に向かい、ぎこちない手つきで洗い物をはじめた。

買い物

マンションから徒歩十分。

最寄駅の周辺は日曜日ということもあって賑わっていた。行き交う人々の流れに合わせて進み、駅ビルの中に入る。

「まずは洋服かな」

道中あらかじめスマホで調べて目星をつけていたショップに向かう。

照明が淡く灯った落ち着いた雰囲気の内には、5月中旬ということもあって春物と夏物の服が半々ほどの割合で並んでいた。

私は店内を見回し、眉間に皺を寄せる。

「……まずい」

何がまずいって、いざ店に入ったはいいが何を買えばいいのか分からないのである。

普段着飾るよりも機能性重視で洋服を選んでいる私にとって、エトナに似合う服を選ぶだなんて難易度が高過ぎる。あの子ほどの美人さんなら、きっと何を着ても似合うのだろうが、せっかくなら申し分ないコーディネートをしてあげたい。

おまけに、下着選びまであるのだ。

「可愛いのを買ってきてあげる」だなんて茶化してはみたものの、自分以外のために下着を買うだなんて初体験。エトナの前で情けない姿は見せられないという年上の見栄を張ったはいいものの、ノー

プランだった。

……悔しいが、今年の流行を検索しよう。

そう思い、スマホを取り出したところで誰かが近づいてきた。

「なにかお探しですか？」

亜麻色の髪をゆるく巻いた私と同じ年くらいの店員が、朗らかに笑う。

この店の商品らしいニットとスカート姿の彼女のたわわな胸元には、『稲本』^{いなもと}という名札がピンで留められている。

餅は餅屋……私は、渡りに船だと思って言った。

「えっと、何着か服が必要になったので探してて。ああ、私が着るんじゃないんですけど」

「どなたかにプレゼントですか？」

「プレゼント……とはちょっと違うんですけど、とびきり可愛い女の子なんです。似合う服を選んであげたいんですけど、私お洒落に無頓着だから何を買いえばいいのか分からなくて」

「そうなんですか、ちなみにそのとびきり可愛い女の子というのは、どのくらい可愛いのでしょうか？」

「……28年間生きてきて、1番可愛くて綺麗だと思いました」

「将来お客様よりも美人になるとおもいますか？」

「必ずや」

私は間髪入れずに頷いた。

……ん？ ていうか、話の流れおかしくない？

「あらあら、それはたいへんですね。困りましたね」

一方で店員さんは両手を合わせて、ぽわぽわと言った。
あれ？ この店員さん大丈夫？

私は微妙に不安になり、辺りを見回して他の店員を探す。だが、
声を掛けられそうな人は見当たらない。

こうなったら、一度退店するべきか……。

「すみません、ちょっと別のお店も見てから」

改めて来ます　という言葉を発するよりも先に、店員　稲本
さんはスカートのポケットから赤縁のメガネを取り出して掛け、さ
らにメモ帳と小さいボールペンを取り出した。

先ほどまでのゆるふわな雰囲気はそのままに、彼女の瞳が鋭くな
った気がする。

「では、そのとびきり可愛い女の子の特徴をできるかぎり教えて
いただけますか？　身長や体型、お客様が抱いているイメージな
どなんでも構いませんので。わたしの全霊で、この店のすべて
のお品物から最高のコーデをお選びいたします〜」

にこにここと、お日様のような笑顔で彼女が言う。

その後方で、いつの間にか集まった他の店員さんたちが「店長が
本気モードだ」「……圧がやばい」「っていうか、あのお客さん美
人じゃない？」と何やら言い合っていたが、一体何が始まるのか私
にはさっぱりだった。

「お買いあげ、ありがとうございます〜　いまお包みますね〜

」

30分後、私は清々しい気持ちでお会計をしていた。

稲本さんの手際は見事の一言に尽きた。私が伝えたエトナの情報をもとに、春物夏物問わず何通りものコーデを提案し、時には背格好の似た店員の女の子に試着までさせて服選びに付き合ってくれた。

結果、店名とロゴが入った紙袋にはニットやワンピース、ブラウスにパンツ、チュールスカートやレギンスなど様々な服が包まれることになった。

「お店の外までお持ちしますね〜」

稲本さんがふわふわと言い、私たちは並んで歩く。

「ありがとうございました。下着のアドバイスまでしてくれて、ほんと助かりました」

「いえいえ〜、お気に召していただけただけだよ〜うれしいですよ〜。袋のなかにカタログを入れておきましたので〜、よろしければまたお越しくださいね〜。ネット通販もできますから〜」

その言葉に、カタログやネット通販ならエトナと一緒に選べるんじゃないかと気づく。

今回は急な買い物になったが、次はエトナの好みを把握するためにも二人で選びたいな。

「それでは〜、お品物です〜」

「ありがとうございます」

差し出された紙袋を右手で受け取る。

するとそのまま、稲本さんの両手が私の右手を包み込んだ。

「もしよろしければ、次はお客様のお洋服もコーディネートさせていただきますいね〜。わたし、綺麗な女のひとがだいたい好きですの〜」

「あ、えっと、はい。ぜひ、お願いします」

につこりと甘い声で言われて、私は思わずドギマギしながら返した。

それから手を離され、するりと距離を取られる。

余裕たっぷりで小さく手を振る稲本さんに会釈をし、私はシヨップを後にした。

稲本さんにオススメしてもらったランジェリーシヨップでめばしい下着を買い揃えた私は、歯ブラシなどの細々した日用品をドラッグストアで揃えた後、駅ビル地下の食品売り場へ向かった。

夕飯前の売り場は、この日のイチオシ商品を宣伝したり手を叩きながらタイムセールをアピールする店員や買い物客で大盛況である。

「……肉しかないな」

エトナの薄く細い身体を思い浮かべ、私は心に決めた。

ステーキだ。とびきり美味しいステーキを、たらふく捻じ込んでやろう。

「エトナの歓迎も兼ねたいし、豪勢にしよう」

地下食品売り場は生鮮食品を取り扱う店々と惣菜や生菓子などを扱う店でエリアが違う。私は先に生鮮食品フロアへ向かい、荷物が

多くなりそうだけどどうにかなるかと思いつつ買い物カゴを手にした。

ジャガイモやブロッコリー、玉葱など普通のスーパーで買うよりも割高だが色艶や大きさが立派な野菜をカゴに入れ、『ミート・ミート・ミート!』という看板が掛かった精肉店でサシがほどよく入ったステーキ用の肉を多過ぎるくらいに頼んだ。エトナがどれくらい食べるか分からないし、余っても明日以降食べれば良い。

包んでもらった肉には今まで見たこともないくらい高額な値札が貼られていたが、ちっとも気にならなかった。これを食べたエトナの顔を想像するだけで、早く帰りたくなる。

「あとはデザートと」

フロアを移動し、有名店や老舗などが数多く出店している惣菜・生菓子エリアへ。

明日以降のことも考えて日持ちするクッキーやフィナンシユ、そして今日食べる用にケーキも買う。イチゴにチョコ、モンブランにフルーツタルトとエトナが好きなものを選ぶようにバラバラに。それから、ふと目に入った絶品とろける卵プリンも2つ買う。

「こんなに買い物したの、いつ以来だろう」

駅ビルの出口に向かいながら、ひとりごちる。

両手には買い物袋がたっぷり。正直、重い。

「近いけど、タクシー使うかな」

エトナのためにも早く帰りたいし、このまま徒歩で帰れば筋肉痛

の恐れすらある。

そう思つてタクシー乗り場へ足を向けようとした矢先、背中に声が掛かった。

「あれ？先輩じゃないっすか？塔子先輩なにしてるんすか？」

「え？」

聞き馴染んだ声に振り返る。

するとそこには、『自堕落』と豪快な筆文字がプリントされたパーカーに黒いショートパンツ、そして茶色いリュックサックを背負つた見慣れた女の子が立っていた。

「やっぱり先輩だったっす。奇遇っすね」

碓氷此葉、ウヰツヒコノハ 21歳。

私がいる会社の部下は、ちろつと八重歯を覗かせて明るく笑つた。

後輩

「ありがとうね此葉。^{このは}助かったや」

「先輩にはいつもお世話になってるっすから、そのお返しっすよ」

隣を歩く此葉が、にぱつと笑う。

『自堕落』パーカーを外出着として我が物顔で着こなす愛すべき後輩の手には、私が買い過ぎた荷物の半分が握られていた。

「タクシー乗り場ヤバかったっすね」

「ヤバかったね」

私たちは二人して苦笑。

偶然会った後、少し話してじゃあまた会社で と別れようとしたのだが、タクシー乗り場に長蛇の列が出来ていたのである。どうやら近場で催し物が行われている影響らしかった。それで筋肉痛覚悟の徒歩帰宅を決行しようかとした矢先、此葉が荷物持ちを申し出てくれた次第。

彼女の家が私のマンションと徒歩15分弱しか離れていないからこそ成せることだ。

聞けば彼女は休日ということで朝は猫カフェ、昼はジム、そして先ほど定食屋でカツ丼定食（大盛り）を平らげてきたところらしい。満喫しておられる。

「そういえば昨日はたいへんだったらしいっすね。外注のライターさんが音信不通になって結局先輩が外注さんの分もぜんぶ書いたっすよ」

「あー、うん。まあ、なんかなくなってよかったかな」

昨日はトラブルがあって残業してたっけなとおぼろげに思い出す。あのあとエトナと出会ってしっちゃんかめっちゃんかだっただためすっかり忘れていた。

「っていうかそれ誰から聞いたの？」

「白咲シロサキさんからっす。ほら、ラインで。『あんたんとこのリーダーがキーボードクラッシャーしながら残業しててうるさい』って」「あんにゃろっ」

明日入社したら縦ロールに余裕たっぷりな表情が誰より似合う同僚に小言を言われるんだらうなと、渋い顔になる。

私と碓氷ウスヒ、そして白咲は同じシナリオ製作会社で働いている社員だ。

スマホ向けアプリやコンシューマーゲームのシナリオ、ドラマの脚本からノベライズや記事の執筆まで文字媒体を広く請け負っている会社で、私は社員と外注ライター数名で構成されたチームのリーダーとして納品物のクオリティや納期などを調整している。

碓氷は同じチームの部下で、白咲はもう一つのチームのリーダー。他の製作会社がどういった仕組みを取っているのかは知らないが、小さい会社であるウチは2つのチームが仕事を回している。

で、昨日は外注ライターに振り分けたソーシャルゲームのキャラクターフリーバーテキストやシナリオがいくら待っても納品されなかったため、エナジードリンクの力を借りてギリギリでクライアーントに納品したわけだ。

「にしても大荷物っすね先輩。一人暮らしだっけ聞いてたっすけど、どしたんすか？」

「えー、あー。夜に妹が彼氏連れて来るからさ。久々に会うし、ちよつとお姉さんらしく奮発してあげようかなってと」

まさか異世界から14歳の女の子が来ているとは言えないため、やや早口で嘘をでっちあげる。此葉は素直に「ほほう」と頷いてくれた。

「なんか、やつぱ先輩ってかっこいいっすね。仕事もできるし、ちゃんとお姉さんしてるし。尊敬するっす」

にやはは、と猫科っぽく口元を緩ませる此葉。

「いやいや、かっこよくない。此葉の知らないところでダメダメだらけだし」

料理は雑で部屋の掃除はできず、恋人もいなければ着替えもしないでチューハイ片手にスプラッタ映画を観てるような残念アラサーである。……改めて客観的に考えてみるとだいぶ悲惨だ。泣きそう。しかし可愛い部下はにゅふんと軽く笑って、

「自分はダメダメな部分があったほうが、グツとくるっすけどねえ。なんでも完璧！みたいなほうが怖いっすよ。絶対自分、ソリが合わない自信あるっす。その点先輩は自分がダラダラしてても許してくれるから理想の上司っすよ」

「あなたの場合はなんだかんだ締め切り前にクオリティの高い成果物を出してくるから放任してるだけよ。下手に口出さなくてもちゃんと間に合わせてくれるし。怠けてるだけだったら、遠慮なくシバくから」

「冗談めかして言ってやる。」

すると此葉はにんまりして爽やかに言った。

「先輩のそういうとこ、やっぱり好きっす」

「そういうとこって、どういうとこ?」

「ちゃんと自分のこと見ててくれて、信頼してくれてるってとこっすかね。自分、先輩以外の人と組むと『真面目にやれ』って怒られること多くてもよっとするんで、できるだけ先輩と一緒にお仕事したいなあ、なんて」

「……まあ、善処しといてあげる」

そうして言葉を交わしているうちに、マンションが見えてくる。

数十メートル手前の交差点の赤信号で止まった私は、「ありがとうここまででいいから」と言っつて、此葉から荷物を戻してもらうことにした。

此葉の手から、私の手へ肉や野菜で膨らんだ袋が渡る。

それと同時に、いきなり此葉が距離を詰めてきて私の肩のあたりに鼻先を埋めた。

そのまま彼女は、すんすんと鼻を鳴らす。

「……なにしてるの、此葉」

「あ、すみません。なんかいい匂いするなって思ったら吸い寄せられてたっす」

あっけらかんと言っつ此葉。

「匂いは、たぶん出かける前にシャワー浴びたからかな。っていうか前に温泉行った時もいきなり胸揉んできたし、相手が相手だったら怒られるからね?」

「こ心配なくっす。こういうことするの、先輩にだけなんで」

「それはそれでどうなのよ」

「親愛の証ってこととでよろしくつす。あ、信号変わったつすね。じゃあ自分はこれで！」

ビシッと敬礼をキメて此葉が180度ターン。

しかし私は、去ろうとする後輩の背中に声を掛けた。

「ちよい待って。これお礼にあげる」

「およ？」

慌てて更に180度ターンをして元通りに向かい合った此葉の手に、私はさっき買った『絶品とろける卵プリン』を握らせる。

「せ、先輩！？ これ駅地下のめっちゃくちゃ美味しいやつじゃないっずかー！！」

「そうなんだ。目に付いたから買ったただけなんだけど」

「そ、そんなあっさりと……ブルジョワっすね。あ、今さらやつぱ返してとか言うのなしっすからね？ もうこれ此葉ズ・プリンなんで」

そう言っつて此葉はプリンを大事そうに胸に抱く。

「取らない取らない やばっ信号点滅してるし。じゃあ今度こそまたね」

「はーいっす！ ひゃっほーい、先輩のとろけるプリン！！」

私が小走りに横断歩道を渡り、此葉は弾んだ足取りで来た道を戻っていく。

一度振り返ってみると、クソダサスタイリッシュ『自堕落』パーカー姿の後輩の背中が、もう見えなくなっていた。

元気なやつだなあ、としみじみしつつマンション内に入り、エレベーターに乗る。

するとそこで、ラインの通知音が鳴った。見れば此葉からだ。『こんど先輩の家行っていいっすか？』とあった。

「……………」

私は数秒画面を眺めた後、『考えとく』と濁して返した。家に呼ぶということは、エトナに会わせるということに他ならない。そのあたりは、エトナとも話し合うべきだろう。

4階につき、通路を歩く。
ポケットから鍵を取り出し、ドアを開ける。

「ただいま」

一言、リビングへ向けて言う。
すると軽く小刻みな足音とともに、エトナがやって来る。

「お、おかえりなさい！ トー」さん！

主人の帰りを待ち侘びていた子犬のようなキラキラした顔をするエトナ。

手が荷物で塞がってなかったらわちゃくちゃに撫で回してやりたいななんて思いつつ、私は改めて「うん、ただいま」と言った。

いってききますと同じで、ただいまと言う相手がいるというのはやっぱりいい感じだ。

いただきます

「わっ、部屋が片付いてる！ エトナがやってくれたの？」

帰宅した私は、劇的に綺麗になったリビングを見て喝采を上げた。生活力も整頓力も乏しい独身アラサー特有の悲惨だった部屋が、文化的な暮らしを営める程度に回復している。放りっぱなしだった空き缶などは分別され、纏められていた。

「……なにか、お役に立てたらと思って」

「わー、ありがとう。すごく助かった。あれ、もしかして洗い物まで！？」

洋菓子などを冷蔵庫に入れながらふと台所に目を向けると、ここ数日放置し混沌の化身となりつつあった洗い物が一掃されている。水切りスタンドには、皿やコップなどが種類や大きさごとに等間隔に置かれていた。パーフェクトだ。

「時間があつたので、その、やらせていただきました……！」

リビングと台所の境界線付近に立ったエトナは、ぶかぶかのパーカーの袖をゆらゆらさせながら、控えめに笑う。

お分かりいただけるだろうか？

この瞬間の、私の昂ぶりを。

普段絶対を買わないような高級肉を買い、さあ焼くぞと気合を入れたのはいいものの、まずは洗い物……それも、数日間溜めに溜めて

いたものを洗わねばならず、センチメンタルになっていたのだ。

そこに、エトナのファインプレイ。

嬉しくないわけがない。

私が思わずエトナを抱き寄せ、頭をわっしやわしやに撫でるのも当然と言える。

「わっ、ひゃっ、と、トーコさん!？」

「よーしよし、エトナは偉いなあ。いい子いい子、ほんといい子」

シャワーを浴びて丁寧に洗った成果か、さらさらで心地いい香りがするエトナの銀髪感触を楽しみつづ褒める。腕の中で彼女はもじもじと恥ずかしそうに呻いていたが、やがて、

「撫でてもらうのって、気持ちいいんですね……」

と、はにかみながら顔を上げた。

そのとろけた表情はとても魅力的で、もっと撫でたくなる。

だが、いつまでもハグハグなどでなでているわけにもいかないため、名残惜しさを感じつつエトナを解放した。

「さて、晩御飯作っちゃうからちよつと待っててね」

「な、なにかお手伝いできることありますか？」

「あるにはあるけど　今回は大丈夫かな。晩御飯はエトナを歓迎する意味も込めて作ってあげたいから、私一人でやるよ」

「……かんげい、ですか？」

エトナが不思議そうにつぶやき、首を傾げる。

「とびつきり美味しいもの食べさせてあげるから、楽しみにしてて」
「……わかり、ました」

どこか戸惑い気味に頷き、エトナはソファに向かう。
その後ろ姿に多少の引つ掛かりを覚えつつ、私は買い物袋から野菜を取り出してまな板に載せた。

切って、茹でて、焼いて。

料理の初歩だと思っていたこれらの行程は、『自分以外の誰かに作る』という要素が加わるだけで難易度が跳ね上がることを私は身を以って実感した。

普段から炒飯やオムレツなどを見栄えを気にせず大雑把に作っていた私だが、エトナに食べさせることを意識すると、途端に緊張してしまったのだ。昼はまだ迷い猫にエサを与える程度の感覚だったのだけれど、一緒に住むと決めた今となっては、料理ができるお姉さんとして振る舞いたい。

おそらくすぐにボロが出てしまうだろうが、少しくらい尊敬されるお姉さんムーブがしたいのだ。分かってほしい。

思い返せば、身内以外に料理を振舞うなんて初めてだ。

大学生時代はそれなりに自炊もしていたが、就職してからはその頻度も減った。

野菜はコンビニサラダで済ませていたし、肉が食べたくなれば誰かを誘って焼肉に行けばよかった。

そんなことだから、ジャガイモの皮むきで指を切るしオーブンで軽く焼こうとしたライ麦丸パンはあわや焦げパンになりかけた。高いから美味しいはず　と、深く考えずに買ってきたA5ランクのサ

ーロインはフライパンで焼き始めた途端に焼き加減を全く考えていなかったことに気づき、なんの考えもなしにミディアムへ着地するという雑っぶり。

料理スキルのなさを発揮してしまった私は、それでもどうにか完成にこぎつけた。

鉄板皿に分厚いサーロインステーキと付け合せの野菜を添え、香ばしい丸パンとコーンスープが用意できた。

「ま、まあ、このくらいなら私でもできるし……?」

震え声で誰にともなく言い、料理をリビングへ運ぶ。

「お待ちどうさま。お皿熱いから、火傷しないようにね」

テーブルいっぱい、皿を並べていく。

ソファに座るエトナは、並んだ料理を前に感嘆の吐息を漏らした。

「ご飯かパンかで迷ったんだけど、美味しそうなパンが売ってたから、パンにしたんだ」

「こんな綺麗なパン、本当にひさしぶりに見ました……! それに、お肉も……!」

エトナの細い喉が鳴る。

おあずけされた子犬みたいにうずうずしながら、鉄板皿の上でじゅわああと音を立てるステーキに釘付けになっていた。

だが、エトナはその可愛らしい表情を引っ込めて、一転して不安げに私を見る。

「あの……これ、本当にわたしがいただいたでもいいんでしょうか？」

「とつても高そうなお肉に見えるんですけど……」
「まあ、値段はそれなりにしたけど」

具体的には、余裕で万札が飛んだ。

「でも言ったでしょ？ 私がエトナに美味しいものを食べてほしいの。とはいえ、今回は歓迎の意味も込めて奮発したわけで、毎回こんな豪勢にはできないけどね」

頬をかきながら、笑って言う。

だがエトナは、まだ不安を引き摺ったままの表情で「さっき言いそびれてしまったんですけど……」と前置きしてから言葉をこぼす。

「わたし、歓迎していただけるような立場じゃなくて……むしろ、お邪魔でしかないですから……その、こんなに美味しそうなご飯を用意してもらった資格があるのかなって怖くなって……ごめんなさい。お料理が出来上がってからこんなこと言って。でも、わたし、こんな美味しそうなもの初めてで、胸が苦しくて……ごめんなさい」
「エトナ……」

涙を堪えてどうにか吐露し、彼女は俯いた。

それに私は、もつと此葉みたいに「お肉だー!!」とか言っただけで、ついでにいいのになんて思ってしまう。

だが、これがエトナのらしさなのだろう。

自分を卑下し考え過ぎてしまう、臆病な子。

それが良いか悪いかは別として、私は彼女の性格に向き合ってきたかった。

私が想像もできないような14年を生きてきたエトナを少しずつ知り、その上で彼女が素直に楽しんだり喜んだりできるようになって

てくれたらいいなと、強く思う。

だって。

せつかくのご馳走を前にしてすら、こんなに辛そうな顔をしてしまうなんてあんまりじゃないか。

だから私は、願いを込めて心のままに言った。

「私は、あなたが来てくれて嬉しいよ」

「えっ……？」

私の一言に、エトナは信じられないとばかりに顔を上げた。

「あなたの服を買ったり料理をするの楽しかったし、いつてきますとかただいまって言う相手がいるのがホツとすることだったなんて初めて気づけたし、部屋が片付いてると気持ちがいいし　　そういうのぜんぶ、あなたが来てくれたから分かったことなんだ。だから、感謝してる」

「そんな、トーコさん……わたし、なにもしてません……勝手に上がり込んで迷惑かけて……感謝されるようなことなんて……！」

「そんなことないよ。私ね、あなたと一緒に暮らすの結構楽しそうだなって思ってるんだから。……すぐには難しいとは思うけど、もっと自分を大切にしていね。まだ会って間もないかもしれないけど、迷惑だとか邪魔だとか、一瞬も思ったりしてないから。ねっ？」

「……………」

エトナは無言できゅっと下唇を噛み締め、何度も頷いた。涙をこぼさないように一生懸命なのだろう。

だが、あまりに勢いよく頷いたせいで一筋涙が流れてしまっていた。エトナは慌てて目元を拭い、不器用に笑う。

「うん。じゃあ、この話はもうお終い。はい、これで涙を拭きなさい」

そう言っただけでティッシュを渡し、エトナが落ち着くのを待つ。

熱々の鉄板を採用したおかげで、鉄板からはまだ微かにじゅうと……と音が聞こえていた。大丈夫、まだ十分に温かい。

正直私も、はらぺこだった。二日酔いのせいもあって昼は食べずのままだったため、鉄板で焦げるステーキソースの香りだけで唾液が溢れてきてしまう。

おにく、たべたい。

が、それよりも先に言うべきことを言う。

「それじゃあ ようこそ、エトナ。私はあなたを歓迎します。どうぞ、召し上がれ」

「ありがとうございます、トーコさん。本当に……！ あ、えっと、お祈りじゃなくて……いただきますー！」

先ほどまでの翳った表情など微塵も感じられないほどにきらきらとした笑顔を浮かべ、エトナは食前の祈りではなく、私と同じ挨拶を口にした。

私は、それがなんだかとても大切に嬉しいことのように思えて、彼女と同じくらい笑顔になって「いただきます」と言った。

ステーキと丼

A5ランクのサーロインステーキは、驚くほど簡単にナイフが通った。

肉汁が溢れ、鉄板皿が音を立てる。

切り分けた肉は、表面はこんがり焼き色がつき中央はほんのり赤い。

少し緊張気味に口に運んだ私は、

「うまっ。うわっ、これうまっ!?!」

シンプルに驚き、はぁ……うまっ、ともう一度言いながら嚙下した。嚙んだ瞬間に溢れ出す肉の旨味やとろけるような食感の虜になって、さらにもう1切れ口にし、悶える。おいしい。たかいおにく、おいしい。

オニオンベースのソースも絶妙にマッチしていて、申し分ない。

「エトナ、どう? 美味しい?」

肉に気を取られていた私は、エトナのほうを見る。

すると彼女は目をしきりに瞬かせてこちらを見ていた。

「どうしたの?」

どうも様子がおかしいなと思い、問いかける。

しかしエトナは何も言わず、代わりにもう1切れステーキを食べ、ぶんぶんと首を縦に振った。その目は、喜色いっぱい輝いて

いる。

「美味しい？」

「！！（ぶんぶん首を縦に振る）」

「もしかして、言葉が出ないくらい美味しかった？」

「！！！！（ぶんぶんぶんぶんと首をいっぱい縦に振る）」

「そっかそっか。まだお肉あるから、おかわりもしていいからね」

「！！！！！！（きらきらいっぱいの表情で力強く一度頷く）」

「ふふっ、エトナ可愛い」

「！！……………っ（頷こうとして躊躇い、控えめに照れ笑いする）」

エトナの反応が面白くて、思わず笑ってしまふ。

お腹も心も満たされるような不思議な感覚がむず痒くて心地いい。バターを乗せたジャガイモも、苦味と食感が絶妙なブロッコリーも、普段より美味しく思える。それが単に質のいいものを買ってきたからなのか、小さな魔女と一緒にだからなのかは分からない。ただ1つ言えるのは、この家で食べてきたご飯の中で今が一番美味いということだった。ライ麦の丸パンを半分に千切って香りを

楽しみながら口に入れ、しみじみとそう思う。

エトナはステーキ以外にもバランスよく手をつけ、口にするたびに幸せそうにほっぺを緩めながら咀嚼していた。

先に食べ終えた私は、頃合いを見てエトナに言う。

「おかわり用意しようか？」

「ほ、本当にいいんですか？」

「遠慮しないの。あなたはたくさん食べて、お肉つけなきゃなんだから」

「じゃ、じゃあ、その……………お願いします！」

「うん、よろしい」

私は満足げに言っつて、立ち上がる。

「あ、そうだ。ステーキ丼にしてあげよっか？」

「ステーキ、どん……？」

「友達に教えてもらったんだけどね、ガーリックライスとステーキを丼に敷き詰めてステーキと玉葱を載つけた感じかな。私は結構好きなんだけど」

「た、食べてみたいです！」

「じゃあ、待っててね」

台所へ向かい、冷凍のご飯をレンジで半解凍する。

普段は炒飯のアクセントに使うため常備してあるニンニクを刻み、オリーブオイルを敷いたフライパンに入れて色がつくまで加熱。それから半解凍のご飯を入れて炒め、バターと醤油を少々加える。

別のフライパンでサーロインを再びミディアムで焼いて、まな板で一口サイズに切り分ける。

器にガーリックライスを詰め、その上に切り分けたステーキを載せて。最後に生食可の玉葱を薄くスライスして散らし、ステーキソースをかければ出来上がりだ。

「我ながら完璧なのは……？」

これまで気が向いた時に作っていたステーキ丼は安い肉を切り分けもせずドンと載せてカツ喰らっていたので、それと比べるのもどうかと思うが、A5ランクのサーロインで作ったステーキ丼は既にお腹いっぱい私でさえ食欲をそそられる出来栄えだった。

「エトナ、出来たよ」

「いい匂いがします……！ ああ、トーコさんてもしかしてコック

さんなんですか？」

「あはは、それはないない。本職の人に怒られちゃうよ」

純真な瞳で見上げてくるエトナに笑い返す。

でもエトナが食べてくれるなら、料理を本腰入れて覚えるのもいい気がする。

「それでは、あの、いただきます……！」

スプーンを手にしたエトナは、肉とガーリックライスをバランスよく掬ってぱくつと口へ。その瞬間「んんっ！！」と嬉しそうに悶え、私のことをじっと見つめながら やがて、こくつと飲み込んだ。それから、

「お、美味しいです！ お肉だけで食べたときはまた違って……すごいです！」

「喜んでもらえてよかった」

「香ばしくって、玉葱のしゃきしゃき感もよくって……わぁ……美味しい……」

とろんと微笑みながら、さらに一口。

「はぁ……しあわせです」

うつとりしながら囁くように言うエトナを見て、私の喉がごくりと鳴った。

どうしよう、エトナを見てたら私もちょっと食べたくなくなってきたじゃないか。

でも、あの井でお肉ぜんぶ使っちゃったし。……適当に何か作るうかな。

そう思って私が立ち上がるうとした瞬間、目の前にスプーンが差し出された。

そこには玉葱とお肉とガーリックライスが載っていて。

「あ、あの……トーコさんも、どうぞ……！」

ほっぺをほのかに朱に染めたエトナが、躊躇いがちに言った。

「いいの？」

「は、はい！ だって、その……食べたそうに見えたので……。あつ、でも勘違いだったらごめんなさい……！」

そう言われて、私はカツと顔が熱くなる。

顔には出ないタイプだと自負していたのに、ステーキ丼への未練をこつとも簡単に見破られてしまうなんて、恥ずかしい。

あるいは、他人の目を気にし過ぎている節があるエトナだからこそ気づいたのかもしれないけれど。

「……じゃあ、その。お言葉に甘えて一口いいかな」

「いいもなにも、トーコさんが作ってくださったものですから……！」

「ありがとう」

礼を言い、エトナが差し出してくれたスプーンにぱくつく。

肉汁の旨味と生玉葱の食感、そしてニンニクとバターの風味がきいたお米が口の中で溶け合う。我ながら上出来の美味しさだった。

「うん、美味しい。それじゃあ、エトナにもお返ししないとね」

「ふえ？」

きよとんとするエトナに、私はステーキ丼をスプーンですくって差し出す。

「食べさせてくれたから、今度は私が食べさせてあげる。ほら、あーん」

「え、ええ？　だ、だいじょうぶです！　そんな、食べさせてもらうなんて。その一口はトーコさんが食べてください！」

「えー、私もうエトナに食べさせてもらったからお腹いっぱいなんだけどなあ。せっかく掬っちゃったから、食べてもらえると嬉しいんだけどなー」

ニヤニヤと笑いながらわざとらしく言うと、エトナは「うう……」と恥らった後、はむっと私のスプーンに向かって可愛らしい口を開けてくれた。

「あ……あーん、れふ」

口を開けたまま控えめに催促してくるエトナを愛おしく感じつつ、その口にスプーンを差し入れる。エトナがはむっと口を閉じたのを見てから、スプーンを引く。

「……美味しいです。……それに、なんだかむずむずしちやいます」

はにかむエトナを見て、私までむずむずした。

「わたしも何かお礼を……」

「それじゃあ無限ループになっちゃうじゃない」

くすつと笑って、それもいいかもなあなんて思う。

ご飯を終えた後、私たちは湯船を張ったお風呂に二人で入った。狭い浴槽は二人で入ると肌と肌がくっつきっぱなしだったけれど、全然窮屈さはなく、ただただ温かかった。エトナは、ご飯の時のお礼とばかりに私の肩をマッサージしてくれて、じゃあそのお返しにとばかりに彼女の細い肩や腰を優しく揉んであげた。

……無限ループのままでもいいかもなあ、と強く思った。

ひとつのベッド、ふたりのカタチ

「ど、どうでしょう……？」

「うん、似合ってる。可愛いよ」

「……嬉しいです。えへへ」

23時過ぎ、リビングにて。

紺色のパジャマを着て絨毯の上に立っているエトナは、やや緊張気味に微笑む。

稲本さんのショップで選んだパジャマのサイズは彼女にぴったりだった。銀系の髪と白い肌が紺のパジャマとコントラストになっていて、本当に似合っている。

「それじゃあ寝ようか」

「はい」

言って、私は寝室兼書庫へのドアを開けて入り、エトナが後ろに続く。

「電気はリモコンでも消せるから、これ使ってね」

「……？ えっと、わかりました」

エトナが何故かきよとんとしながら、リモコンを両手で受け取る。

「私はリビングで寝てるから、何かあったら遠慮なく起こしてね。それじゃあ、おやすみなさい」

そう言って私は笑顔で小さく手を振って踵を返そうとする。

だが、エトナが慌てて声をあげた。

「あ、あの、トーコさん！ えと、えっと、一緒に寝るんじゃないんですか？」

「え？」

「だ、だって……ベッド、1つしかないと思うんですけど……」
「うん。だから私はリビングのソファで寝ようかなって」

2つあった布団のうち1つは汚れてしまつて明日以降クリーニングに出さなければならず使えない。あれが残っていれば私もそのへんに布団を敷いて寝ることができたが、それができない以上、身体に響くのを覚悟でソファで寝るしかないわけだ。

ベッドは1人用なので、2人で寝るには狭苦しいだろうし。

そう思ったのだが、エトナは不安げな表情で、

「でも、トーコさん……今日起きた時、身体辛そうでした。あれつて、私にベッドを貸してくださったせいですよね……？ だったらやっぱり、トーコさんがベッドで寝てほしいです」

そう言われて、私は渋面になる。

確かにソファで寝ると、明日以降の仕事にも響く恐れはある。エトナの言はもつともだった。彼女に気遣われてしまうアラサーの身体が恨めしい。

「それにその……わたし、向こうの世界では路地裏とか木の根元とかでよく眠っていたので、ソファでも床でも大丈夫です。むしろその、ベッドだと快適すぎて逆に落ち着かないというか……あはは……」

畳み掛けるように続けたエトナは、最後は自嘲気味に笑った。

しかし私は、そのぎこちない笑みを見て方針を確固たるものにした。

「決めた。やっぱり、エトナがベッドで寝て。向こうの世界ではどうだったか知らないけど、早くベッドでちゃんと寝ることに慣れてもらわないとだし。うん、ベッドでぐっすり寝ることを家主として厳命します」

私はベッドをビシッと指差し、腰にもう一方の手をあてて言った。

「ってことで今度こそおやすみ、エトナ」

「え、あの、えっと……！」

まだ何か言いかけるエトナのほうを見ずに、リビングへ戻ろうとする。

さすがにここは譲れない。口や態度にこそ出さないが、エトナは今日一日で身体も心もかなり消耗したはずなのだ。彼女に自覚があるかはさておき、しっかり休ませてあげないと後々大事に繋がる可能性だってある。

これはエトナのため。

そう自分に言い聞かせ、寝室を出てドアを閉めようとした瞬間。

「い、一緒に……！」

必死さが滲む上擦ったエトナの声に、思わず振り返ってしまふ。

エトナは次の言葉を中々言えないようで口をぱくぱくさせていたが、すぐに目に力を込めて続けた。

「一緒に、寝たいです……！！ 2人で……！！！」

まさかエトナがそんな積極的なことを言い出すとは思っていませんでしたので、私は面食らってしまう。

「いやでも、狭いよ？」

「へ、平気です」

「私寝相悪いから、蹴飛ばしちゃうかもよ？」

「だいじょうぶ、です……！ トーコさんにだったら、何されても……！」

「私がソファで寝るの、そこまで止めたいんだ」

「はい……だから、トーコさんさえよければ、2人で、その……えつと……」

……このあたりが、エトナの勇気の限界だったらしい。

彼女はそれ以上は上手い言葉が出てこなかったようで、口ごもってしまった。

俯く彼女が、どこか心細そうに感じられて。

それで私は、ピンときたことをつぶやいた。

「……もしかしてエトナ、1人で寝るのが寂しいの？」

「っ……！」

エトナが咄嗟に顔をあげる。

その表情には、藁にも縋りたいような情けなさがあった。つま
り、凶星のようだった。

「そっかそっか。ごめんね、すぐに気づいてあげられなくて」

なんとも言えない笑い顔を作りつつ、私はリビングへと続くドアを閉めてエトナに歩み寄り、立ちすくんだままの彼女を軽く抱きし

めてあげた。

「エトナ、一緒に寝よっか」

「はい……」

安堵がこもった返事を聞いて、私たちは一緒にベッドにもぐり込んだ。

「エトナ、大丈夫？ 暑くない？」

「だいじょうぶです……あたたかくて、とっっても落ち着きます」

電気を消した寝室、狭いベッドの中。

私たちは身を寄せあって横になっていた。

まだ目が慣れない暗闇の中、すぐそばにエトナの顔があるのが薄っすらと分かる。

そしてそれ以上に、彼女の息遣いや触れ合い感じる体温が、彼女がすぐそばにいることを教えてくれた。

「このベッドで誰かと寝るのは初めてだから、なんか変な感じ」

「……わたしも、誰かと寝るのなんて初めてなので……ドキドキします……」

たぶん今エトナは、控えめに笑っているんだろう。
なんとなく、そんな雰囲気でした。

「ちゃんと眠れそうっ？」

「だいじょうぶです。……でも、眠りたくないとも思ってしまった……」

「どうしてっ？」

尋ねると、エトナはほんの少しだけ身を寄せてきた。

手を伸ばせばそのまま抱きしめてしまえそうだな、なんて思っていると彼女はぼつりと不安を口にする。

「……眠って目覚めた時、ぜんぶ夢だったらどうしようって……そう思うと、怖くて」

「エトナ……」

「頭ではわかっているんです。異世界に来たことも、トーコさんがすぐそばにいてくれることも、何もかも本当なんだって……でも、やっぱり嘘なんじゃないかって……私なんか、こんな……しあわせでいられるはずがないんじゃないかって……それで……」

「……じゃあ、これも嘘？」

私は静かに言って、エトナをそっと抱きしめた。

彼女の、泣きたくなるくらいに細い背中を優しく撫でながら、囁く。

「エトナは小さくて温かいね。それに、お風呂に入ったからいい匂いがする。ちゃんと、心臓がどくどく鳴ってるのも分かるよ。エトナはちゃんと生きてる……これも、ぜんぶ嘘？」

「……嘘じゃないです」

「じゃあ、私がそばにいてることだって嘘じゃないはずだよ。なんなら、このままくっついて寝ようか。それなら、絶対いなくなったりしないでしょ？」

「トーコさん……」

湿り気を帯びたエトナの声。
それから彼女は、私の胸に顔を埋めた。

「よしよし。……これからは、こうというのが当たり前な毎日にしよ
うね。一緒にご飯食べたり、お風呂に入ったり、眠ったり。私は仕
事があるから、なにもかも一緒っていうのは難しいけど、でも、い
なくなったりしないから」
「はい……」

エトナの髪を、慈しみながら撫でる。
彼女の呼吸が次第に穏やかに小さくなっていき、やがて規
則的な寝息へと移ろいだった。

「……」

目が慣れてきて、エトナの可愛い寝顔が見えるように
なる。

綺麗で、安心しきったような表情。
思わずその頬に手を伸ばしかけたが、寸前で留まる。

おやすみなさい、また明日。
心の中でそう囁いて、私も眠りについた。

朝。

エトナは、何か温かく柔らかかなものに抱かれているのを感じ

じながらぼんやりと目を開けた。

路地裏の薄寒さも木の根の硬さも、家畜小屋特有の鼻につく臭いもしない。

ただ甘く、柔らかかで、温かい。

いままで一度たりともなかった、優しい目覚め。

「あっ……………」

小さく声が漏れる。

焦点の合った瞳が、目の前の女性を映し出す。

綺麗で凜とした、エトナを受け入れてくれた人の寝顔だ。

「うあっ……………」

突然込み上げてきた涙に、エトナは思わず口元を押さえて俯いた。声を出しては起こしてしまう。泣いてるところなんて見られたらまた心配をかけてしまう。

必死に声を殺した。

涙はボロボロこぼれてくる。

ずっと、ひとりぼっちだった。

魔女として生まれたエトナは、ずっとひとりだった。

憧れていたのだ。

希っていたのだ。

誰かが、そばにいてくれることを。

目を覚ました時、ひとりぼっちじゃないと思える日が来ま

すよじにじよ。

でも。

それでも。

誰かが……塔子がそばにいてくれることが、こんなに嬉しくて幸せなことだなんて思いもしなかった。

「っ……ぐすっ」

拭っても拭っても涙は止まらず。

結局、目を真っ赤に腫らしたまま、塔子が目覚めてしまった。

当然のように塔子はエトナを心配して、慰めて、抱きしめてくれて。

それがまた嬉しくて、涙はしばらく止まらなかった。

ひとつのベッド、ふたりのカタチ（後書き）

第一章というわけでもないのですが、ここまでで一区切りになれたらと思います。次の投稿は少し間が空きますが、書き切りたい場所に届くよう進めていければと。

ブックマや評価、感想など本当に励みになりました。

ありがとうございます…！

白咲灯鞠（前書き）

今回は、以前名前だけ出てきていた白咲さんの回です。
次からはエトナとエトナエトナします。したい。

白咲灯鞠

「遅い」

「……いや、定刻10分前なんだけど」

「出社時間なんて関係ないわ。あたしより15分来るのが遅かったから遅いって言っただけ」

月曜日。

目覚めていきなりエトナが泣きじゃくっているというハプニングがあったものの、仕事が消えてなくなったりはしない。

銀髪の可愛いらしい魔女と同居することになったって、日常は日常のままだ。

エトナと2人で朝食を摂った私は、彼女の昼食を作り置きし。

レンジの使い方やノートパソコンで一動画配信サイト（ネット

リックス）を視聴する方法を教えるなどした後、勤務先（シナリオ製作会社『テノルテ』）が入っているビルに辿り着いたんだけど。

その入り口で、ゴシック調のブラウスとスカートで着飾った女に捕まっていた。

「なんでわざわざ入り口で待ってるの？ 白咲」

「そんなの決まってるじゃない。このパーフェクトに可愛いあたしが、あなたのしょっぱくて寂しい朝に華を添えてあげようっていう慈悲よ。ほら感激で咽び泣きなさい。朝から灯鞠様の超絶キュートなお顔を拝見できて光栄の極みですって打ち震えるがいいわ！」

小柄なわりにたゆゆんと育った胸を張り、白咲は自信に満ち溢れ

た顔をする。

くるりと巻いたトレードマークの金髪縦ロールがふわりと揺れていた。

白咲灯鞠^{しほきとうまり}。

私より4つ年下の24歳。

テノルテに2つあるシナリオチームのうちの片方でリーダーを任されている前途有望の文筆家だ。

同じリーダーという役職ながらディレクションやフォロワー中心で動いている私と違い積極的にシナリオライティングに参加している白咲は社内随一の実力派で、大手ゲーム会社の人気スマホゲームのメインライターとして名を連ねている。

個人名が出るような仕事をしていない私と違い、テノルテを離れても仕事に困らないであろう業界のホープ……のはずなのだ。

「何黙ってるのよ。もしかして感動で声も出ないの？ ま、当然よね。なんたってこの白咲灯鞠がわざわざお出迎えしてあげてるんですもの。見惚れ見蕩れて心奪われたって仕方のないことよね。いいわ、いいわよ。あたしに見入ることを特別に許してあげる。毛先から爪先まで余すところなく網膜に焼付けなさい」

顎をクイツと上げ、胸に手を当て 芝居染みた仕草で言う白咲。その立ち姿はとてもサマになっていたが……ぶつちやけ、鬱陶しい。

何を隠そうこの白咲、同じリーダーという役職だからなのか何かある度に いや、何もなくてもよく絡んでくる子なのであった。

「……朝っぱらからあなたの相手をするの、正直暑苦しいんだけど」「は、はあ！？ 暑苦しいって何よ！？ アラサー行き遅れ確定ガチャでSSレア引いて未来永劫独身が約束されてるあなたの人生に

彩りを与えてあげようっていうあたしの優しさが分らないの!？」
「私の将来をクソガチャで決めないで。っていうかこんなところで
油売ってる暇あるの？ マギノゲームさんのとこの仕事、今日が締
め切りでしょ？」

呆れ半分で言っていると、白咲は涼しげな笑みを浮かべる。

「あの仕事ならとつくの昔に納品したわ。昨日細かなりテイクも終
えてひと段落つてところかしら。どっかの誰かさんみたいに外注ラ
イターが音信不通になって締め切り当日に慌てふためくような無様
は晒さないのでご心配なく」
「うぐっ……」

事実なので反論できない。

「だいたいあの量のフレーバーテキストとキャラシナリオくらい、
あんたと確氷うすいでこなせるでしょう？ わざわざ外注に仕事回さなく
たって自分たちで書けばその分出来高で給料も増えるんだし、いい
こと尽くめじゃない。そりゃあ、いざって時のためにフリーのライ
ターとの人脈を増やしておくのはディレクターとして大事かもしれ
ないけれど、だからって実績も実力もない、あまつさえ音信不通に
なるようなライターにまで仕事を振るのは悪手以外の何物でもない
わ」

腕を組み、甘やかな香水の匂いを漂わせながらぐいぐい言い寄っ
てくる白咲。

彼女の言葉はどれも痛いほどに正しいため、言い返せない。

だが、出社早々に切れ味鋭い指摘をされ続けるのも精神衛生上よ
ろしくない。

そろそろ適当に应じて切り上げるべきだろう。

「そもそもあんたは」

更なる白咲の言及が始まる。その前に口を挟んで遮ろうと思っ
た矢先。

「先輩、おはようございますっす」

ビルのエントランスから、此葉はるが現れた。
既に出社していたらしく、エレベーターで降りてきたようだ。

「おはよう、此葉。どこか行くの？」

「自分はちよつとコンビニでおやつ買って来ようかになってやつつす。
腹が減ってはなんとやらっすよ。先輩も一緒にどうっすか？ 冷蔵
庫の備蓄、そろそろなくなりそうっすよ」

二ヒつと八重歯を覗かせる此葉。

ウチの会社は出社時刻こそ10時に定められているが、実際のところ仕事さえちゃんとすればいいという社長の方針のもとかなりの自由を与えられている。シナリオ製作が主業務であり個々人で執筆スタイルが異なるため、相談次第では週1出社もOKだったり。

私と白咲はリーダーという立場上、最低週4出社の決まりだが会社のオフィスが一番仕事が捗るタイプなので苦ではないし、本来週1出社でもいい此葉も「誰かがいたほうが捗るんすよね」ということで週5で出社している。ちなみに週1出社というのは、社員の健康と生存確認という側面が強い。

もちろん、いつコンビニや喫茶店に行こうがお昼休憩を取ろうが自由だ。

だからこそ私たちは10時ギリギリでも特に慌てることなくこうしてビルの入り口でちゃんやかできるわけで。

「あー、ごめん。何か適当に買ってきてくれると嬉しいかも。後でお金払うから。いま白咲にお説教されてるところなんだよね」

「お、お説教つて何よ!? それじゃあなんだかあたしが嫌なヤツみたいじゃない!？」

小柄な白咲が爪先立ちになって抗議してくる。

一方で此葉は、こてつと首を傾げて不思議そうに言った。

「お説教……? 白咲さん、テクノノーツさんから預かった伝言を先輩に伝えに行ったんじゃなかったんすか?」

「え? テクノノーツさんから電話あったの?」

テクノノーツとは、昨日私が夜遅くまでオフィスに残ってシナリオなどを納品した取引先だ。

「はいっす。納品物確認しました、今回も非常にいい出来で助かります。細かいリテイクは数日中にご連絡できればと思いますが大筋はこれで問題ありません。仲谷さんをお願いして本当によかったです。って。自分が電話受けたんすけど、白咲さんが『あたしが伝える!!』って意気揚々と降りてったんで」

「ちよつと碓氷、黙りなさい!」

今まで余裕^{ゆゆう}綽々^{しゃくしゃく}だった白咲が、途端にうるたえはじめた。

気のせいか、頬に朱が差している。

そんな白咲の様子を見て何かを悟ったらしい此葉が、にんまりと悪戯^{あくご}っぽく笑いながらわざとらしい声を出した。

「いやあ、テクノノーツさんからの伝言を聞いた時の白咲さん可愛かったつすよお。』ふふつ、まあ塔子なら当然よね！！ 昨日も1人であれだけ頑張ってたんだし、ちゃんと時間があれば塔子の技量ならもつともーっつと面白いシナリオにブラツシユアップするのとどつて……ああつ、そう考えたら音信不通で逃げたライターに殺意が湧いてきたわ。住所特定して突撃して縛り上げてやるうかしら……！！』とかなんとか言ってたんすから」

「へえ~~~~~~~~~~~~、そつかあ~~~~~~~~」

此葉の言葉を聞いた私は、湧きあがってくる笑みを抑え切れないまま白咲を見る。

金髪ロールのお嬢さんは「う、ああ、いや、それは、その……！！」と耳の先まで真っ赤にしてしどろもどろになった後、「う、確氷いい！！」と叫んで駄々っ子みたいなパンチを此葉に向けて繰り出した。

それを此葉は、最小限の身のこなしで軽々と避ける。

「おつと、いきなり何するんすか白咲さん。自分は脚色なしに事実を言っただけつすよ？ ああ、あとそういえばこんなことも言ってたすね。たしか『塔子のシナリオを世界の誰より楽しみにしてるのはあた』」

「あー、あー、キコエナーイ！！ あたし、なんにもキコエナーイ！！！！」

此葉の言葉を遮るように、白咲が叫ぶ。

それから彼女は、此葉の両肩をガシつと掴んで迫った。

「う、確氷、これからコンビニ行くのよね？ あ、ああ、あたしも

ちょっとコンビニに用があるってどうか、ここは先輩として奢ってあげちゃってもいいかなって思うんだけどどうかしら？ 決まり。決まりね。行きましよう。冷蔵庫の補充も必要だし、今すぐコンビニ行きましよう。はい、ゴー！！」

有無を言わせぬ気迫とともに此葉の腕を抱きしめ、そのまま引張って歩いていく。

「わーい、あざーっす！」

此葉は悪びれる様子もなく満面の笑みで言った後、一瞬だけこちらを見てウィンクした。

私はくつくつ笑いながらコンビニへ向かう二人を見送り、ビルに入った。

白咲がつかつかってくる理由が分かるような分らないような、まだ曖昧ではあったが、今後は何を言われても精神的優位に立てそうな気がした。

カレー 前編

白咲が一日中ちらちらと視線を送ってくること以外は特に何事もなく業務が進み、18時過ぎには退社できた。最寄り駅近くのスーパーで夕飯の材料を買い、19時前にマンションに辿り着く。

「ただいま」

「おかえりなさい、トーコさん！」

ドアを開けると、玄関には既にエトナがいた。

グレーのサマーニットワンピースにハーフパンツ姿の彼女は、安堵と嬉しさが入り混じった表情をしている。なんとなく昔実家で飼っていた黒い雑種犬のことを思い出した。私が学校に行く度に寂しそうに鳴き、帰宅するたびに嬉しそうに吠える賑やかな犬だった。

「ごめんね、昨日の今日で長い時間お留守番させちゃって」

「謝る必要なんてそんな……トーコさんにはトーコさんの生活があるって、ちゃんと分かっていますので」

ほんのりと笑みを浮かべ、なんでもないように振舞うエトナ。

だが、そこに隠し切れない遠慮が滲んでいるのを私は見逃さない。まだ少ししか一緒に過ごしていないけれど、彼女が隠し事をする時に笑うクセがあるのは分かっていた。

だから私は、荷物を置いて挨拶の延長線上のような感覚でエトナを抱き寄せる。

「あ、あの、「トー」さん!??」

「ふふっ、エトナ分補給う。うりうり」

ちょうどいい高さにあるエトナの頭頂部に鼻先を埋め、ふんわりとした銀髪の感触とほのかなシャンプーの香りに目を細める。

それから抱き上げて視線を同じ高さにした後、お互いのほっぺをくつつけた。

「わわっ……わっ……」

どうやら照れているらしい。

触れ合うエトナのほっぺが、急激に熱くなるのが分かった。

遠慮しなくていいんだよ、寂しいって言っていいんだよと言ってあげるの簡単だ。

でも、それでエトナの作り笑いや遠慮し過ぎる性格がすぐ直ったりするとは思えない。

彼女の生涯の中で形成された性格が、言葉一つで劇的に変化するなんていうのは無理な話で。だから、まずは私がどんどん距離を詰めてスキンシップするべきで。

そうすることで、いつかエトナが心のままに動けるようになってくれたら最高だ。

そんなことを考えながら、私は一際ぎゆうっとエトナを抱きしめて床に下ろした。

「はぁ、癒された」

つやつやした顔で私は晴れやかに言った。

このスキンシップはエトナのためであるのと同時に、私のためで

もある。

Win-winという言葉だ。たぶん。

一方のエトナは、赤らんだほっぺに両手を当てて「うう……」と絞り出した後、

「い、いきなりは卑怯です……」

と囁いて、目を逸らした。

そのいじらしさに、もう一度抱きしめてやるつかしらという衝動が湧いてくる。

だが、いい加減夕飯を作らねばならない時間帯なので諦め、荷物に手を伸ばさず。

すると先んじてエトナが、私の鞆とスーパールの袋を持ち上げた。

「も、持っていていきます……!!」

「そっか、ありがと」

一瞬断って荷物を取り戻そうかとも思ったが、それだと私もエトナのことを言えないなと思い直し、素直に厚意に甘える。

細い両腕で荷物を持ってやや覚束ない足取りで歩くエトナの小さな背中を眺めながら、私は小さく微笑んだ。

「今日の夕飯はカレーにしようと思うんだけど、大丈夫？」

「カレー……ですか？」

買ってきたものを冷蔵・冷凍スペースにそれぞれ詰め込みながら尋ねると、エトナは可愛らしく首を傾げた。どうやら、カレーはご存知ないらしい。

「香辛料をふんだんに使った煮込み料理……？ 実物を見てみないと、上手くイメージできないですね……」

スタイル
異地適応を使っているらしい。

エトナが眉間を寄せ、小難しそうな顔をしながらつぶやいた。

「じゃあ、シチューは分かる？」

「それなら一度だけ食べたことがあります……！！ とっても、美味しかったです」

「そっか。なら、材料あんま変わらないしシチューにしよっか。私がかレー好きだからなんも考えずにカレールウ買ってきちやっただけ、知ってる料理のほうじゃ食べやすいだろうし」

そう言っただけ、冷蔵庫の横にある戸棚を探す。

「たしか、買い置きしたままだったシチューの素があったはずなんだけど」と探していると、横からエトナがおずおずと尋ねてくる。

「……トーコさん、カレーがお好きなんですか？」

「うん。作りやすいからって何度も作ってるうちに、いつの間にかって感じだけど。お、あったあった」

ふくよかな女性のイラストが載ったクリームシチューのパッケージを手にした私が振り返ると、エトナがどこか期待に満ちた瞳で私を見上げていた。

「あ、あの、カレー食べてみたいです！ も、もちろんトーコさん

が作ってくれるシチューも食べてみたいですけど、でも、その……トーコさんが好きなもの、わたしも食べてみたくて……！」

「ほんと?」

「よ、よければ是非……!!」

「じゃあ、やっぱりカレーにしよっか」

食べてみたいと言ってくれたのが嬉しくて、私はニツと笑う。

「そういえば、エトナって辛いのは好き? 苦手?」

「辛いのは……苦手、です」

「そっか。了解」

言っただけで、買い物袋から甘口カレーのルウを取り出した。

念のためにと辛口・甘口両方買ってきた自分を褒めてやりたい。

「これが、カレー……? わあ……!!」

20時過ぎ。

ようやく出来上がった料理を眺め、エトナが感嘆をこぼした。

テーブルの上には、カレーと惣菜コーナーで買ってきたサラダ、そしてお好みでカレーに入れるためのスライスしたゆで卵や福神漬けが並んでいる。

ちなみにカレーは、シーフードだ。昨日がガッツリと肉だったため、今日はエビやホタテ、イカなどをふんだんに盛り込んでいる。

「ごめんね、すっかり遅くなっちゃって」

「そんなことないです。お昼ごはんもたくさんありましたし、おやつだって用意してもらえて……それに、トーコさんはお仕事がんばった後に、こんなに美味しそうな夕食飯まで作ってくれて、とても素敵です」

「エトナ……」

屈託のない笑みで言われ、じんと胸が温かくなる。

「それじゃあ、食べよっか」

「はい……！」

2人していただきますと声を揃え、スプーンを握る。

私はルウが絡んだエビとホタテをご飯と一緒に掬い、口に運ぶ。

スパイスが効いた甘口のルウと海鮮の旨味に、時短で炊いた白米の甘みが絡まって 我ながら、美味しい。

普段辛口ばかり食べていたけれど、甘口もいいなと思いつつ飲み込む。

さてさてエトナの反応は と、目を向けると。

彼女は口にスプーンを咥えたまま、とろんとした表情で私のほうを見ていた。

その顔だけで、お気に召したことが分かる。

「美味しい？」

尋ねると、エトナは無言でぶんぶん頷いた。

昨日もそうだったが、彼女は美味しいご飯を食べると言語を失うタイプらしい。見ていて面白い。

「そっちにあるゆで卵とか福神漬け……えっとカレーに合う漬物な

んだけど、それも一緒に食べると美味しいよ」

言いながら実際に食べて見せて「うん、美味しっ」とつぶやくと、エトナも真似してゆで卵をカレーに載っけて食べ、ふにゃっと笑ってくれた。

二日連続で自炊するなんて最近の私史上稀もいいところだったけれど（カレーを作り置きして1週間連続カレー生活をしていたりするのはノーカウント）、こんな笑顔が見られるならいいかと、心から思えた。

食後。

食器洗いを申し出てくれたエトナに甘えてリビングでパソコンを開き、明日以降の仕事のスケジュールを確認していると、洗い物を終えたエトナが戻ってきた。

作業中の私を気遣ってか静かに少し離れた場所に座った彼女は、何かタイピングでも計るかのように何度かこっそり、私に視線を寄越していた。

「どうかした？」

「い、いえ、なんでもありません……!!」

パソコンから顔を上げて尋ねると、エトナは慌てて首を振った。だがすぐに、

「……やっぱり、なんでもなくないので、いいでしょうか……？」
と、おそろおそろ言った。

「うん、なんでも言ってる。ちょうど終わったところだから」

本当はまだいくつか確認事項があったのだがいくらでも後回しにできるためパソコンを閉じる。

するとエトナは、ホツとしたように表情を緩めた後、言った。

「実はその……もしトーコさんさえよければですけど……明日の夕飯、わたしに任せていただければ……」

「え、ほんと？ エトナ料理できるの？」

「い、いえ、できるかは分からないんですけど……でも、その……トーコさん、お仕事の後でお料理までするのたいへんそうだなって思ってる……だから……なにか、作ってあげられたらなって……」

エトナは上目遣いで私の反応を確かめるように伺ってくる。

正直、仕事の後で夕飯を作るのは中々に難易度が高いとは思っていたのだけれど、まさか彼女が料理したいと言ってくれるとは思わなかった。

今日だって普段私が目安にしている時間通りに帰れたものの、夕飯が出来上がったのは20時過ぎ。

もし今日以上に退社が遅ければ、出来合いの惣菜オンリーのどこか味気ない夕飯になってしまうのは目に見えている。……いや、別にスーパのお惣菜はクオリティ高くてエトナが来るまでは本当にお世話になっていたんだけど、その……気持ちの面で折り合いがつかないというか、ね？

なので、エトナの手料理が食べられるというのは私にとって福音のようだった。

「それじゃあ、お願いしてもいいかな」

「ほ、本当ですか!？」

「うん。私、あなたの料理食べてみたい」

心からそう言うのと、エトナは胸に両手を当てて「はい……!」と嬉しそうに言ってくれた。

「ところで、何作るかは決めてるの？」

流れて尋ねると、エトナは気恥ずかしそうにしながら。

「……もしよければ、お返しも込めてトーコさんの好きなカレーをお作りしたくて……洗い物をした時にルウがまだ残っているのが見えたので。……あ、でも二日連続でカレーになってしまいますし、やっぱり別のもののほうがいいでしょうか？」

「ううん、カレーでいいよ。いや違うな。カレーがいい。エトナが作ってくれたカレーがどうしても食べたい」

私が念を押すように言うと、エトナは笑顔を浮かべる。

「じゃあ、明日も今日と同じくらいに帰ってくるようにするから夕飯お願い。あとで台所の使い方とか教えてあげるから」

「はい……! よろしくお願いします」

私たちは笑い合った後、肩を並べて座り直して今日一日エトナが

家でなにをしていたのか 観ていた映画とか、読んだ本のことな
んかを話して、ゆったりとした時間を過ごしたりした。
明日のカレーが、楽しみだ。

カレー 中編(前書き)

前後編で終わるつもりだったんですけど、気づけばこんなことに。

カレー 中編

翌日、火曜日。

普段通り10時前に出社し、いつもより少なめの昼食を摂って午後の業務に取り掛かる。

外注のライターさんに依頼して上がってきたシナリオをチェックしつつ、自分の担当分の仕事 とあるスマホゲームで数カ月後に追加される新規キャラクター案を纏めていく。

上がってきたシナリオはライターの個性が出たドタバタ感のあるコメディに仕上がっており、表記揺れを修正するだけで問題なく納品できるクオリティだった。

私以外のチームの人間は在宅執筆かオフのため、仕事は静かに進んでいく。昨日に続いて時折り白咲の視線は感じるものの、何か言ってくることはなかった。

あつという間に、PC画面右端の時間表示が17:48になっていた。

納得いくキャラクター案を3つほど担当者にメールで送信し、同時にオンラインストレージサービスにもアップロードして、私は座ったまま伸びをした。

「よし、帰る」

今頃エトナが、私が貸したエプロンを着て台所に立っているのか

と思うと不思議な心地だ。包丁でケガをしたり、火傷をしていないかと今さらながらに不安も湧いてくる。

早く帰ろう。

ああでも、エトナのために駅前の絶品シュークリームだけは買って帰ってあげたいな。

そんなことを考えつつ鞆に資料などを詰め込んでいると、

「……ちよつといいかしら」

声を聞いて振り向けば、微妙に距離を開けた場所に白咲が立っていた。

今日の彼女は黒リボンがワンポイントな純白のブラウスと膝下丈のタイトスカートというコーディネートで、相変わらずよく似合っている。

「どうしたの？ 微妙に遠いけど」

「いいでしょ、それは……！！ それより、この後時間はあるかしら？」

「なんで？」

「なんでって……」

そこで白咲は言い淀み、表情に若干の羞恥を滲ませてから言葉を繋いだ。

「き、昨日の朝のこと……碓氷のバカが言ったことについて見解の相違があったみたいだから訂正っていうか……そう、あんたんこの碓氷に文句があるんだけど出社してないから、代わりにあんたに

文句言つてやるうつつて思つたのよ!!」

「……は？」

「ただ、だつて、あれじゃああたしがまるであなたのシナリオのファンみたいない草だつたじゃない!! あんな誤解がまかり通つたまま過ぎすなんて、白咲灯鞠一生の恥だわ!! だから、ちよつと『いろはや』の個室予約してるから行きましょう、行くわよね、どうせあんた独り身で帰つてもやることなんて映画鑑賞くらいしかないでしょうし、当然行くわよね!! ああ、心配しなくてもいいわ。奢りだから。この灯鞠様の奢り!! 当然行くわよね!? ね!!!!?」

いつの間にか距離を詰め、力強い瞳で見上げてくる白咲。

ちなみに『いろはや』とは、会社から徒歩5分の居酒屋だ。刺身と煮込みと日本酒が絶品で、お値段もリーズナブル。私もお気に入りのお店である。

奢りというのも含めて魅力的なお誘いだし、数日前までの私なら二つ返事でOKしていただろう。

だが、今はそうもいかない。

「ごめんね白咲。どうしても外せない大事なことがあるから、付き合えないの。昨日のことで何かあるなら、ラインでお願い。じゃあ、お先に」

「えっ、ちよつと、ええ!?!」

断られたのがよほど予想外だったのか、白咲は小さな口をぽかんと開けて唾然としていた。それを横目に、私は鞆を手にしてオフィスを後にする。

今はどんな刺身の盛り合わせよりも純米大吟醸酒よりも、エトナのカレーを胃袋が欲しているのだ。

早足にオフィスを出ていく塔子を茫然と見送って数秒、ようやく灯鞠は我に返った。

「な、なんで帰っちゃうのよお……」

いろはやで塔子がよく飲むお酒の銘柄まで把握して、万全の用意をして誘ったのにすべてが水泡に帰してしまった。

テノルテに入って4年、ずっと塔子を見てきたが彼女が誰かの誘いを断ることなど仕事を立て込んでいる時以外なかったはずだ。自分のような面倒臭い性格のヤツの誘いだって、「いいよ、行こっか」と軽く応じてくれていたのに。

「……外せない大事なことって、なによそれ」

知らず、声が震えた。

たった1度断られただけなのに、心に大きな穴が開いたかのような錯覚に囚われる。

あたしは、仲谷塔子が紡ぎ出すシナリオのファンなんかじゃない。

あなたが書いたシナリオに救われて、ここまで無我夢中で走ってきた馬鹿なのに

「ひまりん、大丈夫かい？」

ぐるぐると螺旋を描いて落ちていく灯鞠の思考を引っ張りあげたのは、落ち着いたハスキーボイスだった。

「……社長？」

「うむ、私だ。その様子だとフラれたみたいだね」

赤縁の眼鏡が似合うスレンダーな女性　テノルテの社長こと三峰雪花が、顎に手を当てて涼やかに笑んでいた。

「ふ、フラれただなんて冗談も大概につ……！！」

「取り繕う必要はないさ。もう、私とキミしかない」

「えっ……？」

気づけばオフィスには、灯鞠と雪花以外の姿がなかった。塔子と話している間に、それぞれ家路についたらしい。

「ふふっ、2人きりだな」

「……そうね。もうすぐあたしが出て行くから1人になるわよ」

ヒール込みで175センチ近くある長身の雪花が赤い舌をちろりと出して艶っぽく笑うが、灯鞠はなんでもないようにあしらった。

社長である彼女は唯一、灯鞠がどういった経緯で塔子に想いを募らせているのかを知っている。採用面接の際にまんまと聞き出されてしまったのだ。

確氷などは灯鞠が塔子に好意を抱いていることくらいは分かっているようだが、さすがに恋慕に至るまでの過程までは知らない。

「釣れないなあ、ひまりん。それでも私は社長として可愛い可愛い社員のケアをしに来てあげたんだよ」

「……なら、あたしを塔子と同じチームで仕事させなさいよ」
「いますぐに、というのは難しい相談だね。だが愚痴ならすぐにも聞いてあげよう。いろはや、予約してるんだろ？ まさかドタキャンするわけにもいかないだろ？ 私、私が同伴しようじゃないか。当然、お金は私が出す。普段誰にも言えないようなことも、思う存分吐き出すといいさ」
「……………」

余裕たっぷりに微笑み、灯鞠の返答を待つ雪花。

ライターとして塔子や灯鞠よりも遥かに凄まじい実績を持ちながらここ数年は第一線から退き後進の育成に励んでいる年齢不詳の雇い主を睨みつけること十数秒

灯鞠は、はあ……とため息を吐き出して。

「ヤケ酒でぶっ潰れたい気分だから、介抱しなさいよ」

「ああ、承ろうじゃないか。任せたまえ」

「じゃあ、決まりね」

不敵な笑みを浮かべ、灯鞠は荷物を纏めるべく自身のデスクへ向かう。

その背中を眺め、雪花は誰にも聞こえない声量でつぶやいた。

「『好き』って、たった二文字なんだがね。……まあ、書くのと言うのは別物か」

カレー 後編

17時半過ぎ。

エプロンを身に着けたエトナは、並々ならぬ決意を秘めて台所に立っていた。

「トーコさんに美味しいって言ってもらえるように……」

使い方を教わったインターネットで、美味しいカレーの作り方も検索した。

ナイフはもといた世界で扱ったことがあるので、それが包丁に変わったところで問題ない。

米を研いで炊飯器のスイッチを押した後、エトナは野菜を手際よく切っていく。

塔子が食べやすいようにじゃがいもや人参は小さめに、玉葱はくし型切りとみじん切りを半々に。あらかじめ解凍しておいた冷凍牛肉は、手で千切る。

具材の準備が整うと鍋を空焚きして油を敷き、まずはみじん切りにした玉葱を炒める。

焦がさないように弱火でじっくりと、あめ色になるまで丁寧な木べらで混ぜてから、他の野菜を投入。

胡椒を少々振りながら炒め、最後に牛肉を入れてから鍋を水で満たして煮込む。

レシピ通りの基本的な しかし、エトナにとって人生で初めて誰かのために作る食事。

おたまでアクを丁寧に取り、野菜が柔らかくなるまでじっくりコトコトに込んでいって。

「ふふっ……」

そこでふと笑みがこぼれて、エトナはハツとした。

こんなに無意識に笑ってしまうことなんていつ以来だろうか。いや、もしかしたら初めてかもしれない。短い間に自分は随分と変わったのだと、自覚する。

「……塔子さんが、わたしを変えてくれた」

ぼつりと、温かな想いを込めて囁く。

その後火を止めて固形ルウを割り入れ、かき混ぜる。

よく溶けたのを見計らって再び火を点け、弱火でコトコト煮込んでいく。昨日の食事を思い出すような匂いが漂い、エトナは目を細めた。

しかし、今日のカレーは昨日のものとは作り手も具材も違う。

何より今日のは辛口だ。

甘口の固形ルウはまだ残っているが、エトナはそれには手を出さなかった。

塔子が好きな味で作ってたし　彼女が好きな味を、自分も好きになりたかったのだ。

「……美味しくなってくださいね」

祈るように言い、木べらを動かす。

静かに回る換気扇の音と、カレーが煮立つ小気味いい音　穏やかな時間は、今までの何もかもを忘れて、ただ安寧に溶けていくかのように心地よくて。

でもそれは、魔女たる者には赦されない、日の当たる場所です。

突然。

忘れるなど弾劾するかのようになり、エトナの全身に焼けるような痛みが走った。

「いぎっ、がっ……はっ……！！」

危うく鍋を引っくり返しそうになるのを避けながら、エトナはその場に蹲る。

「あがつ……あああああ……ひぐっ……」

身体中の神経が引き千切られているかのような激痛に、視界が明滅する。どこが痛いのか、それともどこもかしこもが痛いのか。必死に息を吸っているはずなのにまったく肺に酸素が届いている感覚がなく、胸のあたりを押さえてのたうち回る。

「はっ……あぐっ……ああ……あ、あ……」

これから何が起きるのか悟ったエトナは少しでも開けた場所を指して這いずり、リビングへ向かった。

視界が歪み、気を抜けば昏倒してしまいそうだったが、歯を食い縛って数メートルを移動する。それと同じくして、千切れるような鋭い痛みが、今度は身体の内側から何かに激しく叩かれているかの

ような重く鈍い痛みが変わっていく。

それはまるで、エトナの中に閉じ込められた何かが無理やり扉をこじ開けて外に出ようとしているようで

「おごっ……やっ……だ、めっ……！」

エトナは咄嗟に着ていたワンピースを捲り上げた。

白い肌と傷痕、そして塔子に買ってもらった楚々とした白いブラが外気に晒される。

次の瞬間にはその薄く慎ましやかなエトナの胸の周りが、徐々に黒く染まっていった。何かか滲み出すようにその黒色はどんどん範囲を広げ、腹部までもを浸蝕していく。

やがてその黒は、エトナの身体から溶け出るようにして放たれる。

「あ

っ

声にならない絶叫をあげ、エトナの身体が痙攣する。

肉が裂けるような痛みで気絶と覚醒を繰り返すエトナを嘲笑うかのように現れた黒色の粘ついたそれは、次第に何かの形を目指して蠢く。

それは蜥蜴 いや、翼のある竜だった。

大きさは50センチほどで顔や鱗はなく、黒い粘土で竜の輪郭を作っただけのような見た目である。

「……だ、め……」

上手く回らない舌で言い、エトナは朦朧とする意識のまま起き上

がった。

アレはまだ、出来損ないだ。

自分の中に刻まれた数多の魔術の切れ端が寄り集まって溢れ出てしまっただけの、自我なき滓溜まり。

今の自分なら、まだ対処できる。

ここ数日で少しずつ魔力は回復していた。もっと別のことに使いたかったのだけれど、しかしそうも言っていない。

蠢く黒竜をばやけた視界に収めて一言、紡ぐ。

「臙火咲キテ……大焰二……昇レ」

途切れ途切れの詠唱に呼応し、黒竜の周りにぼぼぽつと無数の小さな蒼白い炎が灯った。その炎はフローリングを焦がすことなくリビングを帯を多い尽くすように数を増し、一瞬にして収束を始めて黒竜へ殺到。

一際燃え上がった後、蒼い炎は幻のように消失した。

「はあ……はあ……」

額に玉の汗を浮かべ、エトナは肩で息をする。

立ち上がる気力が残っておらず、その場にぐったりと横たわった。そうしてどれだけの間、倒れていただろうか。

ふいに台所のほうからブツブツと異音と焦げた匂いが漂ってきて、エトナはハツとした。

青白い顔のまま、倒れそうになるのをぐつと堪えて立ち上がり、壁や冷蔵庫などを伝いながらカレーの鍋の前まで辿り着いて。

「そんな……」

愕然とした表情で鍋の火を止め、その場に座り込んだ。

カレーが焦げていた。

塔子のために、心を込めて作っていたカレーが黒々と焦げ付いた酷い代物に変わり果てていた。それは奇しくも、先ほど打ち払った黒い竜を想起させ、容赦なくエトナの心を打ち据える。

「あ、ああ……あ……」

今から作り直しても間に合わないし、そもそも材料が足りない。

昨日の、自分の作ったカレーが食べたいと言ってくれた塔子の顔が思い浮かび、胸が張り裂けそうになる。きつと落胆させてしまう。材料を台無しにしたことを責められるかもしれない。せっかく楽しみにしていたのに　と、失望させてしまう。

使えない子。

以前誰かに言われた言葉が、塔子の声で再生されてエトナは胸を押さえ、蹲った。

「はっ……はっ……くっ……あ……」

過呼吸になり、涙が後から後からこぼれ落ちていく。

どうしようどうしようどうしようという意味のない思考が次々に溢れ、おかしくなりそうだった。

そして、その時。

ガチャリと鍵が、そしてドアが開く音がして。

「ただいまー！」

と、普段より少しトーンの高い塔子の声が聞こえた。いつもなら安心と幸せを届けてくれるはずのその声が、今だけは死神の宣告のように思えた。

立ち上がる気力は、もう、なかった。

逸る気持ちを押さえながら玄関を開ける。

「ただいまー！」

エトナのカレーが食べられると思うと、私の声は弾んでいた。昨日今日は、帰れば玄関にエトナがいたけれど今日はいない。きつと台所で料理に励んでいるのだろう。そう思いながら廊下を歩く途中で、焦げ臭さに気付く。明らかかな異臭に眉をひそめつつリビングに入り、台所の方に目をやる。

だが、エトナの姿は見えない。

「エトナ？ どこにいるの？」

妙だなと思ひ呼びかけて耳を澄ませば、小さな嗚咽のようなものが聞こえてきた。

それは台所からしていて、台所へ向かった私はようやく、床に蹲るエトナの姿を見つけた。コンロの上には、すっかり焦げ付いたカレーの鍋も見える。

「エトナ……?」

何かがあったことを察した私は、おそろおそろ彼女の名を呼ぶ。そこではじめて、エトナが顔を上げた。その顔は今まで見たこともないくらいに蒼白で涙まみれで、そして絶望に染まっただけ。

「トーロ、さん……」

継るような、しかし恐れるような声。

彼女の小さな身体はガタガタと小刻みに震えていて、今のこの状況がただならぬことだと教えてくれる。

「っ……!」

私は鞆を放り捨てて、思わずエトナを抱きしめていた。

彼女の身体は酷く冷え切っていて、どうしようもなく不安になる。

「……どうしたの?」

内心で動揺しつつ、なるべく落ち着いた声で尋ねる。

するとエトナは、何かを言おうと喘いだ後、

「ごめ……な……ごめん、なさい……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……い、ごめんなさい……」

と繰り返し、私の胸の中で震えた。

何かがあった、何か酷いことが。

でも、私にはそれが何だったのか分からない。
だから、少しずつ紐解いていくしかない。

「カレー、失敗しちゃったの？」

できるだけ穏やかな声で問いかける。

エトナは小さく頷いてから「ごめんなさい……」と絞り出した。
それに私は、彼女の後頭部をぽんぽんと優しく撫でながら、

「いいよ、失敗くらいいくらだってしていいんだから。それより、
ケガとかしてない？」

そう、心から思いやった。

するとエトナは言葉を詰まらせて、一際強く私の胸に顔を埋めて
嗚咽を漏らしたあと、やはり「……ごめんなさい」と声をこぼす。

「謝らなくてもいいってば」

「でも……トーコさんおしごとがんばってたのに……わたし……ま
た、めいわくかけて……やく、たたずで……」

「そんなことないってば。私、昨日あなたがご飯作ってくれて
言ってくれただけですごく嬉しかったんだから。それだけで充分だ
よ。役立たずだなんて、そんな悲しいこと言わないで」
「でも……」

エトナは変わらず私の胸に収まったままだった。

涙が止まらないらしく、時折り鼻を吸る音がする。

このジャケットは一旦クリーニングかなあなんて思いつつ、何も
言わずにエトナのことを抱きしめて待った。

やがて、エトナが顔を上げる。

涙でぐしゅぐしゅで、目は真っ赤に腫れていた。

彼女はまだ血色を失ったままの唇を震わせ、私に訊く。

「どうして、トーコさんはそんなに優しいんですか……?」

「私が、優しい?」

唐突な質問に少し驚きつつ訊き返すと、エトナは小さく頷いた。

そして、私の答えを渴望するように黙って見つめてくる。

だから私は、私が思ったことをありのままに言った。

「私は優しくなんかないよ」

「そんなこと」

即座にエトナが否定しようとする。

けれど私は、それを遮って言葉を続けた。

「ううん、ほんとだよ。あなたに、何か優しくしてあげようだなんてこれっぽっちも思っていない。ただ、あなたにしてあげたいことをしてるだけ」

「してあげたいことを……してる、だけ?」

「そう。今だって、泣いてるあなたを見てどうしようもなく抱きしめてあげたくなったから、そうしてるだけ。だからこれは、優しさなんかじゃないよ」

そう言ってエトナの頭を抱き寄せて、頬を寄せる。

「じゃあ……なんなんですか……? トーコさんが優しくないなら、今トーコさんが私を抱きしめてくれるのは……どうして、なんですか?」

耳元で囁かれたその声は切実で。
きつと、有耶無耶に答えてしまえば致命的な何かに陥りそうに思えた。

エトナの心は今、とても消耗して壊れかかっているらしくて。でも、壊れないように必死に継いで接いでをしているようだ。

だから私も一緒に、エトナの心を直してあげたくて　　言う。

「あなたのことが、愛おしいからだよ」

その一言に、エトナが息を呑むのが分かった。

頬を寄せ合っているから、表情は分からない。けれど今の彼女が、信じられないというような顔をしているのは手に取るように分かった。

「エトナに笑っていてほしいなあとか、今頃なにをしてるんだろうなあとか、抱きしめると細くて温かいんだなあとか、悲しんだり辛くなったり苦しんだりしてほしくないなあとか……あなたがここに来てからずっと、そんなことばかり考えてるんだ。それってたぶん、愛おしいからなんだろうなって。……ほんとはもっと適した言葉があるのかもしれないけど、私はあなたのことがすごく愛おしい大切にしたいの」

そう言って私は一際強く、彼女の小さな身体を抱きしめた。

愛だなんて言葉を使いはしたが、女同士だし、ましてや年の差だって倍もある。だからこれは恋愛感情だなんて分かりやすいものでもないはずだ。

私自身、これだという言葉が見つからない　　だから無理やりに

『愛おしい』という言葉に嵌めこんだ。
でも、今はそれでいいはずだ。
いずれびつたりという言葉を見つければいいだけなのだから。

「……わたしも、トー」さんのこと愛おしいです。とっっても、とっ
ても……」

震える声で囁き、エトナもぎゅっと抱きしめ返してくれる。

「じゃあ、両想いだね。私たち」

「……はい。両想いです」

私が冗談めかして言うのとエトナは静かにそっと、そう言った。
それから少しの間お互いの輪郭を確かめるように抱き合ったあと、
私は訊くべきことを訊くことにした。

「なにかたいへんなことがあったんだよね。カレーが失敗しただけ
じゃないんでしょう?」

「……はい」

エトナが小さく頷く。

私は彼女のさらさらの銀髪を梳いて指に絡めながら、続ける。

「それは、私にどうにかできること?」

「……できません」

「そっか」

「ごめんなさい……」

「謝るようなことじゃないでしょ」

微笑んで、私は腕を緩める。

完全な密着状態から、向き合う形になって　そつと、お互いのおでこを触れ合わせた。

「なにか、私にできることってある？」

お互いの吐息を感じる、少しでもその気になれば鼻先や唇まで重なりそうな距離で問いかける。

それにエトナは、顔を離したり逸らしたりせず泣き笑いのような表情で、一言。

「……このままのトーコさんで、いてください」

「そっか。ん、分かった」

言つて、私はエトナからおでこを離し、もう一度ぎゅっぐゅっぐゅっぐゅっ抱きしめた後、ぱつと彼女を解放して立ち上がった。

「よし、それじゃあエトナが作ってくれたカレーを食べよう！」

「え……えっ？」

唐突な私の物言いに、エトナはぼかんとする。
しかし私は構わず続けた。

「焦げてるけど、まだ充分食べれるでしょ。ご飯は炊いてくれてるみたいだし」

「あ、あの、トーコさん、そんな無理はしないでください……！」

「無理なんかしてないってば。だって、エトナが作ってくれたんだもん。食べたいよ」

「で、でも……絶対、不味いです……」

「食べてみるまで分からないってば。どう？　エトナも一緒に食べる？　エトナが食べないなら私1人で食べちゃおうよ」

「冗談めかして笑いかけ、訊く。
するとエトナは言葉を失って俯いてしまい、両手で顔を押しさえて
震え出して、

「たべ、ます……！　一緒に、食べたいです」

そう言った後、また泣き始めてしまった。

「可愛いなあ、この泣き虫さんめ」

ぼんぼんと彼女の頭を優しく撫でた後、私は食器の準備を始めた。
すぐに泣き腫らしたままのエトナも立ち上がって、一緒に準備す
る。

カレーは、やっぱり苦くてザリザリした。
でも、今まで食べたどんなカレーよりも幸せだった。

「トーコさんのおっちゃん。」

「トーコさんて、普段どんなお仕事をしているんですか？」

水曜日の夜。

2人でお風呂に入っていると、エトナがそんなことを尋ねてきた。浴室には柚子の香りが満ちている。

入浴剤によって白く濁った湯船の中、私はエトナを背後から抱きしめるようにして足の上に乗せていた。彼女は首を回して私を見上げ、返事を待っている

そつえば仕事の話はしていなかった。

するタイミングや暇がなかったとも言えるけれど。

「私の仕事は物語を書いたり纏めたりすることだよ」

「物語……小説家さんですか？ トーコさんのお部屋には本がたくさんありましたけど、もしかしてあの部屋にトーコさんの本も……？」

好奇と尊敬が混じった瞳で見つめてくるエトナ。

私は苦笑し、どう説明したものかと一瞬迷う。

「小説は書いてないんだ。会社の同僚には書いてる子もいるんだけど、私はもっぱらゲームのシナリオかな。パソコンとか、昨日ちよつとだけ使い方を教えてあげたスマホでできるゲームの物語を書いているの」

「わぁ……！ それって、わたしも読めますか？」

「まあ、読めるけど」

そう返すと、エトナは案の定「トーコさんが書いたもの、読みたいです」と言った。

だがそこで私は逡巡する。

最近関わった仕事はスマホ向けゲームが大半で、どのゲームも無料ダウンロード可能なものばかりだ。ただ、関わったタイトルが多すぎるしメインシナリオを担当したのもあればイベントシナリオの一部や特定のキャラだけを担当したタイトルもある。メインシナリオを担当したものだって、まさか全てを私1人で書いたわけではないし、クライアントの意向が大なり小なり盛り込まれている。

それに、私は関わったゲームをいちいちインストールしてやり込むほどのゲーマーでもないため、ほとんどのゲームは最初から始めなければならぬ。

要は、私が関わったゲームのシナリオを読むのは時間がかかるうえに、クライアントや他のライターさんが関わった部分もあるため『私が書いたものを読みたい』というエトナの要望を100%叶えるのは難しいということだ。

それを伝えるとエトナは、

「そうですか……時間もかかってしまっんですね……」

と、正面を向いてしゅんと肩を落とした。

「でも、トーコさんが書いたもの……やっぱり、読みたいです。後でゲームのこと、教えてもらってもいいですか？ できるだけ、トーコさんがたくさん物語を書いたゲームがしてみたいです」

私に後頭部を向けたまま、エトナがぼつりと言っ。
それに私は「ん、いいよ」と言ってから、「あ」とふと1つのゲームを思い出した。

「ある……1つだけ、私が好き勝手書いたやつが」
「え？」

エトナが、今度は身体ごと反転して私のことを見上げてきた。

「昔、私がまだ学生だった頃に趣味でゲームを作ってる友達がいね。その友達に頼まれて書いたシナリオがあるんだ。素人が集まって作ったゲームだから出来は保証できないけど、私が今の仕事をすきっかけになったゲームだし……たぶん、部屋を探せば見つかるはずだよ」

「ほんとですか!？」

「うん。お風呂上がったら、探してみる」

「ありがとうございます!」

エトナが、濡れた銀髪を頬に張り付けたままえへえと笑っ。

私はその銀髪を指でそつと剥がしてやりながら、「もうだいたい前に書いたものだから、クオリティは期待しないでね」と念を押す。

「でもどうしていきなり、私の仕事なんか気になったの？」

そう訊くとエトナは「だって、トーコさんのこともっと知りたいですから」とほっこり笑った。

それから私の胸に、そつと右の側頭部を預けてくる。

「ふふっ、くすぐったいってば」

言いながら、私はエトナの頭をそつと抱きしめて撫でる。
昨日のカレーの一件以来、どうにもエトナは甘えん坊さんになっている気がする。昨日は眠る前に控えめながらも足を絡めてきたし、今朝も目覚めてからしばらく甘えた声で私の名前を呼びながら、私の手にほっぺをすりすりしていたし。

可愛いから、ぜんぜんいいんだけど。

これがエトナの素なのかもしれないと思うと、彼女との距離が狭まってきているように感じられて嬉しかった。

「のぼせちゃうから、10数えたら出ようか」
「はい」

耳元で囁いてあげると、エトナも囁き声で返してくる。

そつして私たちは、そのまま静かに10まで数えて一緒に浴室を出た。

いつもそつするように、私は大きなバスタオルをいっぱいに広げて、エトナの華奢な身体をそつと拭いてやる。

時折りくすぐったいのか、エトナが「んっ……」と吐息をこぼすのを聞きながら、足の先まで拭き終える。

そつして普段なら、私は自分で身体を拭くんだけど。

エトナが私を上目遣いで見つめ、両手を伸ばしてきた。

「今日は、わたしも……お返しに、拭いてあげたいです」
「じゃあ、お願いしちゃおうかな」

そつ言つて、エトナのことを拭いたばかりのタオルを彼女に渡す。
エトナは若干緊張した面持ちで手を伸ばし　しかし、身長差の

せいで私の髪に上手く手が届かないようだった。背伸びをして、私
がそうしたように頭にタオルを被せて優しく撫で拭きたいらしいが
上手くいかない。

「あつっ……んっ……！」

ぶるぶると爪先立ちでどうにか私の髪を拭こうとするエトナがい
じらしくてもうしばらく見ていたかったが、いい加減湯冷めすると
思い、私は姿勢を低くした。

「ごめんごめん、最初から屈んであげればよかったね」

「いえ、わたしが小さいのがいけないので……」

「そんなことないよ。エトナはちっちゃくて可愛いままでいいんだ
から」

「うう……」

恥らって頬を染めながら、エトナは私の身体を丁寧に拭いてくれ
る。

胸やお腹を拭かれると、くすぐったいやらもどかしいやらで思わ
ず「んっ……」と声が漏れて、ああこれは確かに声が出ちゃうなと
納得した。

「できました……！」

「うん、ありがとう」

任務達成とばかりに満ち足りた顔をするエトナに微笑みを返し、
私たちはそれぞれパジャマを着る。一着だけでは寂しいと思って仕
事帰りに買ってきたキャミソールとニットパーカーは、エトナによ
く似合っていた。

「うんうん、可愛い可愛い」

「えへへ……」

抱きしめてよしよししてあげると、エトナは照れ笑いを浮かべる。

「それじゃあ、リビング行こうか。髪乾かしてあげる。その後でゲーム探そう」

私たちはどちらともなく手を繋いで、リビングまでの短い距離を歩いた。

トニーさんのゲーム。

「おっ、あつたあつた」

寢室の本棚、その一番右上の端に差さっていた透明なCDケースを手にしながら私は言った。

中に入っているCDの表面には油性ペンで『最期の日までに』と書いてある。それが、私が大学2年生の時にシナリオ製作に誘われたゲームのタイトルだった。

「それじゃあ、早速やってみる？　ちょっとシリアスというか重いストーリーだと思うから、苦手なら別のゲーム探してみるけど」
「いえ、それがいいです……！」

ベッドの端に腰掛けたエトナが、期待のまなざしとともに頷いた。私はサブのノートパソコンを引っ張り出して、エトナの隣に肩を寄せ合って座る。

パソコンを起動し、CDをセット。インストーラーが正常に作動し、ゲームがインストールされる。

「これって、どういうゲームなんですか？」

「ノベルゲームって言って物語を読み進めるのがメインのゲームだよ。途中で選択肢が出てきて、それによって物語が分岐するから、選ぶ時は慎重にね」

「分かりました。　わあ、綺麗で可愛い絵ですね」

ゲームが起動しメイン画面になる。

『はじめから』『つづきから』『オプション』というシンプルな

項目の背景には、病衣を着た少女と真っ白なワンピース姿の少女がひまわり畑で手を繋ぎ、満開の笑顔を咲かせているイラストが表示されていた。

「それじゃあ、やってみようか」

そう言って手招きし、私の膝の上に座るように促す。

2人で画面を見ながらプレイするならエトナに膝上に座ってもらうのが1番だと思つてのことだったが、彼女は恥ずかしそうに首を振った。

「さすがにそれはその……わたし、重いですし……」

「いやいや、どの口が重いつて言えるの」

「ひゃっ!？」

私はパソコンを脇に置き、ちょっと強引にエトナの腰を掴んで持ち上げ、膝に座らせた。小柄で軽い彼女の身体はすっぽりと私の膝にフィットする。

「ふふっ、全然重くないよ。っていつか、極楽」

後ろからぎゅーっと抱きしめつつ、ちょうどいい高さにある彼女の後頭部に顔を埋める。同じシャンプーとコンディショナーを使っているはずなのに、エトナの髪は特別いい匂いがするようない感じがした。

「あう……」

耳先まで赤くしたエトナは、私の膝の上でもじもじする。

その仕草がなんともいじらしくて、ちょっとキュンとした。それ

と同時に悪戯心が湧いてきて、エトナの耳にふっと息を吹きかける。

「ひゃうっ!?!」

腕の中でエトナがびくびくつと震えた。

「と、トー」さん……!?!」

情けなくて可愛らしい声で抗議された。

かわいい。

「ごめんごめん、つい」

「うう……ついつてどういう意味ですか……?」

「反応が可愛いから、いじわるしたくなっちゃう感じかなあ」

言いながら、エトナのほっぺをつつく。

ぶにぶにでやわらかい。

「あうあう……と、トー」さん、い、いつか……その、し、仕返し
しちゃいますからね……!」

「へえ、それは楽しみだな」

「ほ、本気ですからね……! わ、わたしだってんひゃっ!?!」

せいっぱい強がるエトナがたまらなくて、私はもう一度エトナの
耳に息を吹きかけた。

「うう……トー」さんがいじめる……」

身体を捻って、潤んだ瞳でエトナが見上げてくる。

それに私は「ごめんごめん」と笑いを堪えながら謝った後、「さ

あ、ゲームしよっか」と言った。

「むう……」

エトナはまだご不満といった様子で、ムっとしている。

その素の表情を見て、私は嬉しくなった。

いつの間にかエトナは、とても表情豊かな女の子に変わっている。いや、戻ったと言うべきか。

ともかく私は嬉さのままに、エトナを再びぎゅーっと抱きしめた。

「エトナが可愛くてついついいじわるしたくなっちゃうんだよ。悪いお姉さんでごめんね。嫌だったら、もうしかないから」

「べ、べつに……嫌とかじゃ……。ただ、その……わたしばかり恥ずかしいことをされるのは不公平といえますか……いじわるなトーコさんも、その……嫌いじゃないですし……でも、たまには反撃したいなって……」

ぼそぼそと言った後、恥ずかしそうに呻くエトナ。

そんな彼女の言葉にピンときた私は、こう提案した。

「じゃあ、エトナも私の耳にふーってする？」

「えっ……?」

「それで公平ってことで、どう？ まあ、エトナが私にそんなことできるならの話だけ」

挑戦的な声で言い、私はエトナを煽る。

彼女のことだから「そんなことできません……!!」と照れるだ

ろうか。

もし実行に移せたとしても恥ずかしがりながら控えめな吐息を吹きかけるのがやっただろうし、そうならばもっとからかつて可愛がれる。

どのみち私の圧倒的勝利だ。

なんて思っていると、

「や、やります……!!」

そう言ってエトナは、私の膝の上で反転して私と向かい合う体勢になった。

一瞬見つめあった後、彼女は私の両肩に手を載せて身体を密着させてくる。それから右の耳元に唇を近づけてきた。

「い、いきますね……?」

耳元でエトナが囁く。

わざわざ吐息を吹きかける前に断りを入れるあたり、彼女らしいなと笑みがこぼれた。これでは待ち構えてくださいと言っているよなものだ。

ここは大人のお姉さんらしく余裕で受け止めてやろうじゃないのと、エトナが吹きかけてくるであろう吐息を待ち構えて。

瞬間。

はむっ と、私の右耳をエトナが甘噛みしてきた。

「はひゃっ!?!」

私の口から、自分でも驚くほど上擦った声が漏れた。
急激に体温が上がり、動悸が激しくなる。

「え、エトナ!？」

甘噛みの余韻残る右耳を触りつつ、私は慌てる。

一方のエトナは顔を赤らめながらもどこか満ち足りた笑顔で、

「し、仕返し成功です……!」

と言って。

しかしそこで羞恥の限界だったのか、表情を見られまいとするように私の胸に顔を埋めてしまった。

何か言い返したかったが、結局私も恥ずかしさでいっぱいだったため言葉は出てこない。

結局、しばらくむず痒い沈黙が流れた。

それからエトナが顔を上げて照れ笑いを向けてくる。

私も笑いかけながら言った。

「まさかエトナが、あんなに大胆な子だとは思わなかったな」

「そ、それはトーコさんがいじわるしたせいです……!!」

「ふうん。じゃあ、もっといろんないじわるしたら、もっと大胆なお返しをしてくれるってこと?」

「っ……!! そんなことしません!!」

「あはは、ごめんごめん」

さすがにからかい過ぎたかと、謝罪の意味も込めてエトナの頭を
ぼむぼむ撫でる。

エトナもすぐに柔らかい表情になって、撫でるのを受け入れられた。

「ちょっと脱線しちゃったけど、ゲームに戻るうか」

改めて座り直し、私たちは『最期の日までに』を始める。

このゲームはタイトルの通り、最期の日までを過ごすストーリーだ。

とある夏。死期近い入院患者の少女・ユキが、部活でケガをして病院を訪れていた少女・アヤと出会うところから物語ははじまる。彼女たちはすぐに打ち解け、同時にユキの余命が幾ばくもないことを共有する。

そこから2人は死ぬまでどう過ごすかを考え、実行し、何かしらの答えや思い出などを得てユキの死を迎えるという内容だ。

ユキの死は避けられず、その死にどう向き合うかというのが物語の焦点だった。

私が趣味で文章を書いていることを把握していた友人（このゲームのイラストを手掛けた人物だ）が、とあるイベントでゲームを頒布したいとのことでシナリオ執筆の話を持ちかけてきたのがきっかけで。

私がムリを言って当初全く予定になかった隠しルートを組み込んだり、その隠しルートを大学のOBだった一三峰雪花（社長）が偶然読んだことで今の会社テノルテに誘われたりと思い出深いゲームでもあった。

だがまさか7年越しに、それも異世界エトナから現れた魔女と一緒にプレイすることになるとは……。

エトナが食い入るように画面を見つつ、ワイヤレスマウスをクリックしてテキストを進めていく。私はそんな彼女の進行ペースに合わせて、昔の自分の拙くも瑞々しさのある文章を追った。

幸い、エトナはこのシナリオを楽しんでくれているようだった。笑うところではくすつと笑ってくれて、驚くポイントでは「わっ」と小さく呟いていた。狙った通りのリアクションがあると、書き手としてはやはり嬉しい。

物語1章が終わる頃には、すっかり時間が経って0時前になっていた。

「ふわぁ……………」

私が時間を気にするのと同時に、エトナがあくびをする。

「ちょうどいいし、そろそろ寝ようか」

「えっ、でも……………」

エトナが名残惜しそうな目で見上げてくる。

だがその瞳は眠気に負けはじめて、とろんとしていた。

「セーブすれば、この続きがすぐできるから大丈夫だよ。そのパソコンどうせ使ってなかったからエトナ専用にしていいし、明日以降暇な時にゲームしていいから」

「分かりました」

言って、エトナは「また明日会いましょうね」とゲームの中の子キとアヤに囁きかけた後、セーブしてパソコンを閉じた。

「それじゃあ、寝る準備しよっか」

私たちは歯を磨いたりした後、ベッドに潜り込んで電気を落とす。特に何か言わなくても寄り添い、抱き合うような格好になる。まだ暗闇に目が慣れていなかったが、それでもエトナの頭がどこにあるのか分かるため、そつと手を載せて撫でた。

彼女も、お返しとばかりに私の頭に手を伸ばしてきて甘撫でしてくれる。

「ふふっ、くすぐりたい」

「わたしは、きもちいです……」

眠たげで、普段より甘いエトナの声。

私は彼女の頭を撫で続けながら訊いた。

「ゲーム、どうだった？」

「面白かったです……ユキちゃんもアヤちゃんも可愛くて、これからどうなるのか楽しみです」

「そっか、よかった」

声の様子からして本心らしいと感じ、私はほっとする。

「でも、ユキちゃんが心配です……病気が治りそうもなくて、もうすぐ死んじゃうって……助からないんですか？」

「……それは、ゲームを通して見届けてくれると嬉しいな」

私がムリを言って追加してもらった隠しルートなら……という言葉は引つ込めて、ゲームを作った人がよく言いそうな言葉をチョイスする。

エトナが隠しルートに辿りついてくれるといいなと思っていると、彼女はぼつりとつぶやいた。

「もし……わたしがもうすぐ死んじゃうって言ったら、トーコさんはどうしますか？」

「えっ……？」

撫でる手を止め、私は暗がりの中で薄っすらと見えるエトナの顔を見つめた。

その表情はハッキリとは分からないがやはり眠そうで、そして穏やかに微笑んでいるようだった。しばし私たちは見つめあう。やがてエトナがふわっと笑った。

「なんて、冗談です。わたしは不死なんですから、死んだりしません」

「……………」

「トーコさん……？」

不思議そうに私のことを呼ぶエトナ。
そんな彼女を、私は力いっぱい抱きしめた。

「あの、トーコさん……？」

「……………」冗談でも、そういうことは言わないで」

困惑するエトナに対し、私は胸の奥で渦巻く感情を絞り出すようにして言った。

「ごめんなさい……………」

「……………」それとも、冗談じゃないの？」

脳裡に浮かぶのは、先日　エトナがカレーを焦がしてしまった日のこと。

彼女には何か抱えているものがあって、でも私にはどうすることもできなくて。

私が無遠慮に踏み込むべき領分でないと思ったから何も訊かずにいたけれど、実はエトナはもう取り返しのつかない何かへと転がり落ちているのではないだろうか。

だがエトナは、そんな私の不安を掻き消すように笑った。

「死ぬわけじゃないじゃないですか。……だいじょうぶです」

その無理やりなくらいに明るい笑顔は、出会って最初の頃によく見たものだった。

でも、それ以上私が何か訊くことはなかった。

そんな勇気、私にはない。

代わりに私は、エトナの頭を優しく撫でて微笑みかける。

「そっか、よかった」

やがて、エトナはすうすうと小さな寝息を立てはじめた。

その穏やかで愛らしい寝顔を眺めながら、いつしか私も眠りに落ちる。

このままの日々が続けばいいなと、願いながら。

お泊り此葉 1

翌々日、金曜日。

私は普段より1時間ほど早い17時に仕事を切り上げ、荷物を纏めた始めた。

エトナと過ごす時間を少しでも増やすために、普段以上のペースで仕事をこなした結果だった。

「およ？ 今日早いですね」

隣のデスクで作業していた此葉が、椅子に座ったまま言った。彼女は椅子のローラーをカラカラ鳴らしながら私の傍まで寄ってくる。「っていうか先輩、最近帰るの早いですよね。いつも遅くまで残ってシナリオチェックとか他の人のフォローしてるイメージだったんですけど」

「そうだったけ？ まあ、たまたまだよ」

無邪気に八重歯を覗かせて言うてくる此葉に、私は軽く笑って返す。

視界の端で白咲がこちらを一瞬見て 見ていることがバレたと気付いて慌てて顔を伏せていた。なにしてるんだろ、あの子。

「……まさか、男っすか？」

此葉の目が怪しく光る。

視界の端では白咲がガバツと顔を上げ、慌てて伏せていた。

私は呆れながら手を振って否定する。

「いや、それはないって。単純に早く帰ってゆっくりしようかなってだけだよ。どこか行く予定とかも全然ないし」

「なーんだ、そうなんすね。でももし恋人ができたなら、自分にも教えてくださいますよ？祝福したり応援したりするっすから」

「はいはい。じゃあ、あなたも好きな人とかできたら私に言いなさいね」

「あ、それならすぐ言えるっすよ」

「え？」

思わず、鞆に入れようとしたノートを取り落として此葉の顔を見る。

色気より食い気、花より団子の後輩がまさか　と愕然としてみると、此葉は目を細めてにんまり笑った。

「自分が好きなのは、このテノルテの人たちっす。先輩も白咲さんも社長も、みーんな好きっす。もう、だいたいだーい好きって感じっすね」

そう言っつて、「たはー！　言っっちゃったっす！」と椅子をくるくる回しながら照れる此葉。

私は拍子抜けして脱力した後、自然と笑みをこぼす。

「なんていうか、此葉には今のままの此葉でいてほしいな」

「????　自分は今も昔もこれからも、こんな感じだと思っつすよ」

きよとんと首を傾げる此葉。

うん、それでいい。そのまま置いてほしい。

「それじゃあ、またね」

荷物を纏め終えた私は、別れを告げてオフィスを出ようとする。だが、此葉の話はまだ終わりではなかった。

「あ、先輩先輩。明日明後日って休みつすか？」

「うん、休みだけだ」

先週は仕事の進行上入社していたが、今週は土日休みだ。

「なら、そろそろまた先輩の家に泊まりに行っていいつすか？」

「あー……」

私は返答に窮した。

エトナがいるから、私の一存で了承するわけにはいかない。かといって、早々に断るわけにもいかなかった。

というのも、此葉は毎月1、2回休日のタイミングを合わせて私の家に泊まるのが恒例となっていたのだ。

泊まって何をするのかと言えば、様々だ。

ゲームをしたり彼女が持っているプロジェクターで映画鑑賞をしたり、意外と料理上手な此葉の手料理を堪能したりシナリオ談義をしたりで、泊まること自体が目的になっている節すらある。

今まで此葉のお泊り希望を断ったことはないだけに、ここで断れば勘繰られる可能性はおおいに考えられた。

「もしかして、都合悪かったつすか……？」

私の歯切れの悪さに何か感じたらしい。

此葉がしょんぼりした声音で訊いてくる。

猫っぽい雰囲気があるクセに、まるで飼い主に構ってもらえないミニチュアダックスフントみたいだった。

「悪くはないんだ。ただ、ちょっとまだ予定が不透明でさ。今日中に改めて連絡するから、待ってもらっていいかな」

私はひとまずそう言った。

一人暮らしだった頃なら、二つ返事でお泊りOKと書いていただろうが、今の私はエトナと暮らしている。同居人の意思を聞かないことには、物事は進められない。

「そういうことなら了解す！ あ、でも無理はしなくていいっすからね。自分はいくまで、もしお暇なら邪魔したいなっ！ てくらないんで。断られたらさびしいな！ とか、人肌恋しいな！ とか、自分いらない子なのかな！ とか思ったりしないっすから！ もう、全然！」

此葉は力強く言って、「じゃあ、連絡待ってっすからね！ お疲れさまっす！」と告げると自分のデスクに戻り「今日中に全部かんっぺきに仕上げてるっすからねえええ！」と気合充分でキーボードを鳴らし始めた。

どうやら、溜まっている仕事を終わらせて明日明後日を憂いのない休みにしたいらしい。その頑張りが報われるか否かが私にかかっていると思うと、だいぶ重荷だ。

「それじゃあ、お先です」

オフィスに残っている他の面々に言って、私は出入り口へ歩を進める。

途中で白咲の視線を感じたので軽く手を振ってみたが、ぷいっとそっぽを向かれてしまった。いつもならもっとグイグイくる彼女がここまで控え目だとなんだか調子が狂うなと思いつつ、エレベーターに乗った。

ふと、ラインのメッセージ受信音が鳴る。確認すると、差出人は白咲だった。

『おつかれさま』

変換すらされていない平仮名6文字が表示される。ますます普段の彼女らしくないなと思いつつも、返信した。

『お疲れ様。白咲も、あまり無理しないでちゃんと休んでね』
すぐに既読がついた。

だが結局私が家に着くまで、それ以上メッセージは来なかった。

塔子がオフィスを出てから10分ほど後。

白咲灯鞠は、手の中のスマホの画面を眺めてニヤニヤニヤニヤしていた。

画面には、

『お疲れ様。白咲も、あまり無理しないでちゃんと休んでね』

という、塔子からのメッセージ。

それをもつ何度目かも分からないくらい心の中でつぶやき、笑みを深める。

「なにしてんすか、白咲さん」

「どわっひゃい痛っっ!？」

突然背後から声を掛けられ、灯鞠は飛び上がった。

その拍子にデスクの裏面に膝をぶつけてしまい、突っ伏して震える。

「ええ……」

あまりに派手なりアクションをしてしまったせいか、声を掛けてきた此葉は若干引いていた。

「なんかごめんなさいっす。まさか白咲さんが職場でエッチなサイトを見てるだなんて思ってもみなかったんで……」

「……勘違い甚だしいんだけど、殴っていいかしら」

ドスを利かせた声で言うと、此葉は慌てて「じよ、冗談すよお。

本当は塔子先輩からのメッセージを見て普段ではありえないくらいにとろけた笑顔をしてただなこと、自分は全く知らないっすから」と口にした。

よし、殴ろう。

ややアッパー気味に放ったこぶしは、見事に此葉の鳩尾を捉えた。

此葉は「ぐふっ」と呻き、その場に蹲る。

灯鞠はヒールを脱ぎ、黒ストッキングに包まれた右足を蹲っている。此葉の頭に乗せた。

「で、何かしら。チームが違うあんたがわざわざこのあたしに声をかけたってことは、それなりに大事な用事なんでしょうね」

ぼむぼむげしげしと此葉の頭を弄ぶ。

此葉は「これが噂の『我々の業界ではご褒美です』ってやつすかね……たまんねえっす」とつぶやいた後、ひょいっと灯鞠の足から逃れて立ち上がり、

「社長が呼んでるっすよ。『灯鞠が私のラインを既読無視してるんだ。もう無理、社長辞める』って、自分とくに泣き言ラインが飛んできたっす」

「あっ……」

塔子にラインを送る直前に、別室にいる社長の雪花からラインが来ていたことを灯鞠は今になって思い出した。そういえば既読した覚えもある。

「やつばっ……!!」

灯鞠は慌てて立ち上がり、別室へ向かった。

残された此葉は、能天気な笑みを浮かべて「いつてらっす」と手を振った。

お泊り此葉 2

「トーコさんの後輩さんが、お泊りに来るんですか？」

チュニツクの上からエプロンを着たエトナは、ぱちくりと目を瞬かせた。

彼女は両手に盆を持っていた。

盆にはポトフやオムレツ、バケツトなどが載っている。

バケツトは駅前の美味しいパン屋さんで買ってきたものだが、ポトフやオムレツはエトナのお手製だ。

カレーこそ失敗したものの、それ以降も彼女は夕飯を作ってくれている。

「まだ決定ってわけじゃないんだけど、来たいって言うて……どうしようかなって」

「……何か問題があるんですか？」

テーブルに料理を並べながら、エトナは首を傾げる。

その可愛らしい仕草に一瞬口元が緩む。が、すぐに私は真面目な顔で言った。

「その問題っていうのはエトナのことだよ。あなたのこと、どう説明すればいいのか分からないし」

「あつ」

「それに、そもそもエトナが私の後輩 碓氷此葉っていうんだけど、その子に会いたいかどうかもあるし」

「……………」

ふいに、エトナが柔らかく笑った。

不思議に思って視線を向けると、彼女はちよつと照れながら「ト
ーコさんがわたしのことをちゃんと考えてくれてるんだなって思っ
たら嬉しくて、つい……」と言った。

「それは、なんていうか当たり前でしょう。一緒に暮らしてるんだ
から」

「……トーコさんにとっての当たり前が、わたしには嬉しいんです」

温かみのある声で言い、エトナはコップに麦茶を注いでいく。

「トーコさんの後輩さんには、わたしも会ってみたいです。トーコ
さんと仲が良い方でしたら、きつと素敵な人でしょうし」

「まあ、いい子だよ。たぶんすぐ仲良くなれるとは思つ」

此葉のコミュニケーション力は尋常ではないので、そこは心配な
い。この前一緒にお昼ご飯を食べに行ったインドカレー屋のネパー
ル人店員と意気投合してチーズナンとかサービスしてもらってたし。

「となると、あとは私とエトナがどういう関係か……か。まさか正
直に異世界から来た魔女を住ませてますだなんて言えないし」
「そうですね……」

麦茶を注ぎ終えてエプロンを脱いだエトナが、やや曇った表情で
私の対面に座った。

「まあ、とりあえず食べよっか。せつかくの料理が冷めちゃったら
もったいないし」

私は気を取り直すように言った。

エトナも「はい……！」と明るく応じ2人で「いただきます」を重ねる。私はまず、果肉感たっぷりトマトソースがかかったオムレツに箸を伸ばす。

「エトナって、料理上手だったんだね。昨日作ってくれたグラタンもだけど、見た目も綺麗だし美味しそう」

「そんなことないですよ……インターネットで調べて、上手く作るコツを試したのがたまたま成功しただけですし、お口に合うかどうか……」

「そこはもっと自信持っていいと思うな」

言いつつ、箸を口に運ぶ。

酸味がきいたトマトソースとバターたっぷりのふわふわオムレツが口の中でとろけた。

「うっっっん、美味しっ！ 私、こんなに美味しいオムレツはじめて食べたよ」

「……っ！」

笑顔で本心を告げると、エトナはえぐぼを作って「よかったです」と言った。

それから彼女も遅れてスプーンを手にしてオムレツを食べ、

「美味しくできてました……！」

と、はにかんだ。

その初々しさがなんと愛らしくて、食事中じゃなかったら思わず抱きしめているところだった。危ない。

ポトフも、大きめに切られたじゃがいもやにんじんが食べごたえ満点で、コンソメベースのスープは胡椒などの香辛料によって風味豊かに仕上げられていた。カリカリに焼いたバケツトとの相性も抜群で、追加でバケツトを焼くくらいに食が進んだ。

……なんか、幸せだなあ。

新しく焼いたバケツトにとろけるチーズを載せて食べながら、そう思う。

同じくチーズを載せたエトナは、チーズがとろけ過ぎて落ちそうになっているのをあわあわしながら口で受け止めていた。ほっそりとした喉を晒して上を向き、垂れそうになるチーズを食べている彼女の姿が、ちょっとだけえっちな気がしなくもない。

「誰かがご飯を作ってくれるのがこんなにも幸せだと思わなかったな。エトナのおかげだよ、ありがとう」

「はへっ!?! ん、んぐっ……!!」

ようやくチーズとバケツトを口に収めたところだったエトナが、喉を詰まらせたらしかった。私は慌てて麦茶を差し出す。

「ん、んぐっ……!! はあ……!! ぐ、ごめんなさい、びっくりしちゃって……!!」

「なんかごめんね、びっくりさせちゃって」

ちょっと涙目になっているエトナに、苦笑いしながら謝る。

「あ、謝らないでください。……むしろその、嬉しいです。トーコさんのお役に立てているのなら、わたしもとっても幸せです。……こんなご飯くらいでよければ、いつだって作ります」

「ほんと？　なら、いつだって作ってほしいなあ」

エトナが来る前は夕飯はコンビニ飯か外食が大半だったし、自炊もせいぜいカレーや炒飯が関の山だった。寂しさを紛らわせるようにアルコールに溺れる日も少なくともはなかったのだけれど、彼女がいるから今はそれすらない。

「ごちそうさま」

お互い食べ終えた後、私はエトナのぶんもまとめて食器を台所に持っていく、それから冷凍庫を開ける。そこには、ハーゲンでダッツなバニラアイスが2つ。スプーンと一緒に、リビングへ持っていく。

「じゃん！　今日のデザートはアイスクリームだよ」

「わぁ………！」

ドヤ顔でアイスクリームを掲げて見せると、エトナは胸の前でパチパチと控えめな拍手をしてくれた。可愛い。期待感からか、瞳もきらきらしている。

「ほら、ごちおいで。一緒に食べよ」

「はい………！　じゃ、じゃあ失礼します」

私が正座して座り、その膝上にエトナがちょこんと座った。彼女の小さな頭がちょうど私の胸に寄りかかるような格好になる。

「はいどーぞ」

「ありがとうございます………！」

アイスを受け取ったエトナは慎重な手つきで蓋を開け、スプーンで掬ってゆっくりと口に運んだ。それから「はぁ……」と甘い吐息をこぼす。

「お気に召してもらえたようで」

「美味しいです……ずっと食べてみたかったんですけど、こんな味だったんですね……」

エトナが、どこか感慨深そうにつぶやく。

「向こうの世界では食べられなかったんだ」

「はい……アイスクリームの屋台があったんですけど、お金がなかったから眺めることしかできませんでした。……お父さんとお母さんに買ってもらって幸せそうに食べている女の子がいて、とっても羨ましかったのを覚えて あっ、ご、ごめんなさい！ わたし今、思い出さなくていいようなことまで思い出しちゃって……！！」

「気にしなくていいよ。……今度は、もっと美味しいアイスクリーム食べさせてあげるね」

「……トーコさんと一緒なら、どんなアイスクリームだって、いちばん美味しいアイスクリームです」

「嬉しいこと言ってくれるね」
「本当のことですから」

エトナが、さっきまでより少しだけ私に体重を預けてくる。

それを心地よく感じながら、私もハーゲンダッツの蓋を開けた。

結局エトナのことは、親同士で交友がある外国人の知り合いから預かっているという説明で通すことにした。外国人だけど日本生まれの日本育ちということにすれば、ボロは出にくいはずだ。

エトナのことを伝えたくて泊まりに来ていいと此葉に連絡すると、すぐに返信が来た。『3人で遊べるようなゲームとか持っていないくっすね！ 明日が楽しみっす！』とのことだった。

そういえば、明日でエトナと会ってちょうど1週間だ。

まだ1週間。しかしその短い日々が、なんだかとても長かったように思えた。

お泊り此葉 3

「ちわーっす！ どもども、お邪魔するっす」

翌日、14時過ぎ。

約束通り、此葉は私の家にやって来た……のだが。

「此葉、あなたその荷物……登山にでも行く気？」

「およ？ 何言ってるんすか先輩。今日は先輩の家で遊ぶって決めたじゃないっすか」

呆気に取られる私に対し、此葉は能天気には笑った。

彼女はパンパンに膨らんだ登山用バッグを背負っていた。両手には紙袋を提げ、『不労所得』と印字されたシャツとハーフパンツ、そして黒ストッキングという装いだ。

「なら、その大荷物は何？」

「もちろん、お泊りアイテムっす！ ニヤンテンドウスイッチにP S4、映画鑑賞用のプロジェクトターにボードゲーム、ツイスターとか人生ゲームもあるっすよ。あ、もちろんお仕事もできるように、パソコンだってあるんすからね」

「よくもまあ、そんなに持ってこれたね」

「鍛えてるっすからね、えへん」

呆れを超えて感心するほどの充実ぶりだった。

此葉は玄関に荷物を下ろす。

「だって、せつかく先輩の知り合いの子がいるんすから、色々選べ

るほうがいいだろうなって思ったんすよ」

「なんだか気を遣わせちゃったみたいだね。ありがとう」

「にはは、その一言だけで持ってきた価値があるっすね」

八重歯を見せて、此葉が笑う。

そのタイミングで、ととととと廊下を歩いてくる音がした。

「はっ、初めまして!! エトナ・モントウオリです……あ、あの、きよ、きよっ、今日はえっと、よ、よろしくお願いしみやひゅっ……!!」

私の隣に来たエトナが、そのまま頭を下げた挨拶した。緊張しているらしく、声の上擦って若干舌が回っていない。ちなみに、モントウオリというのは偽名だ。姓がないと怪しまれる可能性があったため昨晚いくつか調べた末、エトナという名前に違和感のない国がイタリアだったため、適当なイタリア人姓を使っている。

「あ、どもどもっす。自分、塔子先輩と同じ会社でお世話になってる確氷此葉っていうっす。気軽に接してもらえとうれいっすっていか、えーっと あ、の、むちゃくちゃカワイイっすね、エトナちゃん。ぶっちゃけ、ビビり過ぎて心臓バクバクなんすけど」

エトナに向けて自己紹介していたはずが、途中から私のほうを見て目を点にしている此葉。私からすればあなたも充分可愛いと思うんだけど という言葉は呑み込み、「いい子だから、仲良くしてあげてね」と笑いかける。

「もちろんすよ! よろしくっすね、エトナちゃん!」

「ひゃ、ひゃい……! よろしくお願ひします、コノハさん……!」

「お、お……こんな可愛い子に名前呼んでもらえるのって、なん

「かいいつすね」

此葉は口元に手をやり、涎を拭う仕草をして見せる。

それから一瞬だけどこか寂しげな目をしたような……いや、気のせいかな。「うへへ」とか言い出してるし。

「……エトナにヘンなことしたら、ブツわよ？」

「大丈夫つすよ、自分そーいう線引きは得意つすから」

自信たつぷりに言う此葉。

私たちはひとまずリビングへ移動し、それぞれ腰を落ち着ける。

此葉は丸椅子に、私とエトナはソファに隣り合って座った。

「にしても、こんな可愛い子と同居してるんなら早く帰りたくなるもの納得つすね。なんでもっと早く教えてくれなかつたんすか？」

「言ったら絶対社長に弄られたり白咲にアレコレ言われて面倒しよ？」

「あゝ……なるほどつす」

「ご理解いただけたようで、此葉はウンウンと頷く。

そんな此葉に向かって、エトナが躊躇いがちに尋ねた。

「あ、あの……コノハさん。トーコさんて、普段はその……お仕事、もっと忙しいんですか？」

「ん、そうつすねえ。結構夜遅くまで残ってる日が多い感じつすかね。ここ一週間くらいは毎日別人かっつてくらい早くて会社でも話題になつてるつす」

「え、私話題になつてるの？」

「そりゃあそうつすよ。普段仕事仕事&仕事つて感じだつた先輩がささつと帰るし白咲さんの誘い断るしで、なんだどうしたつて」

「ウチの会社って勤務時間とか適当だし、退勤時間とか誰も気にしてないと思ってたんだけど……」

「そこは、先輩だからじゃないっすかね。みんな見ていないように見えるもんすよ、遅くまで残って自分達のフォローしたり慰めたりしてくれた先輩のこと。慕われてるってやつす。大なり小なり、みんな先輩のこと好きなんすよ」

「そっか、なんか、うん、くすぐったいねそれ」

私はちよつと照れ臭くなる。

単に社長の次に社員の中で年上だしリーダーという立場だからフォローや失敗したり筆が止まった子の話を聞いたりしていただけなので、びっくりだ。

「……？」

ふと、エトナが私の服の裾を引っ張っているのに気付く。

見れば彼女の表情は、少し不安げだった。

それだけで、彼女が何を言いたいのか、なんとなく分かる。

わたしが来たせいで、トーコさんの生活を変えてしまっ
て「めんなさい。」

たぶん、そんなことでも考えているのだろう。

今は此葉がいるから口にはせず、黙っているらしい。

私はしょうがないなあ、と微笑みながらぼんぼんとエトナの頭を撫でてやった。それから、エトナにも伝わるように言葉にする。

「どうしてもフォローが必要な時は遅くまで残るけど、今はエトナと一緒にいる時間が大事だから、しばらくはやることやったら帰るってスタンスになるかな。此葉たちが頑張ってくれたら私も楽でき

るし、期待してるからね」

「はいっす その代わり、頑張ったら頑張ったてごほーびくだ
さいっすよ」

「はいはい。今やってるサバイヴゲームスさんの案件終わったら、
高い焼肉連れてってあげる」

もちろん、会社の経費でだ。

私の言葉に、此葉は「ひゃっほーいっす」と両手を挙げて喜ん
だ。

その一方で、エトナは静かにそっと、私の肩に体重を預けてきた。
俯いているため表情は見えなかったが、耳の先がほんのり紅潮し
ていた。

「それじゃあ、とりあえず遊ぼっか」

私が言うと、此葉は待ってましたとばかりにリュックの中のもの
を広げ出し、エトナは「摘めるもの、準備しますね……！」と台所
へ向かった。私は此葉と一緒に、最初は何をして遊ぶか吟味する。

時間はたっぷりある。

私たちのお泊りは、まだ始まったばかりだ。

お泊り此葉 4

たっぷりとあつたはずの時間は、瞬く間に溶けていった。
私たちは此葉が持つてきてくれたゲームなどを遊び倒し、堪能し
尽くした。

ニヤンテンドースイッチの人気ゲーム『イカストウン』や『マ
サオカート』にはじまり、ルールが分かり易くお手軽な『海底探検
や』それは俺の魚だ！』で白熱し、エトナが揚げてくれたフライド
ポテト片手にプロジェクターによる本格的な映画鑑賞を経て

20時過ぎ。

私たちはリビングのテーブルで夕飯を囲んでいた。

「くうううううう、やっぱり『オーシャンズ・リム』は最高だった
つすねえ！ 巨大ロボットがぶん殴る爽快感！！ デイス・イズ・
エンターテインメントって感じで何度見ても滾るっすー！」

ホットプレートでじゅううううと焼けるカルビを引っくり返しな
がら、此葉が弾んだ声で言う。

夕飯は焼肉だ。

テーブルの脇には、タンやホルモンなどの肉以外にも海産
物や野菜が丸皿いっぱい盛られている。

此葉が泊まりに来る際はいつも、『食べたい物を焼いちまえ！！』
というフリーダム精神のもと心赴くままに食べることにしており、
今回もそんな感じだった。

……また、一緒に遊んでくださると嬉しいです……」

そう言っただけ頬を赤らめ、ふんにやりとした笑顔を浮かべた。

その言動に此葉は箸を止め、

「……先輩。自分、エトナちゃんお持ち帰りしていいですか？」

「気持ち分かるけど、ダメ。」

「なんでですか!? 先輩、それ独占禁止法違反ですよ! レッドカードです」

「こんな可愛い銀髪の子とおはようからおやすみまで一緒だなんて羨まけしからないっす」

お裾分けを所望するっす

「なにアホなこと言ってるのよ……」

こめかみに指を当てて呆れて見せる。

此葉は「ちゃんとおもてなしするっすから、一晩だけでも〜!」と粘ってくる。

どうやら、かなりエトナを気に入ったらしい。

しかしエトナは外には出られない。

ここでキツパリとNOを突き付けておくべきだと思った私は、迅速な対応に動いた。

「ダメなものはダメ。あのね、エトナはとっくに私のものなの。誰にも渡したりしないんだから」

そう言って、隣に座っているエトナの肩を右手で掴み、抱き寄せた。

やや強引だったが、ここは大袈裟すぎるくらいがいいだろうと、さらに続けて、

「エトナも、私のそばのほうがいいでしょ?」

と、微笑んでエトナのほっぺを撫でた。

するとエトナはぷしゅ〜と音が聞こえてきそうなほど真っ赤になって「ひゃ、ひゃい……」と頷く。

それから私の手にほっぺをすり寄せて「ずっと、トーコさんのそばがいいです……」ととろんとした瞳をして、つぶやいた。

「ほ、ほら、エトナもこう言ってるし」

「……なんすか、この可愛い生き物」

「なんなんだろうね。私もよく分かんないや」

私は頬が緩みそうになるのを必死に堪えて苦笑するしかなかった。あくまで演技とか建前のもと抱き寄せた私に対して、エトナは明らかに素だ。まさか此葉という人目があるにも関わらず、ここまでストレートに好意を示されるとは思ってもいなかった。

油断すれば『エトナ可愛い』という感情が漏れ出して、撫でたりほっぺをつついたりぎゅうううとしてしまいたくなくなってしまふ。

だが、それはさすがにまずい。

先輩としての威厳が壊れる。

私が理性を総動員して平静を装っている一方で此葉は、照れてト口けているエトナをじとつと見つめ、口を尖らせた。

「ちえつ。仲睦まじいっすねえ……」

そう言って彼女はタン塩を噛み千切り、いかにもやさぐれていまずという風に振舞う。

それを見て私は、ちょいちょいと手招きした。

此葉は「なんすか？」と肉を嚙下した後、訝りながら近づいてくる。

私はそんな彼女を、空いている左手で抱き寄せた。

「わひゃっ!?!? ちょちょっ、なんすか!?!?」

「いや、なんか仲間外れはよくないかなって」

「べ、別に自分は寂しくなんかないっすよお!?!」

私の胸に顔を埋めながら、真っ赤になってあたふたする此葉。
人懐っこくはあるがどことなく掴み所のない彼女がこつも狼狽しているのは新鮮だった。

「ふうん? じゃあ、この手離そうか?」

「え、あ、それは……」

拘束を緩めようとすると、此葉はおやつを目の前で取り上げられた柴犬みたいな顔になる。

「離しちゃっていい?」

「……先輩の厚意を無碍にするのも後輩としてどうかと思うっすから、このままでいいっす」

目を逸らしつつ、されるがままになる後輩。

そこに追い討ちとばかりに、エトナが身を寄せた。

「あの……コノハさんのお家には行きませんが……でもわたし、本当に今日のこと、とても感謝していますから」

そう言ってエトナは、コノハの左手を両手で包むようにして持ち上げ、私にそうしてくれたのと同じようにほっぺをすり寄せた。

「コノハさんのおかげで、とっても楽しいひと時を過ごせました。

……ありがとうございます」

「えっ、は、はいっす……！ え、えっと、あの、自分もエトナちゃんと遊べて嬉しかったっすよ……！」

慈しむように左手を優しく包まれ、此葉はますます頬を紅潮させて狼狽する。

「此葉、慌てすぎだっす」

「だ、だっすえ、綺麗な先輩と可愛すぎる女の子に幸せサンドイッチされてるんすよ！？ こんなの、落ち着いてられるほうがおかしいっす……！」

「だっすえ、エトナ。今日は此葉のおかげで存分に遊べたし、これはもっとお礼してあげるべきだよね」

「そうですね……その、わたしでよければ……もっと、さ、サンドイッチ……しますね？」

「ちよちよっ、ま、待ってくださいっす！ 心の、心の準備ができてっす……！！……！！……！！」

私とエトナは上手く連携して此葉をわちゃくちゃにしてやった。

しばらく後、リビングにはマタタビをこれでもかと堪能してへにやへにやになった猫のような此葉が転がることとなった。

お泊り此葉 5

此葉が目を覚ましたのは、20分ほど後だった。

「ハッ、自分はいったい……？ 長く生きてきた中でも屈指の幸せ空間にいたような気がするっすけど、あれは……？」

「あ、やっと起きた。おはよ」

「あ、先輩。おはようっす。……なんかめちゃくちゃお恥ずかしい姿を見せてしまったみたいっすね……」

起き上がった此葉は頬をかきながら、たははと照れ笑いする。

私は食べ終わった食器やホットプレートを片付けながら、悪戯っぽく笑って返す。

「ごめんね。ちょっと2人して調子に乗りすぎちゃった」

「お気になさらずっす。……マジ、最高だったっすから」

キメ顔で言った後、此葉はきよろりとあたりを見回した。

「ところで、エトナちゃんはどこ行ったんすか？」

「お風呂。さすがに3人で入るには狭いから、1人ずつ入るうってことにしたの」

実際のところ、それは半分嘘だった。

3人で入るのが狭いのは本当だが、傷だらけのエトナの身体を見られるのはマズいと判断し、此葉が目を覚ますより先に入浴してもらったのだ。

案の定、此葉は3人で入りたかったと残念がった。

「まあ、また機会があればその時にね」

「はーいっす。……っことはもしかして、エトナちゃんてしばらくここにいるんすか？」

「……うん、まあそんな感じ」

私は一瞬だけ言い淀んだが、すぐになんでもなかったように言った。

此葉は気にしたふうもなく「エトナちゃんが出たら、自分もすぐ風呂るっすね」とリュックから着替えなどを取り出す。

それを横目に見つつ。

私は台所で洗い物をしながら考える。

エトナは、いつまでここにいるのだろう。

今まで目を逸らし無意識に考えずにいた現実が、此葉の何気ない一言によって突然目の前に突きつけられたような気分だった。

エトナは、外には出られない。

だから出会ってからの1週間、彼女はずっとこの部屋にいた。

私が持っていた本やネット配信の映画を観たり、私が作ったゲームをしたりして過ごしていた。

今はまだいい。

異世界から来た彼女の目には、触れるものすべてが新鮮で輝いて見えたことだろう。

それは私にとっても同じだ。

エトナとの日々は毎日が新鮮で、温かく、今までの私にはなかったものだ。

けれどいつまでもこの気持ちを抱いたままでいられるのか 少
しだけ、不安になる。

エトナは14歳で、魔女で、不死で。

一方で私はもう28歳で、クリエイティブな職業といえば聞こえ
はいいがただの会社員で、そしてただの人間で。

かけ離れた私たちの暮らしには、きっといずれ齟齬そごが生まれるは
ずだ。

遅かれ早かれ、歪ゆがむはずなのだ。

その歪みが、私とエトナとで正していけるようなものならいい。

でも、そうでない場合 たとえば、仕事の都合で引越しを迫ら
れたり、両親の都合などで実家に戻らなければいけなくなったりし
た時、私はエトナをどうするのだろう。

「っ！」

一瞬。

伽藍とした部屋に独り佇み、無理やりな笑みを浮かべるエトナが
脳裡に浮かんで。

ガシャン。

気付いた時には、私は洗っていた丸皿を取り落としていた。

「うはっ、びびったっす！！ 大丈夫っすか、先輩!？」

音を聞きつけた此葉が立ち上がって訊いてくる。

「ごめんごめん、ちょっとぼーっとしてた」

「ほんとっすか？　なんか、顔色もよくない気がするっすよ？」

「ちよっと遊び疲れたのかもね。もう若くないって証拠かなあ……
あ、自分で言ってるちよっと泣きそっ」

「冗談めかして言っ」

すると此葉は腰に手を当て、妙案でも思いついたかのようににんまり笑った。

「じゃあ、今夜は夜更かしせずにしっかり寝るっすよ。もちろん、
3人一緒につす」

「……さすがにこのベッドに3人は、きつすぎない？」

「そっつすか？　自分はこのぎゅっぎゅっ感好きっすよ」

「わたしも……その、いいと思います」

22時半過ぎ。

入浴や髪の手入れなどを終えた私たち3人は寝室のシングルベッドにいた。

何故か私が真ん中で、右側に此葉、左側にエトナという位置取りだ。2人はそれぞれ私の腕を抱きしめるようにしてくっついていて、常夜灯をつけているため、2人の姿はよく見えた。

「普段泊まる時は別々に寝てたから、新鮮っすね」

確かに、此葉と同じベッドで寝るのは初めてだった。

以前は2つ敷き布団があったので片方を此葉の寢床にしていたのだが、先週エトナが転がり込んで来た日に片方の敷き布団が汚れてしまい、まだクリーニング屋から引き取っていないため、3人で同じベッドになったのである。

「ねね、どうつすか？ この両手に花なシチュエーションの寝心地は？」

小柄な身体のわりに豊かな胸をおしつけてきながら、此葉は八重歯を覗かせる。

それを見たエトナも、何を張り合っているのか密着度を上げてきた。

だが悲しいかな。

慎ましさの極地にあるエトナがいくら頑張つて身体を押し付けてきても、感触は変わらない。

「……なんていうか、暑苦しい」

私は率直な感想を口にした。

すると此葉は「んなっ!？」と変な声を上げて、

「ひでえっすよそれ!？ こ、こんな美少女2人を侍らせておいてその言い草はあんまりっす!」

「エトナが美少女なのは認めるけど、あなたは美少女じゃないですよ」

「重ねてひでえっすよお!! それはエトナちゃんに比べたら見劣りするの分かるっすけどお……!!」

むむむっと唇を引き結んで抗議の目を向けてくる此葉。

私はため息をつき、やれやれと微笑する。

「そうじゃなくて、単に少女って歳じゃないって話だから。それに此葉って美人ってよりは可愛い系だと思うんだけど」「はへ？ 自分、先輩的に見て可愛いんすか……？」

目を瞬かせ、此葉はきよとんとする。

何がそんなに意外なのか分からず、私は頷く。

「うん。可愛いなこいつってよく思ってる。愛嬌あるし素直だし、何より底抜けに明るいし。正直、あなたみたいな可愛い子に慕ってもらえて嬉しいよ」

「ちょ、ちょちょ、ちょっと待ってくださいっす！！ タンマタンマ……！」

突然慌て出す此葉。

彼女は私の腕から手を離し、その両手で自らの口元を覆った。

それから「うう~~~~」とか「あ~~~~」と呻いてから、

「……不意打ちで胸がきゅうううってなること言っの、卑怯っすよお」

と、上目遣いになって絞り出すように言った。

「いや、卑怯って。私は可愛いと思ったから可愛いって言っただけなんだけど」

「だーかーらー、そういうとこっすよお……！！ ああ、もう！！ うううー！！」

此葉は私に背を向け、ぽふぽふぽふと布団を叩き始めた。

この後輩何してるんだか……と呆れていると、ふいにクイクイツ

と左腕を引つ張られる。

「ん、どしたの？」

反射的に顔を向ける。

すると、吐息が触れ合うような距離にエトナの顔があつて。

「えっと……トーコさんは……美人さん、です……」

そう言つて彼女はほへつと笑つた。

「あ、ありがとう」

私はちよつと間の抜けた声で応じ、同時にこれが此葉の言つていた『胸がきゆうううつてなる』つてことかと理解した。たしかに、これは……ちよつと、昂ぶる。

「えいつ」

私はエトナのほうに身体を向けて、とりあえず彼女を抱きしめた。エトナは「ひゃっ」と驚きはしたものの、すぐにされるがままになつてくれる。

心を許してもらつていゝような感覚に、ますます胸がきゅつとなつた。

思わず、抱く腕に力が入る。

するとエトナが「んっ……」と吐息めいた声をこぼした。

その声が鼓膜を　そして、心の奥までも震わせる。

あ、どうしよう。これ、なんだか変なスイッチ入りそうかも。

そう思った矢先、後ろから勢いよく何かに抱きつかれた。

「じ、自分を仲間外れにしないでほしいっす!!」

寂しげに訴えてきた此葉が、ぐりぐりと鼻先を私の背中に埋めてくる。

それで私は即座に冷静になれた。

エトナを抱く腕を解き、仰向けの体勢に戻る。

エトナが名残惜しそうに「あつ……」と声を漏らしたので、左手で彼女の頭を撫でて『ごめんね』と視線を送った。それで伝わったのか、エトナは柔らかい表情で小さく頷いてくれた。

「ごめんごめん、此葉も一緒に寝ようね。ほら、手繋ぐ」

そう言って私は此葉と、次いでエトナと手を繋ぐ。

「えへへ、先輩の手えぬくぬくつすね。エトナちゃん」

「はい……あつたかいです」

すっかり元の調子に戻った此葉と、私の手を宝物でも扱うみたいに優しく握り返してくるエトナ。

2人に挟まれたまま、私はいつの間にか眠りに落ちた。

あたたかな微睡みは泡沫のように弾けた。

エトナは、何かが身体の内側からノックしてくるような感覚ともにも目を覚ます。

まだ朝ではない。

眠りに落ちてから、2、3時間が過ぎたあたりだった。

常夜灯の中、大切な人の寝顔がすぐそばにあった。その向こうには、会ってすぐ親しくなれた太陽のように明るい人の寝姿もある。

泣きたくなるくらい優しい寢床だ。

追っ手に怯えて浅い眠りを繰り返した日々も、耐え難い空腹を誤魔化すために気絶同然で眠っていた日々も、遠い昔のように思える。

「……………」

このまま塔子の胸に埋まって、再びの安寧ねむりに落ちてしまいたかった。

だが、今の自分にそれは過ぎたる望みだ。そう理解しているから、エトナは2人を起こさないよう静かにベッドを抜け出して寝室を出た。

息を、そして足音を殺して脱衣所兼洗面所へ向かう。

電気を点けた後、エトナは鏡の前でパジャマのボタンを外し、塔子に選んでもらったフリル付きのブラを脱いだ。僅かに膨らんだ胸の下、ちょうど心臓のあたりを中心にいつか見た黒々とした紋様が浮かび上がっていた。

先日より確実に大きくなっている紋様は、茨の蔦が伸びるかのよう
にエトナの肌を蹂躪し、上は首元まで、下はおへそのあたりまで
広がっている。

「ふう……」

エトナは覚悟を決めるように一度息を吐いた後、おもむろに右手
を自身の喉奥へと突っ込んだ。

「うぐっ……お、ごほっ……ヴあっ……」

極力声を抑えつつ、それでも漏れるえづきを必死にこらえて。

涙を滲ませながら、エトナは口から黒々としたものを洗面台へ吐
き出していく。

黒々としたものは、エトナの中に溜まった魔力の滓だった。

先日は溜まり過ぎた魔力滓がエトナの体内という特殊な環境内で
結合してしまい、意思を持ち襲い掛かってきたが　もうそんなへ
マはできない。

だからこうして定期的に、吐き出しているのだった。

エトナの体内から出てしまえば、魔力滓が結合することはない。
だからこうして、洗面所に流すことができる。

何度か喉奥に手をつっ込んで無理やりな嘔吐を繰り返した後、よ
うやくエトナは息を落ち着かせた。大量の水で口をゆすぎ、洗面所
を綺麗に流していく。

それから顔を上げ、エトナは改めて鏡を見る。

そして　絶望した。

すべて吐き出したはずなのに、まだ心臓を中心にこぶし大ほどの黒が残っていた。

「ふぐつ、おえっ……！」

エトナは咄嗟に、縋るような思いで再び口腔内に手を突き入れた。恐怖に顔を歪めながら、必死に唾液と胃液を吐き出していく。

だが、先ほどまでと違ってそれらは黒く染まっていなかった。

「あ……そんな……」

エトナは、その場にストンと座り込んだ。

見下ろせば、胸のあたりには変わらず黒々とした紋様が残っている。

遂に、明確な終わりが始まった。

役目を捨てて逃げ出した『まじよ魔術綴しの巫女』が辿る末路の果ての入り口に、今、自分はある。いずれこの紋様は身体すべてに浸透し、酷い結末になることだろう。

もしかしたら助かるかもしれないという現実逃避とイコールの奇跡に縋っていたけれど、そんなものはないとばかりに紋様は微かに蠢いていた。

「……もう、一緒にお風呂に入ったりできなくなっちゃいましたね」
力なくつぶやき、洗面台の縁に手をかけてよろよろと立ち上がる。
そうして何気なく目を向けた鏡に　自分の背後に立つ此葉の姿があった。

「えっ、あ、ひゃっ!?!」

エトナは慌ててパジャマで胸元を隠した。下着を着けていなかったが、そんなこと気にしている暇はない。紋様を見られていないかだけが、今のエトナにとっては重要だった。

「す、すみません……その、起こしてしまいましたか……?」

おそるおそる振り返る。

すると此葉は、どこから躊躇いがちに笑って、

「やあ……ちょっと喉が渴いたなって思ったたらベッドにエトナちゃんがいなくて気になったんすけど、そのお……なんだか、見ちゃいけないものを見ちゃったっ気分っすね」

「っ……!」

此葉の言葉に、エトナは背中に冷や汗をかくのを感じた。

唾を飲み込み此葉の次の言葉を待つ。

すると彼女は、頬をかきながらどこか微笑ましげに、

「まさかエトナちゃんが、自分のおっぱいの小ささを気にして夜な夜な確認していたとは思わなかったっす……」

「へ?」

「いや、自分だっけ覗き見するつもりはなかったんすよ? でもほら、成長期って人それぞれっすからね? それに、塔子先輩がそんなに大きいから羨ましがれるのも分かるっすけど、エトナちゃんにはエトナちゃんの良さっていうか、小さいままのほうがいいって人もいっるすから。だから、あんまり気に病んじゃダメっすよ!?!」

「あ、えっと……はい」

エトナはきよとんとした後、こくりと頷いた。

どうやら此葉の目には、自分の胸の憤ましやかさを気にする思春期の少女として映っていたらしい。

胸の黒い紋様は見られていなかったらしい。そのことに拍子抜けし、同時に安堵する。

エトナは話を合わせようと、ボタンを留めながら、

「……でも、やっぱり小さいままなのは気になります……。その、せめて此葉さんくらいは大きくなりたいです」

小柄な自分より少し背丈が高いだけのわりにしっかりと丸みを帯びている此葉の胸元を見つめる。

「にははは、ならよく食べてよく寝ることっすね。エトナちゃんだって、もう数年すればきつと背もおっぱいも大きくなれるっすよ。」

「そう、ですか……」

数年後なんて未来は、自分にはない。

エトナはイマイチ歯切れのよくない声で言い、俯いた。そして、俯いていたから反応が遅れた。

「今のはちょっと、意地悪だったっすね」

「えっ？」

気付いた時には距離を詰められ、此葉の腕に抱かれていた。

「あ、あの、此葉さん……？」

塔子よりは大きくはないが、それでも充分に大きく柔らかい胸の感触。そして、塔子とはまた違った、おひさまをたっぷり浴びた布

団のような匂い。

それらを感じながら、エトナは戸惑った。
その耳元に、此葉は囁く。

「もう、長くないんすよね。その身体、限界なんすよね？」
「えっ……………」

エトナは息を呑む。

胸の紋様を見られた？ いやでも、それだけで自分の身体が限界に近いことまで分かるはずがない。じゃあ、どうして？

「慌てなくていいっすよ。単純な話っす。自分も、世界こそ違えど、エトナちゃんと同じ側の生き物っすから」

諭すようにゆっくりと、此葉は言葉を紡ぐ。

やがて腕の拘束が弱まって密着が解かれ、見つめあう距離になる。

茫然とするエトナに対し、此葉の表情は穏やかだった。

会って間もないながらも此葉に対して抱いていた底抜けに明るい人 というイメージとは掛け離れた、慈愛に満ちた雰囲気。

「少し話をしたいんすけど、いいっすか？」
「……………はい」

まだ現実感がぐらついてはいたが、エトナは頷いた。
それに此葉は、普段通りの明るい笑みを浮かべて、

「にゅふん、じゃあしばらくエトナちゃんのこと独り占めしちゃっ
っすね」

と、八重歯を覗かせた。

独り占めだなんて言ったものの、エトナは外に出られない。

映画のように深夜の公園や歩道橋で秘密のお話　なんてことは無理で。

そして、そんなエトナの状況をどうやら此葉は既に察しているようだった。

だから彼女は何も言わずに洗面所から出てすぐの廊下に座り込んだ。

「ひとまずここが、先輩を起こさずお話できそうな場所つかね」

そう言って、手招きする。

「ささ、エトナちゃん隣にどうぞっす。あ、大丈夫っすよ。とって食べたり痛いことはしないっすから。自分、先輩が怒ったり悲しみそんなことは断固としてしない主義っすし」

「では、その……失礼します」

エトナは迷いつつも、此葉の隣に　1人分の間を空けて腰を下ろす。

此葉の正体が分からない今、それがお互いの距離感だった。

「……………」
「……………」

束の間の沈黙。

それからすぐに、エトナは申し訳なさそうに此葉との距離を詰めた。

肩がぴったりくっつくくらい、身を寄せる。

此葉が思わず吹き出した。

「くっ、くっくっ。エトナちゃんのそういうところ、心から好きですよ」

「……すみません」

肩を疎めるエトナ。

それを微笑ましげに眺めた後、此葉は切り出した。

「自分、昔いた世界だと魔王って呼ばれてたんすよね」

「魔王……？」

「あ、魔王って言っても魔物の王とか悪の権化ってワケじゃないですよ。無茶苦茶強い魔法使いだっただんで、いつの間にかそんな風と呼ばれてたって感じっす。で、まあとにかく強すぎて暇だったんすよ。だーれも寄り付かないしこっちが話しかけたら怯えるしで、どんな選択肢選んでもバッドコミュニケーション！ みたいな。で、この世界つままないなあって飽き飽きしちゃったわけっす」

「……それで、この世界に？」

エトナの問いに、此葉はにんまりして頷いた。

「そういうことっす。10年くらい前っすかね。今の確氷此葉って名前は2年前から使ってるっす。ほら、自分この姿から成長とか老いたりとかしないっすから、たまに怪しまれるんすよ。それで色々な場所を転々てーんとしてるわけっす」

「それで、今は……トーコさんと同じ会社に？」

「そっすね。エトナちゃんは『最期の日までに』っていうゲーム、

知ってるっすか？ トーコさんがシナリオを書いたゲームなんすけど」

「あ、えっと、今途中までやりました。トーコさんをお願いして、貸していただいてるんです」

「ほほう、それはそれは」

いいことを聞いたとばかりに、笑みを深める此葉。

「自分は偶然あのゲームを見つけてプレイしたんすけど、一発で惚れちゃったんすよね。で、どうやらシナリオを書いた人は今はテノルテってところで働いているらしい。となれば、会ってみたくなっちゃったんで就職したわけっす」

「すごい行動力ですね……」

「それはお互い様だと思うっすけど……でも、どうせなら可能な限り近い場所にいたいじゃないっすか。興味を持った人間をより知るためには、近づくことが大事っすから。おかげでこうしてエトナちゃんとも知り合えたわけっすし」

にやはんと頬を緩める此葉に、エトナも柔らかな笑みを返した。それから此葉は、何故エトナの正体に気付いたのかに触れる。

最初に違和感を覚えたのは、先週の日曜日。

偶然買い物帰りの塔子に出会った時だったらしい。

その際、塔子から魔力の残滓を感じたという。

世界が違ってても魔力という概念は似たような性質を帯びているものだが、そもそもこの世界に本来魔力は存在しない。なのにそれらしきものを感じたということは、塔子の周りに此葉の同類がいるという証左だった。

そして、それと同じくして塔子の生活サイクルが変わった。
以前はオーバーワーク気味だった彼女が、決まった時間に帰るようになった。まるで、誰かが家で待っているかのように。

何かあると、此葉でなくなっただけ分かる。

実際、白咲たちテノルテの社員たちも塔子に恋人でも出来たのではと噂し青褪めたり色めき立ったりしたものだ。此葉にしたって、魔力の残滓を感じていなければ白咲たちに混ざって塔子の恋人話で盛り上がっていただろう。

だが、同類の気配を認識してしまった以上は見過ごせない。

もしも悪意ある異世界人が塔子に接触し脅迫或いは籠絡でもしていようものなら、叩き潰してくれよう。そう決意して、お泊りに乗り込んできたという。

そうして、現れたのは一壊れかけた身体の少女で（エトナ）、

「いやあ、戸惑ったっすよ。だって、魔力の流れを視たらもう身体中真っ黒でぐちゃぐちゃなんすもん」

此葉の声は愉快そうだったが、しかしその目は笑ってはいなかった。

魔法や魔術　　いわゆる魔力を扱う者は、大なり小なり魔力を身体に巡らせている。

身体中を満ち巡る魔力は、魔力に通じる者が視ようとすれば簡単に視ることができ、白く輝いて可視化されるのが常だった。

その輝きの眩さや密度によって、魔力量を推し量るのだが。

しかし、エトナの身体を巡る魔力は黒かった。

いや、最早巡ってなどいなかった。

エトナの身体に詰まった魔力はあまりに膨大で、そのせいで上手く循環できずにいるらしい。そうして巡れず澱んだ魔力は濁り固まり腐り果てて……拳句に、エトナの身体を蝕んでいる。

そしてそれはもう、手遅れの域だった。

「エトナちゃんが何者なのかは、聞かないです。聞いてもどうもできないうすから。ただ、聞いておきたいこともあるんですよ」
「……なんででしょう?」

エトナは唾を飲み込んで、問いかけを待った。
此葉は一度すつと息を吸い、ふつと吐いてから言った。

「あと、どれくらい生きられるんすか?」

ああ、やっぱり と、エトナは思った。

「……あと1週間もつかどうかです」
「そのことを、塔子さんは?」
「知りません。言ってますから……」
「……最後まで、言わないつもりなんすね」
「……」

断定的な言い方に、エトナは目を逸らし俯いた。

「……言ったら、トーコさんを困らせちゃいます」
「でも、言わなかったら絶対めちゃくちや怒られるっすよ?」
「それは……ちゃんと、どうするか考えていますから」

言って、エトナは儂げに笑った。

その笑顔の意味を上手く解することができず、此葉は「そつすか」とだけ相槌を打った。

それから、少し沈黙があつて。

「……死んじやうの、怖くないっすか？」

ぼつりと咳かれた此葉の言葉に、エトナは小さく首を横に振った。

「怖くはないです。……全部受け入れて納得して、ここにいますから」

「トーコさんと二度と会えなくなってもいいんすか？」

「……それも、平気です。平気なんです」

少し間が空いたものの、エトナは言い切った。

それはある程度本心だった。

覚悟はとうの昔に、それこそ塔子と出会う前からついていた。今は死に際のロスタイムでしかない。

死ぬと分かっていたからこそ、図々しくも塔子のお世話になっているのだ。

「だから、死ぬのは怖くありません」

「……そつすか」

エトナの宣言に、此葉は寂しそうに言った。

それから彼女はゆっくりと立ち上がり、エトナに背を向けたまま訊く。

「エトナちゃんが死んじやうのは避けられないとして……でも、この家から出られないまま死ぬのって、イヤじゃないっすか？」

「え？」

「一度くらいここから出て遊んでみたくないつすか？ もつと言えば、塔子先輩と2人つきりでデートとか、したくないつすか？」
『マレスフィア 鉄槌の焰』を気にせず、自由に」

「デート……ですか？」

此葉の背中を見上げ、エトナは考える。

デートだなんてこと、思いもしなかった。

たしか、『最後の日までに』に登場するユキとアヤが手を繋いで街を歩いたり、ソフトクリームを食べたり水族館に行ったり猫カフェで猫と戯れたり、そういうのをデートと呼んでいた。

ああいうことを塔子としてみたいかと問われれば、答えは決まっている。

「……それは、したいです。してみたいです」

そして、それが叶わぬことも分かっている。

だからエトナは「そんなの、したいに決まっています……」と苦しそうに絞り出した。

すると頭上から、声が降ってくる。

「じゃあもし、外に出られるとしたら？」

「え？」

思わず顔を上げる。

すると、いつの間にか目の前に此葉の笑顔があった。

「言っただつすよね。自分、滅茶苦茶強い魔法使いみたいなやつだつ

たつて。だから、そうっすね……半日……いや、10時間くらいだつたら、エトナちゃんを『鉄槌の焰』から守って外に出られるようにしてあげられるっすよ」「
「……………ほんと、ですか？」

茫然とするエトナ。

対して此葉は、すべてを包み込むような優しい笑みを返した。

「こんなことで嘘なんてつかないっすよ。どうっすか？ デートしたくないっすか？」

「……………っ！」

改めて問われ、エトナは黒く染まってしまった胸のあたりに両手を当てた。

「いいんですか、そんな……………でも、何かの魔法ですよね……………？」

「まあ、そうっすね。エトナちゃんを守る結果みたいなのを作ってあげるんすけど」

「それって、此葉さんの魔力をたくさん使わせてしまっくんじゃ……………」

「……………エトナちゃんはほんと、優しいっすね」

此葉はふつと脱力する。

この世界において、魔力は貴重だ。

元いた世界ならば魔力を宿した食べ物や場所などからいくらでも摂取・補給ができた。

だがこの世界では睡眠に伴って体内で生成される魔力だけが唯一の補給手段だ。だから、余程のことがない限り魔法なんて使うものではない。

その貴重な魔力を自分のために使ってしまうなんて　と、エトナは不安がっているのだ。

それが、此葉はおかしかった。
おかしくて、悲しかった。

もう死ぬ間際にしてもまだ、この幼い女の子はわがままになれない。

それが悲しくて、そして同時に、彼女をここまで追い込んだ顔も知らぬ誰かたちを捻り殺してやりたくなかった。エトナの代わりにお前達が死に晒せと、叫びたい気分だった。

「なあに遠慮してるんすか。いいんすよ、そんなこと。ほら、自分今まで魔力なんてロクに使ってなかったっすから溜まりに溜まってるわけっすし。どうってことないっす」

そう言っただけで此葉は廊下に膝立ちになって、エトナを抱きしめた。

「きつと、これも何かの縁なんすよ。だから、自分の魔力使ってほしいっす。……きつと、塔子先輩もエトナちゃんとデートしたいはずっすから。ね？　それでももし後ろめたいようなら、デートの思出を自分に話してほしいっす。楽しかったこと嬉しかったこと、ドキドキしたこと、たくさん。……自分、そういうの聞くの大好きっすから」

「……………はい」

エトナも此葉の背中に手を回し、ぎゅっと抱きしめ返す。

「……………なんてお礼を言えばいいのか、分かりません」

「いってことっす。少しでも長く生きてくださいっすよ」

ぼつりと言い、此葉はエトナの頭を撫でた。

それにエトナはしばしの間を置いた後、涙声で「はい……」と頷いた。

それから此葉はエトナに魔法を掛けてやった。

10時間　それは魔法の効果時間というよりも、エトナの身体
の限界時間だ。

此葉の魔法ならもつと長く外に出してやることもできるのだが、
壊れかけたエトナの身体では、10時間以上魔法に耐えられる保証
がなかった。

魔法を掛け終えた此葉は、エトナに言った。

「この魔法は外に出た瞬間から発動するっすから、デートの日まで
気をつけるっすよ？　発動したら最後、きっかり10時間で切れる
っすから、後戻りも待ったも無しっす」

念を押した後、此葉はさらについでとばかりにこう付け足
した。

「もし時間があればっすけど、先輩のゲームは是非隠しエンドまで
見てほしいっす。きっとそれは、エトナちゃんにとって大切なモノ
になるはずっすから」

「分かりました」

もとより最後までプレイすると決めていたエトナは、どうして此
葉がそんなことを言うのかイマイチ分からなかったが、しっかりと
頷いた。

そうして2人は、塔子が眠るベッドに潜り込んだ。

スランプ

結局此葉は、日曜日の昼過ぎまで私の家で遊んで帰った。

エトナは想像以上に此葉に懐いてくれたようで見ているこちらが微笑ましくなるくらい打ち解けていた。

私以外の誰かと関わりを持つことは、エトナにとってきつと必要だ。

此葉のおかげでその重要性を実感できた。……うん、此葉にはいずれ美味しいお寿司をご馳走してあげよう。もちろんその時はこの家で、エトナも一緒に。

週末が明け、月曜日。

「コノハさんによるしくお伝えください……！」と力を込めて言うってくるエトナに「うんうん、了解」と笑って手を振り、私は出社した。

オフィスに着くと既に此葉がいて、朝食であろうパンをもっしやりしていた。

脇に置かれた袋を見るに、駅前のベーカリーで買ってきたらしい。私は彼女に声を掛け、先日のお礼とエトナのことを伝える。

すると此葉はコロッケパンを一口で豪快に口に収めても「もっしつくんした後、

「にやはっ、喜んでもらえて何よりっす。是非また呼んでくれると嬉しいっすね。本当に、いつでも呼んでくれていいっすから。……自分もまた、エトナちゃんと遊びたいっすし」

と、笑顔で言ってくれた。

最後の一言だけ彼女にしては妙に穏やかな声音だった。なんだろう、母性にでも目覚めてしまったのだろうか。

まあ、エトナは小さくて可愛いのでそういうキモチが湧くのも致し方ないかもしれないけれど。

そうして業務に取り掛かり、昼過ぎ。

さて昼食しようかと伸びをしたところで、背後から声がした。

「やあ、塔ちゃん。お昼一緒にどうだい？」

振り返ると、三峰雪花しちやうけが立っていた。

いつも通りどこか浮世離れた雰囲気のある彼女は、トレードマークの赤縁メガネの位置を手で弄りつつ艶然と微笑んでいる。

「? いいですけど、どうしてまた」

「いいからいいから、ね？」

私が怪訝そうに返すと、社長は口元に手を当てて声を潜めつつウインクした。

色気のある仕草だったが、私は嫌な予感を膨らませる。

社長は普段誰かを昼食に誘ったりしない。

彼女はいつも手製の弁当を社長用オフィスで黙々と食べつつ仕事を進めるのが常だった。

それが私を誘ったということは、何かある証左に他ならない。

「そんなに警戒しないでくれたまえ。ちょっと相談したいことがあるだけさ」

苦笑しつつ、社長は一瞬だけ視線を私から外す。

私は立ち上がって、視線の先をちらつと確かめた。

するとPCの画面を前にして難しい顔をしている白咲の横顔が見える。

社長へ視線を戻すと、彼女は無言で頷く。

どうやら白咲について話があるらしい。

「詳しいことは、外で話そう。今日は美味しい丼物が食べたい気分なんだ。ご馳走するよ」

「いいですね、喜んで」

私たちは連れ立ってオフィスを後にした。

その間、白咲は身じろぎひとつせず画面と睨めっこしていた。

「スランプ……ですか？」

「まだそこまで深刻かは断定できない。ただ、ここ最近の白咲の成果物が明らかにおかしいのは確かなんだ」

そう言って、社長は特上海鮮丼（大盛り）の器を持ち上げて豪快にかきこんだ。

ウニやいくら、ほぐしたカニの身などが一気に彼女の口へと雪崩

込む。

艶のある美人の清々しい食べっぷりは中々絵になるなと思いつつ、私は特上天井（ご飯少なめ）の茄子のてんぷらを齧った。サクっとした衣とあまじょっぱいつゆ、そして茄子の甘みが口いっぱい広がる。

会社から7分ほどの場所にある『井屋 しぐれ』は昼時とあってほぼ満席だった。

運よく2人掛けのテーブル席に案内された私たちは、賑わう店内で他の客同様にこの店自慢の丼を堪能している。

「おかしいって、どんなふうに？」

「簡単に言ってしまうえば、王道ないしユーザーが求める最適解が書けていない。ひまりんのライターとしての長所は、ユーザーが一番求めている展開を高い水準で書き切るところなんだが……ここ数日の彼女は、どうにも調子が悪いみたいだね」

「社長が私に話を持ち掛けるってことは、相当なんですな」

「ああ。昨日なんて、誰も報われないバッドエンドをクライアメントに提出しようとしていた。さすがに私が止めたよ。まだ締め切りまで期日もあるから再考するように言ったんだが、あの様子だと行き詰っているらしい。……まあ、我々の仕事が行き詰るのは道端で小石を見つけると同じようなものだけだね」

柔らかく笑って、冷たい茶を啜る社長。

対して私は爽やかな苦味と甘みのいんげん豆のてんぷらを食みながら考える。

白咲の長所は王道を書き切れること　たとえば、ソーシャルゲームのイベントシナリオでは登場人物すべてに上手く役割を振り分け たうえで悪役にさえ多大な魅力を持たせ、誰も彼もをハッピーエ

ンドに導く。そういう才能が、彼女にはあった。

白咲が担当したイベントシナリオに登場したキャラクターは必ずといっていいほど人気が出て、その後のガチャの売上げが急増する……と、以前親しいクライアントの担当者が言っていた。

それがまさか、誰も報われないバッドエンドを提出するだなんて。

「……クライアントの指示ではないんですよね？」

「月末に実装されるイベントシナリオの案件だったんだが、ざっくり言うと水着キャラたちがきゃっきゃうふふする明るいシナリオという発注だった。バッドエンドとは程遠いな」

「それはまた……」

擁護の余地もなかった。

スランプか、もしくはそれ以上の何かと断定していいだろう。

「しかし意外だな。てっきり私は、塔ちゃんなら白咲の異常について既に把握していると思っていたのだが。最近の白咲の成果物、確認していなかったのかい？ 共有ファイルに入っていたはずだが」「すみません。ちょっと最近、忙しくて」

私は曖昧に笑って応じた。

社長の言うとおり、私は白咲をはじめテノルテ社員がクライアントに提出した成果物を逐一チェックしていた。業務上必ず必要というわけではないが、一緒に仕事をする仲間の得手不得手や調子の把握、そして何より自分の勉強になると思っていたからだ。

日課と呼べるくらいに私の中で当たり前になっていた作業だったのだが、エトナと暮らし始めてからは時間の関係で手をつけていなかった。

社長も、私が日課にしていたことを知っていたからこそ純粹に疑

問に思ったのだろつ。

「そうか。忙しいというのは、仕事が溜まり過ぎているからかい？
それとも、日々が充実しているからこそかい？」

「充実し過ぎているからですね。正直、身体が二つ欲しいくらいです」

私が冗談めかして言うと、社長はくくつと可笑しそうに笑ってくれた。

「なら重畳。忙しいなら手伝おうかとも思ったが、余計なお世話だったかな。でも、人手不足ならいつでも言ってくれたまえ。社員の心身に気を配るのは社長の役目だからね」

「頼りにしてます。……だからこそ、白咲が心配なんですネ」

「そういうことさ。あの子は塔ちゃんに並々ならぬ思い入れがあるようだし。もし彼女に何かあったのなら、それを救えるのは私ではなくキミだ。だからこそ、今こうして話している」

「買い被り過ぎでは？」

井の端っこに盛り付けられたおしんこを齧りつつ言う。

社長は「ただの事実さ」と言って、肉厚のホタテを口にする。

「何にせよ、ひまりんを見てやってくれ。もし作業が滞りそうなら、すぐ私に言うように。キミたちの請け負っている仕事はすべて把握しているから、すぐにでも執筆のヘルプには入れるしチームの取りまとめも、どうにかして見せよう」

「どうにかしてより私たち以上にチーム纏めていいもの納品しちやえますよね、社長なら」

「ぶふつ、それこそ買い被りってものさ」

不敵に笑った後、社長は茶を一息に飲み干した。
いつの間にか、彼女の丼は米粒ひとつ残っていない。

「え、食べるのはやっ」

「何事も迅速にというやつさ。ああ、慌てなくていい。私も　す
みません。追加でミニ天道1つ」

ちょうど横を通りがかった店員に、社長はなんでもないように注
文した。

特上海鮮丼（大盛り）を平らげてまだ食べるのかと唾然として見
つめる私に、彼女はちよつとだけ照れ気味に笑って、

「塔ちゃんを見ていたら我慢できなくなっただ。別にいいだろ
う、栄養はきつとこつちに回る」

そう言って、洋服の布地を押し上げるたわやかな胸に手を当てる。

「太って社長の威厳がなくなっても知りませんからね」

私はエビを啜えながら、白咲について考えを巡らせた。

お誘い

白咲への具体的な対応に目処をつけつつ、私は18時半過ぎに帰宅した。

ドアを開けて「ただいま」と声を掛けると、リビングのほうから「おかえりなさいっ！」と弾んだ声が飛んできて、すぐにとてとてとエトナがやって来る。

「おかえりなさいです、トーコさん」

玄関前に立つて、改めて笑顔で言い直すエトナ。

フリルをあしらった淡い桜色のエプロンがよく似合っていた。

可愛いな、と思いつつ私は鞆を置いて自然な動作でエトナを抱き寄せる。

「はあ、癒される……」

「えへへ……」

私の腕の中にすっぽり収まったエトナは、嬉しそうな声とともに抱きしめ返してくれる。あたたかでいい匂いのする彼女を感じていると、1日の疲れが一気にとろけていくようだった。

「今日も1日お疲れ様でした」

顔を上げたエトナがほわんとした笑顔で言ってくれる。

私は彼女の柔らかかそうなほっぺに自分の頬をくっつけて「エトナも、お留守番ありがとう」と囁く。するとエトナは、

「はい」

と短く、しかし嬉しさや親愛が滲んだ返事をしてくれた。

その後私たちは1分ほど無言で互いを感じ合い、どちらともなく示し合わせたかのように離れる。

「今日のお夕飯はハッシュドビーフのオムライスですから、手を洗ったり着替えたりしてくださいね。すぐに用意できますので」

エプロンの裾をひらりと翻しながらリビングへ戻っていくエトナ。その後ろ姿を眺めてなんだか新婚さんみたいだな……とぼんやり思う。さりげなく私の鞆まで持って行ってくれてるし。尽くしてくれるお嫁さんみたいいな……いや、結婚したことないからイメージではないんだけど。

「……こういうのが続くのは、悪くないかな」

微笑とともにつぶやき、私は洗面所へ向かった。

夕飯を堪能した後、私たちは此葉が貸してくれたニャンテンドースイッチで遊び、頃合いを見て入浴を済ませた。

先に私が入り、今はエトナが入っている。

昨日から入浴は別々になった。

というのも、別々に入浴したいとエトナから申し出があったのだ。申し訳なさそうに「お世話になりっぱなしな気がして」だとか「なんだか急に恥ずかしくなって……」とあれこれ理由をつけてはいたが、それがなんとなく嘘なことは分かった。此葉あたりには何か吹き込まれたのかもしれないが、真相は分からない。

ただ結局私は、詮索せずにエトナの申し出を受け入れた。

彼女が無意味に何かを申し出てくるわけがない以上、そこには理由がある。

なら、それでいいと思った。

もちろん一緒にお風呂に入れなくなったことは寂しかったけれど、それは別の時間……たとえば寝るときにでも埋め合わせしよう。

そんな風に思いながらベッドに座って待っていると、パジャマ姿のエトナが入ってきた。入浴を終えたばかりなので髪が湿り、頬がぼかぼかと赤らんでいる。

私は手招きしてドライヤーを手にする。

「おいで、エトナ。乾かしてあげる」

エトナは「お願いします」と頷いて、手近な椅子を持ってきて私の前に背を向けて座った。

濡れて光沢のあるエトナの銀髪を手に載せて、ドライヤーで乾かしていく。時折り櫛を通しつつ、彼女の綺麗な髪がこれからもそうであればいいなと思いながら整える。

ドライヤーの音のせいもあったけれど、乾かしている間私たちは無言だった。

けれどそれは話すことがないというわけではなく、心地のいい無言だった。

やがて、ドライヤーのスイッチを切る。

「終わったよ」

そう言うと、エトナが振り返って「ありがとうございます」と笑

顔を見せてくれる。

うん、大丈夫だ。

このやりとりは、昨日も一昨日もそれより前から変わっていない。

私はそのことに、自分でも驚くほど安堵していた。

髪を整え、歯を磨いて……いよいよ寝ようという段階で、

「あの、トーコさんで今度のお休みはいつですか？」

「次は木曜日がお休みだけど、どうして？」

ベッドの上でぺたんんと座ったエトナに答えながら、私もベッドの端に座る。

「もし、お暇だったでいいんですけど……」

エトナはそう前置きした後、明らかに緊張した様子で切り出した。

「木曜日……一緒に、どこかへお出掛けできませんか……？」

「え、お出掛け？」

耳を疑う。

エトナは外には出られないはずだ。だが、彼女の表情は真剣そのものだった。

「その……ようやく、少し魔力が回復したんです。それで、短時間

ですけど防護魔術が使えるので……だから、少しの間だけなら
って」

「そうなんだ。えっと、短時間でいうのは具体的にはどのくらい？」

「じゅう……いえ、7時間くらいです」

「7時間か。それなら、充分遊びにいけるね」

私は心底嬉しくなって、笑った。

「魔力が回復してきたってことは、いずれはもっと長く外に出られ
たりもするの？」

「えっと……それは……はい、たぶん。いえ、きっとできます。こ
れからのくらい魔力が回復するか分からないんですけど、そう遠
くないうちには」

エトナは少し戸惑うような素振りを見せたが、すぐに肯定してく
れた。

それに私は思わず涙ぐむ。

「えっ、トーコさん……？」

「あはは、ごめんね」

目尻を拭いながら、私は照れ笑いする。

「そのさ、不安だったんだ。エトナがこの家からずっと出られなか
ったらどうしようって。せっかく大変な思いをしてこんな場所まで
逃げてきたはずなのに、酷い仕打ちだなんて……だから、安心した
らっい」

「トーコさん……」

呟いたエトナが近寄ってきて、そのまま抱きついてきた。

普段よりいくぶんか強い力できゅっつと、抱きしめられる。

「ごめんなさい……」

「エトナ？」

謝る必要なんて何一つないはずなのに、エトナは謝罪を口にした。

「どうして謝るの？」

「それは……その、心配掛けてしまったから……」

「そっか。そんなの気にしなくていいのに。それよりも外に遊びに行けることを喜ぼうよ。ね？ 私も楽しみだし」

「はい……でも、やっぱり……ごめんなさい」

気を遣い過ぎるのは彼女の美点であり欠点だなあ、とぼんやり思いつつ私はエトナの頭をぽんぽんと撫でてやる。

それから私たちは抱き合ったままベッドに倒れこんだ。

互いの顔を間近で見ながら言葉を交わす。

「お出掛け、どこか行きたい場所とかある？」

「……まだ決めてません。……でも」

「でも？」

「……トーコさんが作ったゲームの、アヤちゃんとユキちゃんみたいなお出掛けがしたいです」

そう言われて、私は『最期の日までに』のシナリオを思い出してみ。

たしか、病院を抜け出した2人が駅前の繁華街でウィンドウショッピングを楽しんだり水族館に行ったり、クレープを食べたりするシーンだ。

そこでアヤはふと言っただ。

余命いくばくもないユキに向かって、「これって、デートだよね」と。

だから私もそれに倣って、

「じゃあ、デートだね。私とエトナで、木曜日はデートだ」

「デート……？ で、デートになるんですか!？」

「だってそうでしょう。アヤとユキはそうだったじゃない」

急に慌てだすエトナに、私はさらりと行ってやる。

「で、デート……」

呟くエトナの心音が早くなるのが、密着しているからよく分かった。

少し体温があがったようにも思う。

照れ照れするエトナの顔を眺めていると、彼女は上目遣いで私に言った。

「あの……トーコさんは、わたしとデートしたいですか……?」

「当たり前じゃない」

その表情は卑怯だと思いつつ、私はエトナのおでこに自分のおでこをくっつける。

「可愛いあなたとお出掛けデートできるの、嬉しいよ」

「トーコさん……」

エトナはほわっとした笑顔になって目を閉じた後、「わたしも嬉しいです……」と、か細い声で言ってくれた。

しばらくぎゅっと抱き合っていると、ふとエトナが「ふぁう……」
と小さな欠伸をした。それを合図に私たちは一度身体を離して枕の
ある場所まで移動して掛け布団をかぶり、改めて身体をくつつける。

「おやすみ、エトナ」

「はい、おやすみです。トーコさん」

どちらともなく足を絡め、私たちは溶けるように眠りについた。

沈まれ恋心、と魔女は願った

「外出……じゃなくて、えっと、で、デートの行き先ですけど……もしご迷惑でなければトーコさんに決めてほしいです」

火曜日、出勤前の朝食時。

半熟の目玉焼きやチーズが載ったピザトーストを齧っていると、エトナはそう言った。

遠出ではなく近場　私が普段使っている駅周辺のスポットを巡りたいというのが彼女の希望だった。

初めての外出が『その辺をぶらつく』なのは言葉にすれば地味かもしれないが、私たちらしいとも思えた。気負わず飾らず、自然な形で過ごすのが性に合う。

「でも、行き先まで私が決めちゃっていいの？　この辺だってネットで検索すればオススメスポットがたくさん出てくるし、なんなら帰りにガイド誌とか買ってくるよ？」

「いえ……トーコさんにお任せしたいんです。……そのダメだったら、わたしも考えます。でも、その……」

冷たいココアが入ったマグカップを両手で抱えるように持ったエトナが、上目遣いでこちらを伺ってくる。

その微かに不安げな表情を見てしまえば、まさかNOとは言えない。

「エトナがそれでいいなら、私は構わないよ。デートプランなんてシナリオの仕事でしか考えたことないから保証できないけど、恨ま

ないでね」

「恨むなんてそんな……！　ありがとうございます」

ふわりと笑って、エトナはココアに口をつけた。

「それじゃあ、私はそろそろ行くね」

残りのピザトーストを頬張り、牛乳でぐちゃぐちゃにして立ち上がる。鞆を手にしてリビングを出て行くことになると、

「あっ、待ってください」

エトナも立ち上がって、私のほうへ歩いてくる。

いつも通り玄関まで見送りに来てくれるらしい　そう思ったのだが、その手にはティッシュが握られていた。

何をするんだろうかと思っていると、エトナはとととと、私の前に回り込んできた。

そうして背伸びをし、私の口元を拭ってくれる。

「牛乳でお髭ができてました。……はい、これでいつもの綺麗なト
ー」
「コさんです」

そう言ってふんにやり笑うエトナ。

私は「ごめん、ありがとう」とちょっと気恥ずかしさを覚えながら言った後、彼女を抱きしめた。柔らかな銀髪の頭頂部に鼻を埋め、彼女を感じる。

「あー、なんだかもう今日は会社行かずに家で仕事しようかな……」

エトナを膝に載せて仕事したいなあ……なんてふわふわ思っていると、エトナが優しい声音で「いけませんよ」と諭してきた。

ぽやんと柔らかな表情をして見上げてきた彼女は、

「会社にはトーコさんのことを待ってる人がいるはずですよ。……本当はわたしもこのままずっと、ぎゅうっでもらいたいですけど……でも、独り占めはよくないですから」

そう言って、名残惜しそうにしつつ私から身体を離れた。

かと思うと、「で、でも、やっぱりもうちょっと……」と咳いて改めてぎゅっ抱きついてくる。

「えっと、エトナ……?」

「ご、ごめんなさい……いつてらっしゃいって言うのが、まだちょっと寂しくて……」

「そっか……いいよ。まだ少し時間あるから」

エトナの後頭部を優しく撫でた後、やわらかいほっぺたをさすり、そのまま首筋のほうへと指を這わせる。

エトナはくすぐったそうに「んっ……」と吐息をこぼしながら心地良さそうに目を細めた。子猫のような愛らしい反応が可愛くて、思わず強く抱きしめる。

「なるべく早く帰ってくるから、待っててね」

「はい……」

耳元で囁くと、エトナは甘えるような声で返事をした。それから今度こそ、身体を離す。

パジャマ姿のままのエトナは、ほんのり頬を染めてどこか満たされたような顔をしていた。

私は「いつてきます」と言い、エトナは「いつてらっしゃい」と返して。

そうして今日が動き出す。

塔子が出て行った後、エトナはぼーっとした表情のままふらふらとリビングへ戻った。

普段なら食べ終えた食器を台所へ持って行って洗い物をするのだが、今日はソファに倒れこむようにして身体を預ける。

「はあ……」

熱っぽい吐息をこぼし、エトナはきゅっと目を瞑った。

もじもじと太腿をすり合わせ、持て余す感情をどうにか落ち着かせようと身をよじる。

恋心が溢れてしまいそうだった。

いつからかは、分からない。

でも、いつからか自分は仲谷塔子に恋をしていた。

最初は、感謝と恩返しをしたい気持ちでいっぱいだった。

自分を優しく受け入れてくれた人に報いたくて、必死だった。嫌われたくなくて、捨てられたくなくて一生懸命だった。

でも、塔子があまりにも優しくかったから。

エトナはつい欲張って、恋をしてしまっていた。
そんな資格も時間もなくて……。

「あつい……」

ドクドクと脈打つ心臓に手を当てる。

生涯の大半を軟禁と逃亡の日々に費やしてきたエトナは、身体を
支配する悶えるような熱さの沈め方を知らない。

とろんとした瞳をして、もどかしさにただただ耐える。

やがて、

「……キス」

エトナはぼんやりとした思考の中、塔子に借りた『最期の日まで』
に『でアヤとユキがくちづけを交わしていたシーンを思い出した。
互いの情愛を確かめるように何度も唇を重ねて満たされていく彼
女たちの描写は、エトナの心に深く刻まれていた。

「トーコさんは……してくれ……?」

自身の唇に触れながら、エトナは塔子とのくちづけを想像した。
自分より背が高い塔子が少し屈んで、覆いかぶさるようにして唇
を、

そこまで想像した途端、エトナの瞳からぼろぼろと涙がこぼれた。

「バカだ……叶ったとしても意味なんてないのに……」

もうすぐぜんぶぜんぶ消えて無くなってしまおうというのに、愚か

にもほどがある。

自分は異端者で、塔子にとっては本来現れるはずのなかった特異点のようなものだ。いまでさえ塔子の日々を侵食しているというのに、ましてや特別になりたいなんて……度し難い。

「わたしは魔女……トーコさんとは、生きている世界が違ういきもの……」

言い聞かせるように呟いて、エトナは立ち上がった。

そうして食器を片付けないまま、救いを求めるように寝室へ向かう。

ノートPCを開いて『最期の日までに』を起動する。

シナリオ回収率92%。

あと少し。

エトナは何もかもから逃避するように、テキストに没頭した。

暗雲と罰

「白咲、今日は休みか」

出社した私は、オフィスのホワイトボードの片隅を見て呟いた。社員の所在を見える化するために設置されたミニボード（丸文字で『きょうのよてい』と書かれている）には、『白咲：休暇』と示されている。

他もざっと見ると『社長：しゃちよーしつ』『碓氷：みんなの心の中つす』と各々の字で書かれていた。白咲については、誰かが事務的に書いたのだろう。

「白咲の顔、見ておきたかったんだけどな」

先日社長から白咲のスランプを聞かされていたというのもあるが、そうでなくとも彼女のことを気掛かりだった。

休暇ということは、気分転換でもしているのだろうか。

LINEや電話で白咲の様子を伺うという手もあるにはあるのだが、それがあまり有効ではないことを私は知っていた。

白咲は表情に出やすい反面、顔を突き合わせていない場では本音を隠すのが異様に上手いのだ。

声や文字では真意を掴めない　だから、何かを話すなら直接がいい。

「先輩、おはよーつす」

「おはよ、此葉」

自分のデスクへ向かう途中、椅子に座ってクルクル回っていた此

葉と挨拶を交わす。

「どしたんすか？ 眉間に皺なんか寄せちゃって。美人が台無しっすよ」

「よくそんな齒の浮くようなセリフをさらっと言えるね。 白咲お休みなんだ、って思ってただけだよ」

「あゝ、なるほどっす。やっぱり心配っすよね、今まで見たこともないくらいに思い悩んでるみたいっすし」
「そうだね……」

同意し、はたと気づく。

白咲は誰かに弱みや苦しんでいるところを見せるのを極端に嫌う子だったはずだ。常に自信たっぷりな振舞うのが彼女らしさであったはずなのに、それがどうだ？ 昨日は人の目のあるオフィスで行き詰った顔をしていた。

……周りを見る余裕すら、なくなっている？

「……だとしたら、思った以上に深刻かもしれない」

「およ？ どうかしたっすか？」

「いや、こつちの話。私、今日はちょっとバタバタするかもしれないけど、此葉はちゃんと今日のノルマこなしておいてね」

「よく分かんないっすけど、了解っす」

此葉はピシッと茶目っ気たっぷりな敬礼をする。

私は自分の椅子に座ってLINEで白咲に『時間がある時に返信ちょうだい』とだけ打って送信した。下手に気遣うと彼女はそっぽを向いて既読スルーすることもあるため、文面は敢えて淡泊に。

それから私は社内PCを起動してテノルテ共有フォルダから、こ

こ最近の白咲の成果物をドロップボックスとUSBメモリにコピー。次いで白咲のチームで作業を進めている社員に声を掛け、昼食の約束を取り付けた。

更に、昔から仲の良いフリーランスの女性ライターさんに電話を入れ、私が抱えていたキャラクターシナリオをいくつか請け負ってもらった。急な依頼だったため報酬額を上乗せすると申し出たのだが、それより一緒にご飯食べたいとのことだったので、その方向で話を進めた。フリーランスだと人に会う機会が減るらしく、寂しいのだとか。

一通り手回しを終え、LINEを確認する。

白咲からの返事はまだなく、未読状態のままだった。

「……………不味いかもしれない」

18時過ぎ、私は駅前で買ったシュークリームの箱を片手に難しい顔をしながら家路を進んでいた。

白咲の現状は、私の想像以上に悪かった。

そもそも、請け負っている仕事が多過ぎる。

白咲のチームで補佐をしている三橋ちゃん（24歳、地味なメガネが似合う素朴な子）に話を聞いたところ、社内共有フォルダにアップロードしている以外にもいくつも個人でライティング業務を請けているうえに、夏の祭典 コミック・フェスティバルで同人ゲームを出すべく1人でシナリオを書き進めているのだとか。

尋常ではない仕事量だった。

食事や睡眠などを除けば、ほぼすべてをアウトプットに充ててい

ると言っても過言ではない。何が彼女をそこまで駆り立てるのかは分からないが、これまで彼女がクオリティの高い成果物を上げていたのは圧倒的な執筆量故なのだろう。

だが、常に全力疾走できる人間はまずいない。

そして現に今、白咲はあらぬ方向へ全力疾走しはじめている。

昨日社長に相談された案件は氷山の一角に過ぎず、やはりここ最近の白咲の成果物はどれも彼女らしくないものばかりだった。さすがに、水着イベントのシナリオ依頼にバッドエンドを書き上げるというような極端なミスマッチこそなかったが……。

「明日話して、解決できればいいけど」

スマホでLINEを確認するが、結局白咲へ送ったメッセージに既読はつかなかった。

とにかく明日だ　　そう思いながら私はマンションに辿り着いて玄関ドアを開ける。

「ただいま」

言つて靴を脱ぎ、玄関に上がる。

だが、いつもなら聞こえる声も足音もしない。

「あれ？ エトナ……？？」

彼女が出迎えてくれるのがどこか当たり前に感じていた私は、少し心細くなりながらリビングへ向かう。だが、そこにもエトナの姿はない。

「……………」

得体の知れない喉の渴きを感じながら、私は鞆やシュークリームの箱を置くのも忘れて寝室のドアを開ける。

するとそこには、私が作業用に使っている机にノートPCを広げているエトナの後姿があった。見慣れた銀髪の手にはヘッドフォンが乗っかっている。

私は安堵の吐息をこぼした。

そして同時に。自分が『エトナが忽然と消えてしまった』という可能性を無意識に考えてしまっていたことに気づき、言葉にできない息苦しさを覚える。

いなくなるなんて、そんなことあるはずない。

落ち着くために心の中でだけ呟き、荷物を床に置く。

それからこっそりエトナに忍び寄って背後からヘッドフォンを外し、抱きついた。

「ただいま、エトナ！」

「はひゃっ！？ と、トーコさん！？」

予想通り、エトナは驚きの声を上げた。

しかし彼女の声があった以上に湿り、瞳が涙で濡れているのまでは予想していなかった。

「え、エトナどうしたの？ 泣いてたの？」

「えっとこれはその、トーコさんのゲームが……………！」

そう言いながら、エトナは慌てて目元をくしくし指でこする。見ればノートPCには『最期の日までに』のメイン画面が表示されていた。画面下方に表示されているシナリオ回収率は98%。

「もう、ここまでプレイしてくれたんだ」

「その、先が気になってしまつてつい……さつきトゥルーエンド2をクリアして、泣いちゃいました」

まだ涙声のまま、照れ笑いするエトナ。

シナリオを書いた張本人としては、面と向かって感想を言われるとむず痒い。

98%ということは、バッド・グッド・トゥルーのシナリオをすべて開放したということだ。残る1つのシナリオは、私が無理を通して捻じ込んでもらったもののだが……、

「どうしたの、エトナ？」

涙を拭い終えたエトナがまじまじと私を見つめてくる。

彼女は首をこてんと可愛らしく傾げて言った。

「えっと……、どうしてトーコさんがここにいるのかなって。あ、いえ、ここはトーコさんのおうちなので、何もおかしくないんですけど、お仕事は……？」

「……？ 仕事が終わったから帰ってきたんだけど」

「えっ……？」

きょとんとして言う私に対し、エトナはさつと青褪めた。

慌ててノートPCの右端の時計を確認した彼女は「わっ、えっ？ はわっ！？」と可愛らしい悲鳴をあげた後、私の胸に飛び込んできた。

「ごごご、ごめんなさいトーコさん！！ わたし、時間を忘れてゲームに没頭してたみたいで、あ、あのあの、晩御飯の準備もお掃除も、それにお出迎えもできてなくて、あ、あの、ご、ごめんなさい！！！！！」

涙目になりながらエトナが必死に謝ってくる。

別に責めるつもりは毛頭ないので、彼女の頭を撫でながら「いいよいいよ」と言っただけだった。

しかしエトナはよほど責任を感じているのか「ば、罰を……何か罰をください……！」と訴えてくる。

潤んだ瞳で縋りついてくる彼女の姿を見ているだけでも十分にこちらとしては眼福なので、それでチャラにしたいくらいだったのだが……しかしそれではエトナの気が収まらないだろう。

毎度ながら、真面目すぎるなど微笑ましくなる。

私はしばし考えた後、

「じゃあ、罰を言い渡します」

「はい……！」

「今日1日働いてきた私を癒すこと。手段は問わないから、エトナの好きなように癒してね」

「わ、わかりました……！」

エトナが力強く頷く。

まるで始めてのおつかいを託された小学生みたいな愛らしさがあつた。

「夕飯は今から作ったら遅くなるだろうし、ピザでも取ろうか」

たまにはジャンクフードもいいだろう。

そう思いつつ、家のどこかに残っていたはずのピザ屋のチラシを探す。

その一方でエトナは、私をどう癒すか真剣に考えているようだった。「マッサージ……あと、ハグは……いつもしてますけど……でも、何度してもいいでしょうし……」なんて呟くのが聞こえる。

軽い気持ちで言ったただけだったが、エトナがどんなことしてくれるのかちよっぴり楽しみだった。

暗雲と罰（後書き）

次は癒し回に極振りしたい感じでした。

初めて食べるピザに、エトナは大興奮だった。

シーフード&ビーフにチーズ増し増しで頼んだピザに齧りついたエトナは、伸びるチーズをうによくんと垂らしながら一生懸命に口に運び、キラキラした瞳で「すごく美味しいです……！」と言ってくれた。

「ほっぺ、ソースついてるよ」

「ど、どっちのほっぺですか？」

「こっち」

そうやって私はエトナの右頬についたトマトソースを指で拭き取ってやり、そのまま指先を口に含んだ。ほどよい酸味のソースを味わいながら「綺麗になったよ」と言うと、彼女はトマトソースみたいに赤くなって「ありがとうございます……！」とふんにやり笑った。

サイドメニューの骨付きチキンやサラダも頼んだおかげで食卓は賑やかで、

「たまには、こんな晩御飯もいいね」

食べ終えて何気なく言った私に、エトナも頷く。
だがすぐに彼女は「でも……」と言葉を繋いで、

「明日は絶対、わたしが作ります……！ピザよりずっと美味しいご飯を用意して待ってますから」

と、なにやら力を込めて言った。

「うん、楽しみにしてるね」

私はそう返して、空になったピザの箱や容器を片付ける。

そうして夕飯を終え、各々でお風呂に入り　　20時過ぎ。

「で、では……！　家事を忘れてゲームに没頭していた罰として今夜はわたしがトーコさんを癒して差上げますので……！」

お風呂上がりの私を待っていたのは、寝室のベッドで正座しているエトナだった。

先に入浴を済ませた彼女は、ワンピーススタイルのふわふわもこもこしたパジャマ姿。対して私はベロア生地のパーカーとショートパANTSである。

「わりと冗談だったんだけど、ほんとにするの？」

「します……！　いえ、させてください……！　いつもお世話になっている感謝も込めて、せいっぱいおもてなしますので……！」

エトナは意気込みいっぱいという様子だった。

私としてはエトナと一緒にいてくれるだけで日々に張り合いが出てとても助かっているから、むしろこちらが感謝したいくらいなんだけど……でも、せっかく彼女がおもてなししてくれるというなら、断ることもないだろう。

「じゃあ、お願いするね。どうすればいい？」

「ベッドにどうぞです……！」

エトナがさつと端に寄ってスペースを空ける。

私がベッドにうつ伏せになると、エトナは「失礼します……！」と

呟いて、背中に馬乗りになって跨ってきた。彼女のやわらかい太腿が私の脇腹のあたりに触れていて、温かい。

なんて思っていると、エトナの細くしなやかな指が私の首もとあたりに添えられる。

「マッサージ、しますね？」

言って、エトナは私の首もとをふにふにと指で押してきた。

小柄で細っこい彼女らしい、優しい指圧。

明らかに不慣れな手つきだったが、せいじっぱい気遣われているのが伝わってきて自然とリラックスした吐息がこぼれる。

「あの、どうでしょう……？」

肩甲骨の上へと指を移動させつつ、エトナが不安げに訊いてくる。

「気持ちいいよ……でも、もうちょっと強くてもいいかな。遠慮せずぐりぐりしてくれていいから」

「ぐりぐり……できるかどうか分かりませんが、よいしょっ……」

「！」

「んっ……」

思った以上に強く、そして気持ちよく指圧されて声が漏れる。

「あっ、えっと、痛かったですか？」

「うっん、気持ちよすぎただけ。その調子でやってくれると嬉しい」

首だけ回してエトナを見ながら言うと、彼女は表情を綻ばせて「……っ！ がんばります！！」と弾んだ声で返事をしてマッサージ

を再開した。

背中の上半分を入念にマッサージしてくれた後、エトナは私の背から降りて下半分も丁寧に揉み解してくれた。かと思うと、エトナの手がピタッと止まる。

「マッサージはお終い？」

身体を振って半身になって尋ねると、エトナは両手を膝の上にちょよこんとのつけてもじもじしながら、

「えっと、まだ終わりじゃないんですけど……その、トーコさんのお、おしりって……マッサージしてもいいですか？」

「いいけど、どうしたの？」

「い、いえ、なんでもないです……！ い、いいですよね……？」

頬を赤く染めるエトナに私は「今さら恥ずかしくならなくてもいいのに」と微笑する。

そんな余裕たつぷりの私とは対照的に彼女は、

「で、では……！ わぁ……柔らかくて、でも引き締まって……わぁ……！」

と、顔を真っ赤にしながらおしりをマッサージし始める。

別に触られること自体は全く恥ずかしくないのだが、照れながらたどたどしい手つきで私のおしりを揉んでくれるエトナを見ていると、なんだかいけないことをしているみたいでむず痒くなってきた。

やがてエトナの手は、おしりから太腿、ふくらはぎへと移っていく。

「……トーコさんてやっぱりスタイルいいですよ。背も高いし、すごく引き締まってて羨ましいです。……おっぱいも大きいですし」「ふふっ、ありがと。でも、私はエトナみたいに小さくて可愛い女の子になりたかったけど。もし身体を取替えっこができるなら、二人で取替えよっか」

「そんな、ダメです……！ トーコさんは今のままがいちばん素敵です……！！」

ふくらはぎを揉み解す手に力を込めて、エトナが言う。
それに私は苦笑して、

「そっか。背とか胸とか、ちょっと育ち過ぎたかなってコンプレックスだった時期もあったから、そういう風にストレートに褒めてもらえる嬉しいな」

「コンプレックスだなんてそんな……！ わたし、トーコさんに抱きしめてもらえるととっても安心します。小さくて弱っちいわたしのことを全部ぜんぶ優しく包み込んでくれるみたいで、本当に安心するんです」

エトナはマツサージの手を止めて、まっすぐに言う。

「だからその……トーコさんは、そのままいてください。わたしも、その……トーコさんと出会うまではずっと自分の身体のことなんて何もかも嫌いだったんですけど……でも、可愛いって、綺麗って言ってもらえて、生まれて初めて自分が自分でよかったなって思えるようになったので……その……えっと、あれ？ わ、わたしいきなりなに言ってるんでしょうね……！」

頬どころか耳の先まで赤らめてあたふたするエトナ。

言葉を口にしながら、何か込み上げるものがあつたのか、彼女の瞳は少しばかり潤んでいるようだった。

私は起き上がってベッドのヘッドボードに背を預けるように座り、両手を広げる。

「おいで」

その一言に誘われて、エトナは無言で私の胸に埋まってくる。

「こんな感じ?」

エトナのことを優しく抱きしめながら、耳元に囁く。
するとエトナは「はい……」と小さくつぶやき、

「とろけちゃうくらい幸せで、ずっとこうしていたいくらいです……」

……トコさんすごくあつたかくて、いい匂いがします……」

「エトナもあつたかくていい匂いがする」

お互いの体温や感触、息づかい……私たちはしばらく無言でそういったものを感じながら過ごした。言葉は不要で、時折り抱きしめる力に強弱をつけるだけで親愛を伝えるのに充分だった。

しばらくして私は無意識に、

「癒されるなあ……」

そう呟くと、エトナがゆっくり顔を上げた。

その表情はとろけてふんにゆりしてとても可愛らしくて、もう一度ぎゅうううと抱きしめてあげたくなるほどだった。

だが、それより先に彼女が熱っぽい声音で言う。

「まだ、マッサージだけしか終わってません……もっともっと、ト
ーコさんのことを癒してあげたいです……！」
「まだ、何かしてくれるの？」
「もちろんです」

とろとろの笑顔に浮かべ、エトナはパジャマのポケットから何か細長いものを取り出した。

「……耳かき？」

「はい。次は、お耳掃除です」

そう言っただけでエトナは私から名残惜しそうにしながらも身体を離し、ベッドの上で正座した。そうして、ワンピースの裾から露出した白くて柔らかそうな太腿をぼんぼんと叩いて、

「どござ、トーコさん……その、膝枕です」

そう言うにはにかみ、私を誘う。

私はごくりと喉を鳴らした後、彼女の太腿に吸い寄せられるように近づいた。

長い夜は、まだ終わらない。

Healing Night 1 (後書き)

こついつの無限に書き続けたいな……つてキモチ。

Healing Night 2

「おお………！」

右の頬をエトナの太腿に乗せる形で横になった私は、思わず感嘆を漏らした。

エトナが着ているワンピースタイプのパジャマは寝心地を考慮してか裾が非常に短かく、そのため彼女の太腿は惜しげもなく外気に晒されていた。

つまり私は14歳の少女の瑞々しい太腿に直に触れていて。

そしてそれは、華奢な彼女からは想像もつかないくらいにやわらかかった。

「もうこれだけで極楽かも」

私はうつとりと目を細め、エトナの太腿をさわさわと撫でる。

ベビーパウダーでもまぶしたかのようにすべすべだった。

「っ……くすぐったいですよ………」

エトナはぴくっと震え、恥ずかしそうに弱々しく言った。

「エトナのふとももが魅力的過ぎるのが悪い」

「え、ええ！？ そんな……んっ！」

わざとくすぐったくなるような手つきで指を這わせると、エトナは先ほどより大きく、びくと震えた。

「と、トー」さんっ!」

「ごめんごめん、エトナが可愛くてつい」

「そう言ってもらえるのは嬉しいですけど……でも……うう!」

頬を赤らめつつも、むうっと唇を引き結ぶエトナに、私は「可愛いなあ、もう」と思わず笑ってしまふ。

「い、今から耳かきするんですから、じっとしててください……!」
「はい」

梵天（白いふわつとしたやつ）付きの木製耳かきを手にしたエトナに返事をして、私は大人しく身を委ねる。

やがてエトナが、

「では……失礼します」

と、少しだけ緊張した声で言った後、耳かきを私の左耳に挿れられました。

耳の浅い箇所を、さじの部分で優しくカリカリされる。くすぐったくて、ぞわつとした。

きつと、文字通りさじ加減が分からないのだろう。もっと奥に挿れても大丈夫なのに、エトナは浅い部分をゆっくり丁寧に……コリコリ……カリカリ。

「……痛くないですか?」

「大丈夫。でも、もうちょっと奥を掃除してもらえると嬉しいかも」

そうお願いすると、すぐにさじが奥へ侵入してきた。

私が普段自分で耳かきする時に挿れるくらいの深さに達したさじ

が、ざりっ……と耳穴の皮膚を撫ぜる。

「うん、いいよ……そこ、気持ちいい」

「このあたりですか……？」

探り探りといったふうには、エトナはさじを動かしていく。

耳穴の中をぐるりと一周、カリカリ……。

「はあ……いいよお、エトナ。じょうずじょうず」

エトナの太腿と耳かきの心地よさによって、私のもとに少しずつ眠気が訪れようとしていた。このまま彼女の膝枕で眠れたらどれだけ贅沢なことだろう　そう思っていた矢先、

「うひゃっ!？」

突然予想だにしない刺激が耳を襲い、私は悲鳴とともに跳ねた。

慌てて起き上がってエトナを見れば、彼女は耳かきを逆さに

つまり、梵天の部分の部分を私に向けた格好のままぽかんとしていた。

どうやら先ほどの刺激は、あの白いふわふわのせいらしい。

エトナが目を瞬かせながら訊いてくる。

「わたし、何かいけないことしちゃいました……？」

「あ、いや、エトナのせいじゃないよ。私がちよつと気を抜きすぎただけ。驚かせちゃってごめんね」

「いえ、そんな……でも、その……」

もによもによと口を動かしたエトナは、照れと躊躇いが半々といった様子で視線を向けてくる。「どうかした？」と尋ねると、彼女はぼぼぼと頬を赤らめて、

「……さっきのトーコさんの声、今まで聞いたことないくらい可愛い声でした」

「っ……！　そういうのは言わなくていいから！」

ほにやつと笑って言うエトナに対し、私はカッと頬が熱くなる。不覚だ。一回り以上年下の女の子に恥ずかしいところを見られてしまった。

ちよつと凹む。

が、そんな私に更なる追い討ちをかけるかのように、

「あの……もしかして、トーコさんてお耳が弱かったりしますか……？」

「えっ、どうだろう」

突然の問いかけに、私は首を傾げる。

一方でエトナは、頬を赤らめ照れりこしながら言う。

「その……以前トーコさんのお耳を勢いで甘噛みしちゃった時も、トーコさんすごく可愛い声で驚いてたので……耳かきの時もとって気持ちよさそうでしたし……」

「言われてみれば確かに……28年生きてきてまったく気づかなかつたな」

「えへへ……トーコさんの弱点、見つけちゃいました」

自分の左耳を触りながら呟く私に対し、エトナは悪戯が成功した童女みたいにくすつと笑った。

その笑顔はいつも通り極上に愛らしかったけれど、同時に大人としてのプライド　もとい、大人気ないプライドが鎌首をもたげた。このままだと、負けた気がする。癪だ。

だから私は、不敵な笑みとともにエトナをベッドに押し倒した。

「と、トーコさん!? まだ反対側の耳かきが終わって ひゃう
っ!」

慌てふためくエトナをベッドに押さえつけたまま右耳に吐息を吹きかけてやると、彼女はぶるりと震えた。

「お姉さんのことを散々からからつてくれたね……覚悟はいい?」
耳元でややドスを利かせて囁くと、エトナが息を呑むのが分かった。

彼女はどうか脱出しようとしたばたもがくが、当然私がそれを許すはずがない。背丈が170センチ近い私と、140センチ前半台のエトナとは体格差も歴然のため拘束は容易だった。

私が本気だと悟ったらしいエトナは、抵抗を止めて身体を強張らせ、肉食獣を前にしてすべてを諦めた小動物みたいにぶるぶる震え出す。

そんな彼女の右耳に、私は再びふう……と息を吹きつけた。
更に、空いている手で左耳に優しく触れて甘撫でしてやる。

「ふっ……んんっ……くう……」

びくびくと身体を振り、声を漏らすエトナ。

その愛らしい反応に気をよくした私は、左耳を撫でていた指を次第に下へと滑らせて、首筋へ到達させる。

細く白い首を撫でると、エトナは猫のように顎を上げた。まるでもっとしてほしいとねだる仕草にキュンとしつつ、私は焦らすようにゆっくりとした動きで五指を這わせた。

「はう……トーコさん、くすぐりたい……」
「エトナは耳だけじゃなくて首も弱いんだね」

とろんとした瞳で見つめてくるエトナに、私は悠然と微笑みかける。

だが彼女は、弱々しく首を振って「ちがいます……」と呟いた。

「なにが違うの？　こんなに気持ち良さそうにしてるけど」

エトナの鎖骨をひとさし指で撫でながら悪い笑みを浮かべて問いかける私。

するとエトナは、手で顔を隠しながらほっぺを真っ赤にして呻くように言う。

「……んぶ……です」

「え？」

「ぜんぶ、よわいです……トーコさんに触ってもらえると、どこだって気持ちよくなっちゃいます……」

「そ、そうなんだ……」

予想だにしていないことを言われて、私は一瞬フリーズする。

だがそれ以上に、羞恥心に溺れながらも可愛いことを言ってくれたエトナに対して愛おしさと思戯心が止まらなくなる。

「じゃあ……ここも、気持ちいい？」

「あっ……」

私の手が、エトナの胸にもこもこしたパジャマの上から触れる。軽く指を押し込んでみると、僅かに柔らかい感触がした。それは

パジャマの生地ではなく、エトナの憤ましやかな胸の立派な存在証明だった。

……というか、この感触って。

「まさかエトナ、ブラつけてない？」

「えっと、はい……寝る時はちよつと窮屈なので……」

エトナがぼーっとした表情で頷く。

首筋を撫でていたあたりから拘束する力を緩めていたのだけれど、彼女はそれを知ってか知らずか逃げようとはしない。……いや、むしろ触ってもらえるのを期待する目をしているようにすら思える。

「そっか。ふふっ、エトナのお胸、ちっちゃくて可愛い」

揉むというよりは指を沈めるという意識で、エトナのささやかな胸を弄ぶ。

エトナは小刻みに震えながら悩ましげな吐息をこぼし、潤んだ瞳を私を見つめてくる。もう完全に私に身を委ねきっているようだ。

「会った頃より、お肉ついてきたね」

右手でエトナの胸を、左手でお腹のあたりを撫でつつ言う。

「トコさんが美味しいご飯をたくさん食べさせてくれたからです……」

「最近エトナにご飯作ってもらえばなしだね」

「そうかもしれないけど、そうじゃなくて……トコさんが私に優しくしてくれて大切にしてくれるから……わたしも早く元気になるたくて……だから、今の私が在るのはぜんぶぜんぶトコさんのおかげです……」

とろとろでふんにゆりした表情で、エトナが言う。

その声と顔に、私は今までにないくらいにきゅううっと胸が締められた。

ああ、私はこの子のことが可愛くて可愛くて仕方ないんだろ
うな。

そう思うのと同時に、しかしこの感情にどんな名前をつけていいのか分からなくなる。

少なくともこれは、恋とか愛とかそういう単純なものではないはずだ。

私は恋愛対象が同性でも異性でもいい人間だし、学生の頃は同性と付き合っていたこともあるけれど……でも、じゃあエトナと恋人のようなことがしたいかと問われれば素直に頷けない。

もっと自然な関係……そばにいるのが当たり前で、愛でたり甘えたりできる距離感がよくて。

それって結局恋人なのでは？　と思わなくもないのだけれど、ちよつと違う気がする。

……本当に何なんだろう、このキモチは。

まだ上手く定義できないけれど、いつかこの感情に名前をつけたい。

そう思いながら、私はエトナに覆い被さるようにして抱きついた。エトナも私のことを自然に受け止めてくれる。

しばらくお互いの体温や息づかいだけを感しながら過ごした後、私はふと思い出してつぶやいた。

「そういえば、シュークリーム買ってたんだっ」

「クリーム……駅前にあるって言ってたお店のですか？」

「うん、すっかり忘れてた。食べる？」

「……食べたいです」

「じゃあ、リビングで食べようか」

時刻は22時を過ぎていたが、許容範囲だろう。大丈夫、太ったりはしない。きつと。

私はエトナから離れてベッドから降り、立ち上がった。

しかしエトナはというと、身体を起こしたのはいいものの、それつきり立ち上がるうとしない。おまけに、段々恥ずかしそうに顔を朱に染めてもじもじし始める。

「どうかした？」

「あ、あの……色々され過ぎたせいで身体に力が入らなくて……立てません……」

耳まで真っ赤にして俯くエトナ。

「まったく、困った子だなあ。こっちおいで」

私は可愛くて仕方ないというような声音で言って、エトナにベッドの端 立っている私のすぐ傍に来るよう手招きした。

エトナは不思議そうな顔をしつつ四つん這いでこちらへ移動してくる。

そうしてすぐ傍に来た彼女を、私はお姫様抱っこした。

「わ、わわっ!？」

「ほら、大人しくしてなさい。ふにゃふにゃになった困ったちゃん
は、このままソファまで連行してあげる」

「~~~~っ!」

手で顔を覆って、声なく悶えるエトナ。

お肉がついてきたとはいえ、まだまだ軽い彼女のぬくもりや柔らかさを感じながら、私はエトナをリビンググへ運んだ。

「はい、エトナ。あーん」

「あ、あーん……！」

シュークリームを小さく千切って差し出すと、エトナは可愛らしい口をめいっぱい開ける。

バニラビーンズ入りのカスタードクリームがこぼれる前に、そのお口に入れてあげた。するとエトナは、ほっぺたをとろんと緩めて「おいひいです……！」と幸せそうに言った。かわいい。

寝室から場所を移して、リビング。

テーブルには、買ってきたシュークリームとふんわりと湯気の立つ紅茶。

私は床で胡坐を組んでいて。

そして、その組んだ足の上にエトナがちょこんと座っていた。

寝室でふにゃふにゃになった彼女を一旦はソファに運んだもの、もうちよつとエトナを構ってエトナニウム（エトナと触れ合うことで得られる癒しや幸福の成分。主に私に効く。いずれきつと癌にも効く）を補給したかったので、エトナを膝に載せて、こうして食べさせっこしているのだった。

紅茶も上手に淹れられた。

カップに口をつけつつ自画自賛していると、今度はエトナがシュークリームを千切って私に差し出してくる。

「えっと……お返しです」
「ありがとう」

エトナの細く綺麗な指先で摘まれたシュークリームをいただく。
バター風味がしつかりした皮と、甘すぎない上品なカスタード
クリームが口の中でとけていく。美味しい。

「それじゃあ、次は私が」

そう言って再びシュークリームを一口サイズに分けようとする。
だが、力加減を誤ってクリームがてるんとこぼれてきた。エトナ
のパジャマを汚すわけにはいけないので、慌てて手で防波堤を作る。

「ギリギリセーフ」

右手の指がクリーム塗れになるという犠牲と引き換えに、大惨事
を食い止めた。

これ以上の悲劇の連鎖を止めるべくシュークリームを一旦皿に戻
し、ティッシュを探す。

指のクリームが垂れないように注意しながら見回すと、ティッシ
ュ箱がテーブルから微妙に離れた場所に転がっていた。

これは一度、膝に乗った可愛い銀髪魔女さんにはどいてもらわな
ければならないだろう。エトナニウムの供給が一時的に途切れるが、
致し方ない。

「ごめん、エトナ。ちょっと立ってもらえる？」

そう言って　しかし、エトナは立ってくれない。

あれ？　と思っていると彼女は私の右手首を両手で包み込むよう

にぎゅっと掴んできた。

「待って待って、クリーム垂れちゃうって」

私は慌て、焦る。

しかしエトナは、あるうことか私の手を引っ張り寄せて

はむり、と。

クリームがついた私のひとさし指と中指を啜えた。

「　　っ!?!?」

さすがに想定外だったので、フリーズする私。

一方でエトナは、一瞬だけ恥ずかしそうに揺れる瞳を向けてきて
それから、真面目な顔で私の指をあむあむはむはむ。時折り、
舌でちろちろと舐めてきた。

くすぐったくて、ちょっとだけゾクゾクして……。
やがて、1分もしないうちに桜色の唇から私の指が抜き出ていっ
て。

いつの間にか耳朶まで紅色にしたエトナが「あの……綺麗になり
ました」とギリギリ聞き取れるかどうか、か細い声で言った。

「えーっと……ありがとう」

私は目をぱちぱちと何度か瞬かせてから、まじまじとエトナを見
つめる。

「……………」
「……………」

数瞬の、微妙な沈黙。

やがてエトナが、あたふたしながら弁明を始めた。

「ち、違ってます……！ さっきはその、合理的に一番いい選択をしただけで……！！ トーコさんのお膝の上を手放したくなかったですし、クリームも美味しそうで……そ、それに、ティッシュの節約にもなりますから……！！ だ、だから……！！」

「だから、私の指をちよっと恥ずかしそうに上目遣いで一生懸命舐めてくれたんだ」

「~~~~~！！」

平常心を取り戻した私が、ややいじわるな口調で言うと、エトナが身悶えする。

「まさかエトナがあそこまで大胆だとは思わなかったな」

「だから誤解です……！ 垂れそうなクリームが美味しそうだなって思ってたら気づいたらトーコさんの……その、指を……舐めて……そ、それを、その……途中で自覚して……」

「それで途端に恥ずかしくなってきたけど、どうしていいか分からなくて結局最後までクリームを舐めてしまった、と？」

「……………！！（恥ずかしさで死んでしまいそうな表情で、瞳を潤ませて頷く）」

「ああもう、可愛いなこいつめ……！！」

膨らみに膨らんだ羞恥心が破裂寸前になっているエトナを、ぎゅうっうっうっとうと抱きしめて大型犬を愛できるように銀髪をわしゃわしゃする。

「~~~~~っっっ!!!」

言葉にならない声を上げつつ、もみくちゃにされるエトナ。

「ほら、おとなしくしなさい。今日は寝るまでエトナに癒してもらって決めてるんだから。うりうり」

私の胸で溺れさせてやるというくらいの勢いで抱きしめて、撫でたりくすぐったりむぎゅむぎゅして可愛がって……5分後、エトナは私の膝の上でふんにやりト口けていた。

ちょっとやりすぎたかもしれないけれど、私の腕の中でくたいてになったエトナは最高に可愛かった。

ふあふ、と欠伸をひとつして。

私はごろんとベッドに横になった。

ベッドの左側に移動して、空いている右半分をばんぼんと手で叩く。

「おいで」

その短い一言で、エトナはほのかに嬉しそうな表情になって、そつとベッドが上がってころんと横になった。

すぐ目の前に、エトナの銀髪が寄ってくる。

私はそれに何気なく触れ、そのまま彼女の頭を撫でた。

彼女はくすぐったそうに目を細め、されるがまま。

250

「今日はあるがとうね。私のわがままに付き合ってくれて」

「そんなことないです……わたしもいっぱい良くしてもらえたので、嬉しかったです」

花の蕾が綻ぶように、ふわりと微笑むエトナ。

ばんやりした表情で見上げてくる彼女のことを「可愛いなあ、もう」と撫でぐり撫でぐりしてから、私は「じゃあ、電気落とすよ」と言っつて枕元のリモコンを操作して豆球にする。

室内が薄明かりになった。

布団を被ってすぐに、私は右手をエトナのほうへ伸ばす。

すると指先が何かに触れた。エトナの左手だった。彼女の小さく

てやわつこい指が私の指の感触を確かめるように控えめに絡んでくる。

ただどしくて、くすぐりたい。

私が思いきって右手をきゅっと握ると、エトナは一瞬びっくりしたように強張った後、左手をきゅっと握り返してきた。

顔を見合わせ、微笑み合う。

図らずしも恋人繋ぎになってしまったけれど……まあいいか。エトナは気づいてないみたいだし。

多少のむず痒さを感じつつも、私たちは互いの手を二度、三度と握ったり握り返したりを繰り返した。

「おやすみ、エトナ」

「はい……おやすみなさいです。トコさん」

手を繋いだまま、私たちは目をつぶる。

……。

……。

……10分か20分か。

私は上手く寝付けず、ぼんやりと目を開けた。理由は分かっていた。

白咲のことだ。

シナリオライティング会社のエースたる彼女の不調。

そして、その脱却。

社長から頼まれたというのもあるが、私自身、白咲に纏わる問題

については自分が適任だと自負している。有能が過ぎる故に他のライターたちと衝突を繰り返してきた彼女の折衝役として、私は何度もフォローに回ってきた。

そしてそれを、手間だとか面倒だとはただの1度も思ったことはない。

適材適所というやつだ。

私はディレクション業務 指導に調整やフォロー、あとは世話を焼いたり を中心にしてチーム全体を訓練しケアしていくスタイルで。

一方で白咲は実力 成果物の出来栄えやユーザーの高評価を叩きつけてパワーレベリングのようにチームを引っ張っていくスタイルで。

傍からすれば私のチームのほうが丁寧に見えるかもしれない。

だが、白咲のチームは成果物を上げるスピードが段違いに速いだ。

白咲と、彼女に感化され必死に喰らいついていくメンバーの筆力は相当なもので 白咲の荒々しいまでの仕事ぶりのせいで発生する衝突や歪みなどは社長や私がケアすれば事足りるし、結局白咲は『納期の中で最大限のクオリティをぶっ放す』ことしか考えていないわけ。

彼女の清々しいまでのライターとしての気高さに気づいた者は、たとえ一度「こんなやつと一緒に仕事なんてやってられるか!!」とキーボードをぶん投げたとしても、多少のケアだけで、後は自然と白咲のチームにも戻ってくるのである。

だからこそ、今回のケースは異例だった。

白咲灯鞠自身が上手く書けなくなるケースは初めてなのだ。

入社から数年、全力疾走で物語を刻み続けてきた白咲灯鞠という天才が初めて明確に立ち止まっている。

そんな彼女を、自分は再び走らせることができるのだろうか？
改めて事の大きさを実感し、不安に駆られてしまう。

「……トーコさん？」

小さな囁きに、私はぼんやりしていた眼をぱちりと開いた。

「起きてたの？」

「トーコさんが起きてるみたいだったので、気になって……」

そう言って、エトナが心配そうに見つめてくる。

「そっかそっか。ごめんね、ちょっと寝付けなくて」

私は誤魔化すように軽い調子で言った。

だがエトナは視線を逸らそうとはせず、それどころかますます心配そうな表情になる。

「……本当に、だいじょうぶですか？」

言って、エトナは繋いだ手を少しだけ強く握ってくる。

「わたしには、トーコさんの悩みごとをどうにかする力はないですけど……でも、聞くことくらいならできます……だから、その……」

控えめに、困ったように微笑むエトナ。

それ以上は口を噤み、私がどうするか待っているらしい。

しばし考え　私は「じゃあ、お言葉に甘えて」と呟いてエトナの手を握り返し、訥々と語りだした。

数年間一緒に働いている白咲という同僚がいること。

入社のきっかけが、私がシナリオを書いた『最期の日までに』らしいこと。

何かとつつかかってくるけれどそれを自分は微笑ましく感じていること。自分なんかより遥かに実力があり期待していること。頑張りすぎだと常々思うくらいに努力家なこと……そして、今なにかしらの壁にぶち当たって悩んでいるらしいこと。

普段白咲に対して抱えていることを改めて言葉にするのは少し気恥ずかしかったけれど、同時に私の中の白咲という女性の輪郭がハッキリしていくような感覚があった。

エトナはずっと、真剣に耳を傾けてくれていて。

「まあ、そんな感じで危なっかしい子がいるんだけど……どう励ませばいいのか難しくてね。一人で勝手に立ち直りそうな子だから、下手に声掛けないほうがいいのかもしれないし……」

私は苦笑して歯切れ悪く言った。

するとエトナは、ほう……とひとつ吐息を漏らして。

「白咲さんて……きつと、とても素敵な方なんですネ」

「どつしてそう思うの？」

「とても大切そうにお話してくれたので……トーコさんにそこまで想われているなら、きつと素敵な人なんだろうなって」

「私、そんなに白咲のこと大切そうに話してた……？」

「はい。聞いているこっちまでばかぼかしちゃうくらいでした」

ふんにゆりと笑って言うエトナ。

彼女がそう言うなら、きつとそうなのだろう……。

まあ、大切か大切じゃないかって二択なら迷わず大切だって言うだろうし、あのツンケンした年下の同僚を好ましく思っているのは確かである。

だからこそ、どうにかしてあげたいわけで……。

「きつと、だいじょうぶです」

吹っ切れない私の手を、エトナがぎゅっと握る。

「トーコさんならきつと、シラサキさんを助けてあげられます」

「……そうかな？」

困り顔の私に、私の何倍も密度の高い日々を過ごしてきたであろう彼女は、優しい声音で言葉を紡いでくれる。

「……わたしみたいなどうしようもない魔女のことを助けてくれたんです。だからきつと、だいじょうぶです。無責任ですけど……でも、トーコさんならきつとだいじょうぶです」

断言し、エトナはふわりと笑う。

それを見ていると、不思議と大丈夫なように思えてきた。

「ありがとう、エトナ。あなたがいてくれてよかった」

エトナの頭を優しく撫でて、微笑む。

もやもやと渦巻いていた濁った感情は、すっかり消えていた。

待ってる、白咲。

と、静かに気合を入れていると。

エトナが小さく「あとは……」と呟いた。

かと思えば、彼女は私のほうへぐっと身を寄せてきて。

そうして、繋いでいた手が離れ。

自由になった両腕で、エトナは私の頭を抱きしめてきた。

普段、私が自分の胸にエトナを抱き寄せるように。

今は、私がエトナの胸に抱かれる形になる。

「こうすると、悩みとか辛いこととか、ぜんぶ消えちゃいます……わたしは、その……いつもトーコさんにぎゅってしてもらって、安心できますから……」

「ああ、うん……たしかにこれはいいかも」

エトナの薄い胸に抱かれ、私は目を細めた。

温かくて微かにやわらかくて、甘いミルクのような香りがする。

普段エトナのことを抱きしめてばかりで気づかなかったけれど、誰かの胸に抱かれることがこんなにも心地いいものだとは思わなかった。……クセになりそうだ。

「……エトナ。今日、このまま眠っていい？」

「……はい。こんなのでよければ……どうぞです」

羞恥を帯びた声音で、しかしエトナは承諾してくれた。

「ほんと？　じゃあ、ずっと独り占めしてたいなあ……」
「独り占めしてくれてもいいですよ……？　でも、こうしてるとな
んだか、トーコさんの頭をよしよししたくなっちゃいますね……な
んて」

ぼつりと、耳元でエトナが言う。

私は段々とふわふわまどろみながら返した。

「いーよ。してして。むしろ撫でてほしい」

「いいんですか……？」

「うん。どーぞ」

「で、では……よしよし、です」

エトナの小さな手が、私の頭を撫でた。

ちよつとくすぐったくて、でも心の芯が温かくなってくる。

ずっとこうされていたという甘美な欲求が湧いてきて、とろけ
てしまいそうだった。

「……エトナの心臓、ドキドキしてるね」

「それは……だって、トーコさんをこんなに近くで感じてるんです
から……緊張しちゃいます……」

「そっかあ。可愛いなあ、エトナは」

「……今のトーコさんも、とっても可愛いです」

さっきまでより少しだけ強く抱きしめられ、優しく撫でられる。

「はあ……きもちい」

まるで揺り籠にいるような気分のまま。

私はエトナのぬくもりと鼓動を感じながら、心地よい眠りに沈ん

でいった。

そうして翌朝。

今までにないくらいに良質かつ幸福な睡眠を経て職場に向いた
私は、

白咲が無断欠勤なつえに音信不通であることを知らされた。

灯鞠ハートブレイク 1

ワンルームマンション、その3階の一室。

カーテンを閉め切った室内は、机に載ったノートPCが唯一の光源になっていた。

その曖昧な明かりによって、白咲灯鞠の輪郭が照らし出されている。

しかし、彼女の姿はいささか不穏だった。

普段入念なセットを施している金髪の縦ロールは、その面影を微塵も感じさせないほどに乱れていて。

常に華麗絢爛を極めていたメイクも今はなく、すっぴん。

コンタクトを外してやぼったい眼鏡を掛けており、寝不足と不摂生の合わせ技によってクマや肌荒れも酷い。

武装の如く纏っていたゴシック調の衣類は今は床に雑に放られており、代わりに着たるは無地のシャツとジャージ。

今の彼女を『白咲灯鞠』として認識できる者は片手の指ほどの数しかないだろう。

しかし白咲は、今の自分の姿になど一切頓着せず、目の前のノートPCの画面を虚ろな瞳で見つめ続けていた。

テキストエディタを起動してから、どれほどの時間が経ったのかわからない。

机の端にはドリンク剤の空き瓶やコーヒーの空き缶などがいくつも並び、足元にはコンビニ弁当の容器が無数に転がっている。

だが、白咲が対面しているテキストファイルは空白だった。書いては消して書いては消して……その繰り返しを延々と続け、今に至っている。

何を書くべきかは、分かっているはずなのだ。

とあるゲームで今後実装される水着イベントのための明るくキャッキャウフフ満載のシナリオ　以前先方にプロットを送り、OKを貰っている。だから、あとはプロットをなぞるように書くだけ。書くだけのはずなのだ。

「……………」

なのにキーボードをいくら打ち込んでも打ち込んでも、バックスペースキーに指が伸びて振り出しに戻ってきてしまう。

「……………」

ぐちゃぐちゃの、回らない頭のまま、ぼんやりと画面を見る。すると、PC脇に置いてあったスマホが振動した。

画面を見れば、社長からの着信だった。

何度も何度も、意地を張るように震え続けるスマホを無表情に眺め下ろした白咲は、しかしスマホに手を伸ばそうとはしない。

やがて根負けしたかのようにスマホは動かなくなった。

液晶には、新規着信が二桁数あることを示す文字列が浮かんでいた。

「……………くるさい」

ぼつりと言って、白咲はスマホの電源を落とし、ベッドに放り投げる。

「のど、渴いた……おなかも、減った……」

ふらりと立ち上がり、冷蔵庫を目指す。

その途中、コンビニの袋を踏んで滑り、盛大に転んだ。

腕を強かに打ちつけてしまい、痛みで顔が歪む。「ははっ……」
と渴いた笑みが漏れ、周囲に散乱した衣服やゴミを手で緩慢に押し退ける。

「なにしてんだろ、あたし」

靄のかかった意識のまま立ち上がろうとして　しかし白咲は、力尽きたかのように倒れ伏した。

「白咲が無断欠勤？」

「ああ、何度電話を掛けても出なくてね。LINEもショートメールも反応なし。さすがにちとマズいと思わないかい」

出勤早々、私の机の前までやってきた社長は、複雑な顔をして言った。

「白咲が無断欠勤で、初めてですよね」

「そうなるな。ウチは勤怠については非常に緩く管理しているんだが……ひまりんに関しては状況が状況なだけに進捗管理のためにも

出社するよう伝えてあつてね。なのに連絡ひとつ寄越さないというのは、さすがに大事だろう」

社長は額に手を当てて眉間に皺を寄せ「私の判断ミスだ。……彼女なら1人で持ち直せるのではないかと、勝手に甘えてしまっていた」と呟き、ギリッと歯噛みする。

「今までの白咲を見ていれば、社長の判断が悪かったとは思いませんよ。今回はあくまで初めてのケース であれば、今から最善を尽くしましょう」

「……そうだな。その通りだ」

珍しく弱々しい笑みを浮かべて頷く社長。

「打てる手となると」

険しい表情のまま社長が呟く。

すると、キャスターをすすすーっと転がして、椅子に座ったまま此葉がこちらにスライドしてきた。

「そんなの、先輩が白咲さんと直接話すしかないっすよ」

そう言いながら彼女は、私と社長の間をそのまますすーっと通り過ぎていった。

「あ、やべっ。行き過ぎたっす」

たははっつと八重歯を見せつつ此葉が私たちのそばへ戻ってくる。

「あなたはまた……でもやっぱり、此葉もそう思っつ？」

不覚にも、少し和んだ。

今日も平常運転な後輩は、腕組みして深く頷く。

「そつすね。白咲さんだいぶ拗らせてるところあるんで、塔子先輩が一発かましてやるしかないと思うんすよ」

「かますって……いや、なんとなく分かるけど。ただ、肝心の白咲に連絡つかないんじゃないかね」

「とりあえず白咲さんの家に凸ってみればいいんじゃないっすか？」

「凸るって……仮にいたとしても、居留守されたらお手上げじゃない？」

あっけらかんと言う此葉に、私は顎に手を当てて思案顔で返す。

「確かに、白咲さん意固地っすから先輩が家の前にいるって知ったら頑なに出てこなさそうっすね」

むう〜と渋い顔をする此葉。

するとそこで社長が「その心配はない」と言い、鈍く光る何かを取り出した。それは、

「ひまりんの部屋の合鍵だ。これを使いたまえ」

「えっ、社長なんでそんなもん持つてるんすか？」

「随分と前に、ひまりんから渡されたのさ。一人暮らしで在宅業務の多い我々は、急病などのもしもが起こったとき何かと大変だろう？ とくにひまりんは地方出身でこちらに親しい者も少ないから」あたしに何かあった時は、よろしくしなさいよ。それが福利厚生つてものでしょ？」と言われてね」

白咲の口調を真似て言い、社長は微かに笑う。

「そういうわけだから、託すよ。キミにだったら鍵を貸したってひまりんも許してくれるはずさ。……たぶん。いや、もしかしたら私めちやくちやに怒られるかもしれないが、うん」

苦笑する社長から、私は鍵を受け取る。

「もしひまりんが自宅にいなかった場合は、連絡したまえ。その際は非常事態として、社員総出で彼女が行きそうな場所を風漬しに探してやる」

「分かりました」

「白咲さんの仕事の遅れは自分がカバーするっすから、先輩はあの人のこと頼んだっすよ！」

此葉が力強く言い、拳を突き出してくる。

「オツケー、仕事は任せた。こっちは任せろ」

私も拳を突き出し、こつんとぶつけ合う。

気づけば、他の社員達も私のほうを見ていたり、頷いたりしていた。

「それじゃあ、ちょっと行ってきます」

オフィス全体に聞こえるように言い、私は外へ急いだ。

灯鞠ハートブレイク 2

抑圧と嘘偽り。

白咲灯鞠の人生は、この2つによって凝固していた。

地方でも有数の医院を営む両親の元に次女として生まれた彼女は、周囲から『立派なお医者様の娘さん』として見られ、相応の振る舞いを期待、あるいは求められてきた。

幼い頃の白咲は、それが己の責務だと感じていた。

裕福でなに一つ不自由のない衣食住を与えられているのだから、我侭を言わず淑やかに微笑む少女として在るべきだと自らに言い聞かせてきた。

だから、高校1年生の時に密かに書いていた小説のことが厳格な父に露見し、「くだらん」と一蹴されても、粛々と受け入れた。

呆れる父の視線を背後に、大切に綴った文庫本3冊以上にもなる冒険小説のデータを自らの手で消去し、バックアップ用のUSBと外付けHDDを風呂の残りの中に入れて壊しても 自分はそういう世界に生まれてしまったのだと、すんなり諦めることができた。

立派な女性となり、然るべき先に嫁ぐ。

それが、地方という酷く狭い世界に生まれ雁字搦めにされた白咲に敷かれた唯一のレールだった。

心を殺し、笑顔の仮面を被り、世辞や綺麗事を並べて日々磨耗していくのが白咲灯鞠という人間に与えられた役割。

そのレールが解体されたのは、大学2年生の頃だった。

親の目を掻い潜って適度に息抜きする術を覚えた白咲は、アニメやコミック、ゲームなどを扱う専門店で委託販売されていた同人ゲームと出会った。

『最期の日までに』というタイトルのそれは、同人ゲームコーナーの片隅にひっそりと棚差しされて残っていた。

パッケージには、ひまわり畑で手を繋いで微笑む、病衣の少女と真っ白いワンピースの少女。

ここまでベタなお涙頂戴のノベルゲームも潔いなと、ちょっと感心した。

お財布に余裕があったこともあり、これも何かの縁だと軽い気持ちでレジに持っていき、大学のサークルで使っていたパソコンにインストールした白咲は、その後ゲームにどっぷりと浸かった。

どの選択肢を選んでも、いずれ病衣の少女は亡くなってしまふ。

死別の瞬間までにどう2人の絆を深め、劇的な死を迎えるかそれがゲームの焦点だと定めて、白咲はゲームを進めた。

何度も何度も、少女は死ぬ。

生まれた瞬間から病に蝕まれ、決められた結末へ向かっていく。

それは、生まれた時から生き方が決められていた白咲自身のようで、だからこそ、どう足掻いたところで死んでいく病衣の少女の姿に、白咲は安堵した。

ああ、結局そうだよな。

そんなもんだよね、人生って。

少女が死ぬたび、自分の人生が肯定されるような気さえた。死との向き合い方について綴ったシナリオはそこに楽しめたこともあり、白咲はハイペースでエンディングを回収していった。

やがて、シナリオ達成率99%に至った時。

ゲームのメイン画面に、これまでにはなかったメニューが追加されていることに気づいた。

『エゴイスティック・エンド』

クリックすると、注意書きが表示される。

『これはシナリオ執筆者たつての希望で実装されたIFストーリーです。本編とは切り離し、お楽しみいただくことを推奨します』

同人ゲームらしいなど、笑みが漏れた。

これで達成率100%だ　そう思っつて、深く考えず進めた。

端的に言えば、IFストーリーはハッピーエンドで。

病衣の少女の病が奇跡的に治って、2人は幸せに生きるというものだった。

最後のシーンは、パッケージと同じひまわり畑で歓喜の涙と笑顔を浮かべて抱き合う2人の少女の一枚絵で締め括られていた。

不治の病が治るだなんて、本当にご都合主義でエゴイスティックで　しかしそれは、白咲の心を酷く揺さぶった。

願った未来は、これなんだ。

そう言外に語られているようで。

肯定されているとすら感じていた自分の生き方を、根底から覆された気がした。

気づけば彼女は両親の反対を押し切り、僅かな貯金を握り締めて上京して、塔子が勤めているシナリオライター会社に突撃していた。「やっと、人生が始まった気がしたんです……！」と三峰に絶つたことが功を奏したのか、はたまた偶然テノルテが事業拡大のために人員募集中だったおかげか採用が決まり、その後白咲はトントンの拍子でシナリオライターとしてのキャリアを積み上げていった。

家出同然だったこともあって気を強く持とうと意気込みすぎたせいか、性格は目に見えて尖り。黒髪にメガネだった見た目も、金髪に染めて巻いたりして。ファッションにもこだわって。身も心も、武装して仕事に励んだ。

すべては「あなたのおかげで、今の自分が在るんです」と塔子に伝えるため。

そのはずなのに。

言いたかった言葉は、何年経っても口にできず。

それどころか、憧れだったはずの塔子はメインライターとしての活動を滅多にせず、ディレクション的な立ち回りばかりで表に出ることもなくて。

あなたはもっとやれるはずだし、あたしなんかよりずっとずっと有名になる資格がある人間でしょ！？ とヤキモキを募らせていた矢先に、最近では恋人が出来たらしくライフサイクルがあらさまに変わっていて。

自分の中で一方的に抱いていた仲谷塔子という像が罅割れる音を聞いた気がした。

だから、もう吹っ切ろうと思ったのだ。

塔子に憧れ期待していた自分勝手さに別れを告げて、新しい何かになるうと　そう決めて一層仕事に没頭したはずなのに。

「うう……ん……」

何か、下手な走馬灯めいたものを見ていた気がする。

自室で倒れて気を失っていたのだと把握し、白咲は深く息をついた。

起き上がるのが億劫だった。栄養を摂って眠るべきなのは明らかなのだが……もう、どうでもいいかなあという境地だった。

「だれか、たすけてくれないかな……」

ぼつりと言う。

ほぼ同時に、玄関が開くような音を聞いた気がした。

灯鞠ハートブレイク 3

白咲の住むマンションまでは、タクシーで20分ほどの距離だった。

マンションの1階エントランスに入った私は、電子ロックされたガラス製のスライドドアの横に設置されているインターホンで白咲の部屋番号305を押し、呼び出す。

「……出ないか」

3回ほど呼び出したものの、応答はなし。

とはいえ、ここですごくすぐと帰るわけにはいかない。私の手には社長から預かった鍵があるわけで、留守にせよ居留守にせよ白咲の足取りを掴むのが役目だ。

私は鍵の柄の部分インターホンの隣に設えられたパネルに押し当てた。電子ロックが解除され、スライドドアが開く。エトナと一緒に住んでいる私のマンションより数段ハイテクだな、と思いつつエレベーターへ乗り込む。

3階へ向かう間、私は少しばかり思案する。

任せるだなんて言って白咲を探しに出たはいいものの、彼女がどうしてスランプに陥り音信不通になったのか分かっていない。だから、もし白咲と会ったとして、何を言い、何をすべきかハッキリしないのだ。

「もしも家族の問題とか……踏み込めない事情だったら、困るな」

それならそれで、会社全体として力になれる方法があるかもしれないが、いや、そもそも白咲の家族ってどういう人なんだろう。兄弟とかいるのかな。それなりの月日と一緒に働いてきたけど、そういう彼女のとなりなんて私は表面的にしか知らないな……。

「普段から距離が近いから気づかなかったけど、見ていたつもりで全然見てなかったのかな……」

あるいは、見ていたはずなのに見逃していたか。

自省していた社長同様、自分にも省みる点はあるのだろうと感じつつ、エレベーターを降りる。白咲の部屋の前に立ち、ドアをノック。

……反応はない。

そっとドアに耳を当ててみるが、特に生活音なども聞こえてこない。

……やはり、踏み込むしかないらしい。

そう思いポケットから鍵を取り出した矢先、白咲の部屋から何かが倒れるような物音が聞こえてきた。家具か、あるいは人が倒れたような……、

「えっ、白咲いるの？　ねえ、白咲？」

私は咄嗟にドアをノックしつつ、呼びかける。

だが、反応は返ってこない。物音自体が気のせいだったのか……いやでも、さっきの音が幻聴の類とは思えない。

「不法侵入って怒りたきゃ、後でたっぷり怒られてあげるからね白咲」

言っつて、私は鍵を使ってドアを開け、踏み込んだ。

「うわっ……」

カーテンを締め切り、明かり一つつけていない室内は昼間だというのに薄暗かった。

おまけに、微かに異臭が鼻をつく。臭いの元凶は玄関から少し先にある台所だ。シンクの中にはどうみても1週間分以上の洗い物が溜まり、ゴミも積み上がっている。

「……ここっつて、本当に白咲の部屋だよな？」

社長に渡された鍵で開いた以上、ここが彼女の部屋で間違いないはずなのだが……しかし、普段の華やかな白咲の装いからは思いもよらない劣悪な台所環境に戸惑ってしまう。

だが、引き返すわけにもいかないため奥へ進む。

すると、コンビニの袋や弁当の空き箱などが散乱した、足の踏み場もほとんどないようなりビングで倒れている人影が目に入った。

「……っ！」

思わず息を呑み、慌てて駆け寄る。

抱き起こして見ると、それは間違いなく白咲だった。化粧をまったくしていないスツピンでメガネを掛けているし、服装なんてラフなジャージだったが……しかし、顔の輪郭や体型から彼女が白咲灯鞠であることが察せられた。部屋に無造作に転がっている衣類にも

どこか見覚えがある。

「ちょっと白咲、大丈夫……じゃなさそうだけど、大丈夫!？」

呼び掛けて軽く揺すってみる。

だが、白咲は目を開けない。

私は一度白咲を床に横たえて、カーテンを開けた。日が差し込んで明るくなった室内で改めて白咲を抱き起こし、よく観察する。

クマは酷いものの、顔色自体はそこまで悪くないように思う。

彼女の首に手をあてて脈を測ってみるが、正常と言っていていいだろう。胸も規則的に動いているし、すう……すう……呼吸も……。

「……これ、単に眠ってるだけ？」

机の上には開きっぱなしのノートPCと1本1000円以上する栄養ドリンクの空き瓶が数本……徹夜を続けて力尽きたといったところだろうか。

「んっ……まだ、寝かせて……まだ……」

「えっ、白咲起きて……ない？」

急に白咲の声が聞こえて慌てるが、彼女は依然としてすうすうと眠ったままだった。

どうやら寝言だったらしい……が、心なし私の腕にしがみつくような格好になっているような気がする。

「とりえあず、ベッドに寝かしとこうか」

私は白咲を抱いたまま立ち上がり、ベッドに寝かす。途中で私の

腕から離れるのを嫌がるようにしがみついていたようにも思えたが、気にしない。

「話は起きてからにするとして、それまでどうしてようかな」

眠りやすいように再びカーテンを閉めた後、社長にLINEで白咲を発見した旨と、寝不足のようなので寝かして様子見するということ伝える。すぐに了解の返事が来て、「後は頼んだ。何かあれば、すぐに言ってくれたまえ」と締め括られた。

その社長からの返信を確認したのと同時に、くうくうくうきゆるるう……と異音がした。

訝りながら耳を澄ませると、再びくうう………という音。
どうやら白咲のお腹が鳴っている音らしい。

「この子、ちゃんと食べてたのかな……？」

悪いとは思いつつも台所に向かい、白咲家の冷蔵庫を開けてみる。

「これは……」

ミネラルウォーターと栄養ドリンク数本、あとはマヨネーズなどの調味料……それ以外はなにもない、悲しいほどに殺風景な冷蔵庫内に私は顔を顰める。

冷凍庫にも、使いかけのミックスベジタブルの袋が入っているだけ。

「ご飯も作っておいてあげないとだな、これ」

やれやれと小さくため息をつきながら、私は台所の調理器具を確認する。

どうせ白咲もしばらくは起きないはずだ。

近くのスーパーで適当に何か買ってこよう。辛い鍋やフライパンはあるので、煮るなり焼くなりができる。ついでに、掃除道具も必要だ。このゴミ屋敷と化した部屋も、文字通り一掃してやらねばならない。

「手の掛かる後輩だな、まったく」

微笑みながら言って、私は一旦白咲の部屋を後にした。

灯鞠ハートブレイク 4

くつくつと、何かを煮込むような音が聞こえる。
お腹が減る音だな、とあたしはぼんやり思った。

どうして自分がベッドで眠っているのかよく分からなかったけれど、まだ起き上がれるそうにもなかった。身体中が粘度の高い泥になっただけに重かった。

あたしはどろんとしたまま、鼻をひくつかせる。

お出汁のいい匂いがした。
懐かしい匂いだ。

まだ学生だった頃、お母さんが作ってくれた朝ご飯の匂いに似ている。

白咲家の朝食は、野菜や魚が中心で、やたら品目ばかり多かった。当時は面倒臭い朝ご飯だな、朝マックとかでいいじゃん、お金だけ渡してくんないかなあ……なんて思いながら食べていたけれど、今思えば育ち盛りのあたしのためにきちんと栄養価を考えて作ってくれていたのだろう。

毎朝あたしより早く起きて、温かい朝食を用意してくれて。

あたしがシナリオライターになると言い出した時も、最後まで心配してくれたのはお母さんだった……。あたしの夢をくだらないと一蹴したクソ親父に気づかれないように、こっそりあたしの荷物の中にお金と手紙の入った封筒を入れておいてくれたり……。

勘当同然で東京へ飛び出し、出てきて以来、実家には一度も帰っていないし連絡もしていない。お母さんには悪いと思っっているけれど、でも、連絡なんて取ってしまえばクソ親父にバレて連れ戻されそうで怖いのだ。

別に、寂しくなんかない。

自分は、一人でだつてやっていける。

だから、寂しくなんか……。

「まだ寝てていいよ」

不意に、声がした。

穏やかで、聞いているだけで安らぐ声。

絶対に知っている声のはずなのに、疲れ切った頭では全然思い出せない。確かめようと思つて目を開けようとするのに、睡魔が猛襲を仕掛けてきて瞼も上手く上げられない。

「無理しなくていいから、寝てなさいって」

慈愛が滲む声で言つて、その誰かはあたしの頭を撫でた。

最近ロクにお風呂に入っていないなくて手入れだつてしていないあたしのボサボサの髪を、まるで絹糸にでも触るかのように優しく撫でてくれる。

そんな風にしてもらつた価値なんてない髪なのに、心がじわりと熱くなる。

「おやすみ、白咲」

その短くも気遣い漂う声に、返事をしたかった。

おやすみなさいと、もう随分久しく誰にも言っていないありふれ

た言葉を返したかった。

けれど底の見えない透明な水の中に沈むように。
あたしは再び眠りに落ちていった。

「よしよし、ちゃんと寝たね」

白咲が寝息を立てるのを確認して、私は彼女の頭から手を離れた。
少し前より、幾分か顔色がよくなっているように見える。

料理が一段落ついたので白咲の様子を確認してみると、ちょうど
ぼんやりと目を覚まそうとしていたところだった。とはいえ、まだ
疲れが抜けていないようだったし、料理も未完成だったため寝かし
つけた　　というわけだ。

と、ピーツと炊飯器が鳴った。

「炊けたかな」

私は踵を返して台所に戻る。

1人暮らし用の2合炊き炊飯器を開けると、ふっくら炊けた白米
が迎えてくれた。

「まったく……炊飯器はあるくせにお米切らしてるなんて。白咲の
やつ、自炊とかほっとんどしてなかったんだろっなあ」

2キロとはいえ、米まで買って帰るのは中々に骨だった。小さなスーパーが近くにあつて助かったというものだ。……逆に言えば、近くにスーパーがあるのにコンビニ弁当ばかりの食生活だったというのが、白咲の普段の生活を物語っているわけで。

「ま、生き方なんて人それぞれではあるんだけどね」

呟き、椀にご飯を山盛りよそつてコンロの前へ向かう。

火の点いたコンロの上では、鍋がぐつぐつ煮えていた。

鶏肉や白身魚、白菜やネギ、キノコなどを入れて塩味ベースで煮込んだ寄せ鍋だ。既に具材はいい塩梅に煮えており、すぐにでも食べられるだろう。

が、これが本命ではない。

私は新たに小さな鍋を取り出して、その中に鍋の具や汁を適量移し、火にかけた。そこに先ほど盛った炊き立てご飯を投入。味を調えるために、醤油などを少々。

やがてコトコトと煮立ち始めるのを確認した後、買ってきた卵を冷蔵庫から取り出す。

「やっぱり、弱った時は雑炊だよね」

ということ、小鍋に卵を2つ投入。

軽がかき混ぜながら、卵が上手く固まるのを待つ。

「食欲があるようならお鍋も食べてもらえばいいし。便利よのう、お主は」

なんて言いながら、鍋の火を止める。

もしも食欲がなかった時のためにゼリーなども買ってきたし、出来る限りの準備は整えたつもりだ。空っぽだった冷蔵庫が、見違えるくらいに活用されている。

「それじゃあ、掃除もしちゃいますか」

同じく買ってきた指定ゴミ袋を手にし、私は台所を離れて白咲が眠っている狭い部屋へ戻る。極力音を立てないように注意しつつ、分別しつつ、床や机に散らかったゴミを片付けていった。

脱ぎっぱなしの衣服はとりあえずハンガーに掛けてやり、乱雑に放置された仕事の資料は、種類ごとに纏めて机に置く。

「……これは？」

ゴミだらけの部屋に似つかわしくない、綺麗な装飾を施された小箱を見つけた。

何かの折に貰ったお菓子か何かの箱だろうか。

ゴミなのか白咲の私物なのか図りかね、箱を開けてみる。

「これ、私のゲームじゃん……」

中に入っていたのは、『最期の日までに』のパッケージだった。

他にも、私がテノルテに入社してから関わったコンシューマーゲームのパッケージがいくつか。あとは、達筆な文字で『灯鞠へ』と書かれたくしゃくしゃの封筒と、おそらく手紙と思しき畳まれた紙。

さすがに手紙の内容まで見る気はなかったけれど、その紙はだいぶ古くなっており、折り目を見る限り何度も開いたり折ったり……つまり、たくさん読み返されていたことが察せられた。

「この箱、白咲の大切な物入れってこと……?」

私が関わったゲームが入っているのは謎だったが、何にせよ床にほったらかしにして置くなよと思いつつ、机に載せておく。

「ま、こんなところかな」

ある程度片付いた部屋を眺め、私はひと心地つく。

スーパーで買ってきておいた紙パックのカフェ・オレで糖分を摂取しつつ、白咲が眠るベッドの傍に腰を下ろす。

「……あとは白咲のお目覚めを待つばかりか」

スマホを操作し、自宅近辺の観光スポット情報を眺める。

こうしてドタバタとしているが、明日はエトナのお出掛けがある。

飾り過ぎず気取り過ぎず、でもエトナにとって大切な思い出になるようなお出掛けコースを構築していく。

「んっ……」

小さな声が漏れたかと思うと、白咲がこてんと寝返りを打った。

スマホから目を離し、彼女を眺める。

普段の白咲からは想像もつかないくらいに無防備でだらしない寝顔だ。メイクをしていないので派手さの欠片もない顔は、しかし素朴で可愛らしい。

「こういつ時でも、爪はちゃんと切ってるんだ」

なんとなしに視界に入った白咲の手を見て、眩く。髪や洋服などにはこだわらる反面、彼女は常に爪を短くしていた。いつだったか「キーボードを打つ時に邪魔なのよ」と言っていたのは、よく覚えている。

「……よく、頑張ってるね」

白咲の細い指に触れつつ、囁く。

彼女が目を覚ましたら、優しくしてあげようと思う。

勿論その後で、周りを心配させたことについては怒るつもりだけ
れど。

それはそれ、これはこれ。

メリハリは大事だ。

「そろそろ起きてもいいよ」

そんな私の独り言に反応したのか否か。

白咲の指が、私の指を求めるように絡まってきた。

「ふふっ、寂しんぼめ」

私は指ではなく、手全体で白咲の指を包み込んだ。

「大丈夫だよ、1人になんてしないから」

スマホを置いた私は、穏やかに眠る白咲を眺めて待つことにする。
彼女が起きるまで下手に立てないなあ、とぼんやり思った。

灯鞠ハートブレイク 5

白咲の指を握ってから10分くらいして、

「んっ……んんっ……」

白咲が小さく呻き、ベッドの上で僅かに身じろいだ。お目覚めだろうか。

私はそっと、白咲の指から手を離す。

白咲の指は消えてしまったぬくもりを探し求めるようにもそもそと動いた。が、握り返して貰えないと気づいたのか、やがて諦めたように脱力した。

まるで、手だけが別の生き物みたいだ。

そう思った矢先、緩慢な動作で白咲が起き上がる。

「おはよう、白咲」

ベッドの上にぺたんこ座り込む格好になった白咲に声を掛ける。

彼女はゆっくりと私のほうを向いた。だが、その目はまだ覚醒しきっていないことを示すようにぼやんとしている。

「とーこ……?」

寝起きで呂律が回っていないのか、白咲の声は普段より幼い印象だった。

「なんね、とーこがいるの……?」

ぼやぼやした瞳のまま、白咲はこてんと首を傾げる。

「あなたが無断欠勤して音信不通だったから見に来たの。……って
いうか白咲、まだ寝ぼけてるでしょ。顔洗って来れば？」

「あたしが寝ぼけてるわけないでしょ……！ 分かってるんら
ら。とーこがあたしの家なんかに来てくれるなんて出来すぎらし、
これは夢ね……！」

「いや、夢じゃないんだけど」

「ゆーめーなーのー！！」

白咲はベッドをぼふぼふ叩いて抗議してくる。

こいつ、寝起きが悪いつてレベルじゃない。

なんて思っているよ、

「えいつー！」

と、白咲が猫のようなしなやかな身体捌きで飛んだ。

ベッドの脇に座っていた私に向かって、である。

「ちよっ、うへっ!?!」

寸分変わらず私の胸に飛び込んできた白咲を、とっさに受ける。

だが受け止め切ることはできず、私は白咲を抱いたまま背中から
床に倒れこんだ。

「白咲、あなたねえ……！」

床に打ち付けた肩や背中が多少痛むものの、掃除をしておいたお
かげでゴミや置きっ放しの本に突っ込むようなことがなかったのは

幸いだった。

なのだが……。

「……………これは」

腕の中にすっぽり収まった白咲は、猫だったら喉でもごろごろ鳴らしていそうなほどに心地良さそうに目を細め、私の胸に埋まっていた。感触を楽しむようにすりすりとしんと頬ずりなんかしてきて「はあ〜夢、さいっこお……………」と蕩けた声を出す。

「ちよつと白咲、さすがに目え覚ましなさいって」

彼女の頭を手の平でぽふぽふ叩きながら呼び掛ける。

だが白咲は撫でられていると勘違いしたのか「わふう〜」とご満悦な顔になるばかり。猫かと思えば今度は犬になりやがった…………。足まで絡めてきて、完全にじゃれつき体勢である。

「もう……………そこまで！」

「痛あつ!?!」

このままでは白咲の尊厳が危うそうだったので、彼女の脳天にチヨップを見舞ってやった。

やりたい放題にじゃれついていた彼女は叩かれたあたりをさすりながら「なんで夢なのに痛いのお……………」と涙目になった後、目を瞬かせて私をじっと見つめてくる。

その瞳は、もうぼやぼやしていない。

「……………塔子、よね？」

「それ以外の誰かに見える？」

「見えないけ…………え、あのなんであたし抱きしめられてんの？」

「あなたから飛び込んできたんだけど、覚えてない？」

「……………あれって、夢でしょ？」

「夢じゃないんだなあ、これが」

お互いの体温がハッキリ分かるくらいに密着したまま、白咲は段々と表情を強張らせていく。

「……………じゃあ、あんたの胸に埋まったのも？」

「夢じゃない」

「ベッドをぼんぼんとして駄々っ子みたいに振舞ったのも」

「夢じゃない」

「……………じゃ、じゃあ、あんたがあたしのベッドに潜り込んで優しく添い寝してくれたのも？」

「……………？ いや、それは夢だと思っけど。っていつかそんな夢見たの？」

「…………………………っ！！！！……？……？……？」

ぽぽぽつと、白咲の顔がこれ以上ないくらいに紅潮する。

彼女の反応が可笑しく思えてきて、私はくくつと笑いながら。

「まあ、事故ってことにしといてあげるよ」

そう言っつて、白咲の頭をわちゃわちゃと撫でてやる。

「うがー！！ やめなさいっつてば！！ はーなーせー！！」

「はいはい、暴れない暴れない」

じたばた抵抗してくる白咲を解放してやると、彼女は床に座り込んで涙目でこちらを睨んできた。その顔は耳の先まで赤く染まっており、羞恥のせいかぶるぶると肩が震えている。

そんな白咲のお腹が、くぅ〜と鳴った。

泣きつ面に蜂とはこのことだろうか。

慌ててお腹を押さえた白咲は「うう〜とっ!」と恥ずかしげに呻いて俯いてしまう。

「別に恥ずかしがらなくていいのに。素直な身体じゃない」

私は多少乱れた着衣を整えながら立ち上がり、続けて言うてやる。

「心配しなくても、さっきまでのことは私と白咲だけの秘密にしていてあげる。だからほら、顔洗って着替えてきなさい。その間に飯用意してあげる」

それに白咲は弱々しく頷き、ふらふらと洗面所に向かうのだった。

灯鞠ハートブレイク 6

「……あたし、ご飯作ってほしいだなんて頼んでないんだけど」

折り畳み式の小さな丸テーブルの前に胡坐を組んで座った白咲は、不機嫌そうに言った。

テーブルの上には、ポカリのペットボトルと雑炊が入った器。

洗顔を済ませ、ラフなパーカー姿に着替えた彼女は、野暮ったい眼鏡のレンズ越しに尖った視線を向けてくる。

「なら律儀にテーブルの前に座らなくてもいいんじゃないの？」

白咲の対面で同じく胡坐を組んでいる私が若干茶化しつつ言っていると、白咲はカツと頬を赤らめた。

「そ、それは……流れというか……！」

「食欲が湧かないなら無理には言わないけど、できれば食べてほしいな。……これでも白咲のこと考えて作ったんだし」

「う、うぐっ……！」

わざと気遣わしげに言っていると、白咲は言葉を詰まらせた。

もう一押しといったところか。

「それとも雑炊は嫌いだった？ 一応お鍋もあるけど……何か食べたいものがあるなら買ってこくるから遠慮なく言っただけ。なんなら出前でも取る？ 好きな物なんでも頼んでいいんだからね？ 今のあなたはめいっぱい甘えてもいい立場なんだから」

「……っ！ あ、あんまり子ども扱いするようだと怒るわよ！？」

食べる、食べればいいんでしょ！ 有り難くいただきます！！」

白咲はブードルの赤ちゃんみたいにきゃんきゃん吠えながら、スプーンを引っ掴んだ。

そこから一気に雑炊にスプーンを突き込む　かと思いきや、

「……………いただきます」

と、一度姿勢を正して両手を合わせて小声で言い、それから改めて雑炊を掬い始める。

律儀だ。

うつかり可愛いと思えてしまっくらいには、律儀だった。

白咲の育ちの良さを実感する私をよそに、彼女は無言で雑炊を口に運んでいく。

静かに咀嚼し、嚥下。

そうしてまた無言で掬い、同じ流れで食べていく。

黙々と食べる白咲を眺めすぎるのも迷惑だと思い、私は適当に部屋を見回したりスマホを触って数分の空白を埋める。

やがて雑炊を半分ほど食べえた白咲は、静かにスプーンを置いた。ポカリのペットボトルの蓋を開け、こくこくと控えめに喉を鳴らして3分の1ほど飲んだところで「っはあ……………」と一息つき、胡坐から正座に座り直す。

それから私とは目を合わせずに視線を斜め下へ向けて、もによもによと唇を動かす。

「……………」

「と?」

「……ありがとうって言ったの。」飯美味しいわ
「そっか。よかった」

依然として視線は床を向いたままだったが、彼女の頬はほんのり赤らんでいた。

胡坐から正座に組み直してお礼を言ってくれたのは、白咲なりの誠意なのだろう。そういった些細な真面目さが愛おしくて、微笑ましい。

しかし、まだ話したいことがあったらしい。

白咲は伺うような上目遣いになり、

「……その、1つ訊いてもいいかしら」

「ん、なにになに?」

「……今のあたしを見て、何か言いたいこととかないの?」

不安げに、あるいは怯えるように言う白咲。

至極真面目な話なのだと察した私は、ふっと軽く息を吐いてから返事をする。

「言いたいことは、それはあるよ。むしろ無いはずがないでしょ」

「……そう、よね」

私の言葉を聞き、白咲は怯えの色を濃くする。

だが今さら話を途切れさせる必要もないだろうから、私は続けた。

「無断欠勤の理由とか、最近仕事が上手くいってなかった理由とか、食生活のこととか衛生面とか 聞きたいことは山ほどある。でも、今はあなたが元気になることが何より大事だから、気にしなくていい」

いよ。ほら食べな。面倒なことは後回しでいいからさ」

「あ、うん……そう、ね。うん。それについてはちゃんと説明しないと社会人として情けないっていうか、あんたにだけは言っておかないとって思ってるんだけど、その……」

「あれ？　なんか違った？」

まるで的外れなことを言われましたという風な白咲に、私は首を傾げる。

今の白咲に言いたいことなんて、そのあたりしかないんだけど……。

すると白咲は躊躇う素振りを見せた後、恥ずかしそうにぼしよぼしよと言い出した。

「その……あたしって今、会社にいるのとは全然見た目が違ってるいうか……地味でダサイし……だからその、ヘンでしょ……？」

「あ、そっちな」

今のあたし、というのがまんま眼前にいる彼女についてという意味だったらしい。

確かに普段の完全武装した白咲のイメージからすれば、今の姿はギャップが激しい……が。

「変とか地味だなんて思わないよ。単に『ああ、オフの白咲ってこんな感じなのかあ』って納得してる。セットとかメイクに気合入れているのは分かってたし。ていうか白咲って、すっぴんでも充分可愛いでしょ」

「ほ、ほんと……？」

「わざわざ嘘なんてつかないってば。野暮ったい眼鏡も似合ってるしいんじゃない」

「そ、そうなの……？」

指で眼鏡のツルに触れ、曖昧に照れる白咲。
きつと、喜ぶべきかどうか計りかねているのだろう。気持ちは分かる。普段見せたくないと思っていた姿や一面を褒められると私だつて戸惑うし。

しかし、これだけは言っておくべきだろう。

「どんな恰好してたって結局あなたが同僚で可愛い後輩ってことに
変わらないんだから、少なくとも私の前では気にする必要ないよ。
楽にしなさいな」

「……うん」

私の本心が届いたのか、白咲は力の抜けた自然な微笑を浮かべてくれた。

「……なんだか、色々考え込んでたあたしがバカみたいね」

「少しは楽になった？」

「ええ、だいぶ」

どこか清々しさすら滲ませつつ、白咲は続ける。

「ところで、まだまだご飯食べたいんだけど鍋も貰っていいかしら
?」

「いいよいいよ。持ってきてあげる。温め直すから、雑炊食べながら待ってて」

「ん、ありがと」

どうやら白咲は調子が戻ってきたらしい。

声に力強いものを感じつつ、私は立ち上がって台所に向かった。

「ん、ありがとう」

あたしがそう言つと、塔子は背を向けて台所に歩いて行った。それを見届けた後、あたしは気づかれないように小さく息を吐き出す。

さつきから、心臓がきゅっとなり続けていてどうにかなりそうだった。

ワンルームの狭い部屋であり台所までそう距離がないため、大袈裟に突つ伏したりベッドに埋もれて身悶えできないのが辛い。自分が仲谷塔子という女性に憧れ、溢れんばかりの好意を持って余していることをどうにか抑えこまなければいけないのが、もどかしい。

嫌われていてもおかしくない。

そう、思っているのだ。

普段からなにかと嘔み付いたり、ウザやかましく絡んだりしている自覚はあった。

入社して同僚になってからというもの、これでも近づき過ぎないように努力はしていたのだ。もし距離を縮め過ぎれば、きっとあたしは塔子に依存してダメになってしまったはずで。

だから、面倒臭くて口煩い同僚　　くらいの立ち位置にいるつもりだった。

なのにあいつは、あたしを可愛い後輩だと言った。

すっぴんの、地味でダサイ白咲灯鞠をなんでもないように受け入

れてくれた。

なにより、グズグズになって現在進行形で醜態を晒しているあたしの元に一番に駆けつけてくれて、叱ることも問い質すこともなく、ただ温かいご飯を作って話を聞いてくれている。

……こんなの、もう、白旗を掲げるしかない。

本当は、もっと喚き散らすはずだったのだ。

情けなくみっともなく、今書けないのはぜんぶぜんぶあんたのせいでと責任転嫁して、抱えている仕事ぜんぶ丸投げしてやるうとすら考えていた。我ながら酷いやつだと思うが、胸に渦巻く黒く暗い感情は、そうでもしないと消えないと思っていたのである。

でも今はもう、バカな考えや苦しさをなんてものはぜんぶぜんぶ綺麗さっぱり消えている。

代わりに芽生えたのは、知ってもらいたいという欲だ。

あたしのことを 仲谷塔子を追いかけて来たからこそ、今のあたしがいることを伝えたい。

白咲灯鞠を、ぜんぶ見てほしい。

「……大丈夫、ちゃんとと言える」

小さく呟き、雑炊を一口食べる。

出汁の利いた優しい味わいは、弱った身体を労わるように温めてくれる。塔子があたしのためだけに作ってくれたのだと思うと、今まで食べてきたどんな料理よりも美味しく思えた。

「……ずっと弱ったままだったら、塔子もずっと傍にいてくれるのかな」

あまりに身勝手な願望が思わず口をつき、ハツとする。
それと同じくして、塔子が台所から戻ってきた。
その手には、鍋をいっばいに盛った器。

「……食べ終わったら、ちゃんと話すから」
「うん、分かった。でも無理はしないでね」

微笑んでくれる塔子を見て、また胸がきゅうっとなった。
それを紛らわせるようにあたしは箸を持ち、塔子が置いてくれた
器からゴロっとした鶏肉を掴み上げた。

灯鞠ハートブレイク 終の上(前書き)

書きすぎて調整が間に合わなかったので上下に分けました。すまない……すまない。下は明日投げられるようにもにゃもにゃします。

灯鞠ハートブレイク 終の上

「ご飯をたらふく胃に収めた白咲は、事の顛末を話してくれた。
家庭環境や上京、就職。

そして最近の私に対する苛立ち。

シナリオライター・仲谷塔子は、もっとやれるだけの力があ
るはずなのに。

不貞腐れたようにしてそんなことを言う白咲に私は、

「……なんだか、くすぐつたいね」

と、照れ笑いだした。

まさか自分が書いたシナリオが誰かの人生に影響を与えてしまっ
たなんて想像したこともなかったから、恥ずかしくもあり誇らしく
もあり、そして少しだけ申し訳なかった。

私は、世界に名を轟かせる物語を書くとか、誰かを幸せにする
ストーリーを紡ごうだとか、誰かに憧れて書き始めたとか、そう
いう何か劇的な想いがあってシナリオライターになっただけではな
くて。

書くことで賃金を貰うのが、当時の私にとって一番楽で適所だっ
ただけで。

つまりは、軽率で。

だから、大学時代の私がエゴという名の旗を振り回して書いたシ
ナリオで白咲の人生の襟首を掴んで引っ張ったのかと思うと、ごめ

んね　と、少しだけ謝りたくなってしまっ。

「私、最近浮ついてたかもね。ごめん」

「あんたが謝らなくなったっていいわよ。……あたしが勝手に理想像押し付けて、勝手に凹んでむしゃくしゃしちゃっただけなんだから」

「ううん。何にせよ困らせたのは事実だから、反省する」

「……だから、気にすることないんだってば」

ベッドの上で体育座りした白咲は、ぶっきらぼうに言った。

どうでもいいけど、床に座ったままの私は白咲を見上げる角度になっっているため、彼女のパーカーの裾から伸びる無防備なふとももがやたら眩しい。

あと、下着がちらっと見えている。

薄桃色のやつだ。

てつきりハーフパンツでも穿いているものだとはかり思っていたんだけど、下着オンリーとは恐れ入る。

指摘するときつと怒られるので、見て見ぬフリで本題に戻ろう。

「白咲の話、1つ訂正してもいい？」

「なによ」

「私、恋人なんていないよ」

「は？」

白咲は晴天の霹靂とばかりにぽかんとした。

「いやいやいやいや、待って。待ちなさいって。毎日18時きっかりに帰ってたので彼氏と一緒に晩御飯食べてイチャつきラブリーやがるためじゃなかったの？」

「違うけど」

「イヤつきラブリヤがるってなんなのか……。」

「私はエトナに寂しい思いをさせたくないがために、最速で帰っているだけである。」

「恋人ではない。」

「じゃ、じゃあ先週駅ビルでまるで恋人と同棲をクソおっぱじめるかのように日用品を買い込んだり可愛い洋服をお選びくさりやがってたっていうタレコミは……？」

「だから、同棲する恋人なんていないってば。……っていうか誰からのタレコミなのそれ」

「桜井さんよ」

「あー」

「白咲のチームにいる寡黙で眼鏡な女性ライターさんに見られていたとは。」

「しかしそれだってエトナと暮らすことになったがための買い出しでしかない。」

「断じて恋人ではないのだ。」

「だが白咲は納得いかないという風に、まだ追求を続ける。」

「じゃ、じゃあ……！ この前あたしが飲みに誘ったのを断ったのはなんでなのよ？ あ、あたし結構頑張って誘ったのに、めっちゃくちゃあっさり断ったわよね！？」

「それは家に人を待たせてたからで」

「やっぱり恋人がいるんじゃないの！！ アホー！！ 嘘つきー
ー！！！！」

白咲が噛みつかんばかりに吠えた。
なにその小学生みたいな悪口。

「だから恋人じゃないって。ちょっと親繋がりで預かってる外国人の女の子がいて、一緒に住んでるだけなの。まだ14歳の女の子なんだから。ほら、この子」

私は、いつぞや此葉が遊びに来る際にあたってでっち上げた関係性を説明。

それからスマホを操作し、画像を見せる。

そこにはガリーファクションで控え目に微笑んでいるエトナの愛らしい姿。

白咲が四つん這いになってベッドの端までやって来て、スマホを覗き込む。

「銀髪……すごい可愛い」

「でしょ？ この子のことが心配だから早く帰ってるだけなの」

「……塔子、こんな子と住んでるんだ。楽しいの？」

「それは、うん。結構楽しいよ」

「そう……」

どこか寂しげに呟き、白咲はまじまじとエトナを眺める。

四つん這いの姿勢だとパーカーの胸元に隙間が出来てしまい、ブラが見えてしまうんじゃないかと心配になる。25にもなる大人の女性がそのだらしなさはどうなのか……。

あ、いや、心配いらないやつだこれ。

白咲、ノーブラだ。

「……………はあ」

3つ年下の同僚のズボラさに一抹の不安を抱きつつ小さくため息をついていると、白咲は四つん這いのまま私に視線を移す。

「じゃあ、塔子ってフリーなの……………？」

「そだよ。社会人になってからはオールフリーパス。ご期待に添えられなくてごめんね」

「……………別に。どうせ、恋人がいてもいなくても伝えたいことに変わりはないもの」

「うん？」

伝えるって、何を？

首を傾げる私をよそに、白咲は体勢を変えてベッドの端に腰を掛ける形になる。

そうして、どこか余裕のある笑みを湛えて私のことを見下ろして。

「あたしね、塔子のが好き」

そう、気負いも飾り気もない穏やかな声で言った。

「……………はい？」

突然の告白に、私は狐につままれたような顔になった。

一方の白咲は真剣さに少しの恥じらいを含んだ表情で続ける。

「ぜんぶ伝えるって、決めたから」

そう宣言し、白咲は。

「あたしは塔子に、どうしようもなく恋をしてる」

震える息遣いとともに、告げる。
恋。

つまり、恋愛感情。

「恋って、え、いや、え？ 私たち女同士だよ？」

「だからなに？」

戸惑いを見せる私に、しかし白咲は一切動じない。

冗談でも嘘でもない真摯さが、彼女の瞳から伝わってきた。

「そっかぁ……本気か」

私は姿勢を正し、白咲と向き合う。

ちょっと心臓がうるさい。

呼吸も、少しだけ上手くいかない。

どう返事したらいいんだろう。

真正面から告白されるなんて学生時代以来だから、上手に振舞え
そうにない。

白咲のことは嫌いじゃないんだ。

むしろ、魅力的で素敵な女の子だと思う。

でも、それじゃあ付き合おうかよろしくね　なんて簡単に言え
るほど、単純でもない。

別に恋人でもなんでもない、ふとした弾みで一緒に暮らすことにな
った少女のことが頭を過ぎってしまっエトナて、どうにも言葉が出ない
のだ。

……だって、さあ。

エトナをひとりぼっちにはできないよ？

「お悩みのところ悪いんだけど、返事はいらないわよ」

「え？」

懊悩する私に、白咲は意外なことを言った。

「言ったでしょ？ 伝えたかったただけだって。……ちゃんと吐き出して終わりにしたかったから言ってるだけだもの」

「白咲……」

さっきまでの話は、シナリオライター・白咲灯鞠の顛末で。

そしてここからは 白咲灯鞠という女の恋心に纏わる顛末だ。

「迷惑掛けるのは今日で終わりにするから、今だけは付き合って」

切実に言い、白咲は唇を結んで見つめてくる。

私が承諾の意を込めて頷きを返した。

それを確認すると、彼女は宝物を取り出すようにゆっくりと呟きます。

灯鞠ハートブレイク 終の下(前書き)

遅れてすまぬ……すまぬ……。忙しくてのう……。…。

灯鞠ハートブレイク 終の下

「最初は、純粋な憧れだったの」

ゆっくりと、白咲は言葉をこぼす。

「あたしの狭い世界を決じ開けてくれた人と一緒に仕事ができると思ったらワクワクして楽しくて、ずっと塔子のことばかり目であつた」

「……知ってる」

よく覚えている。

やたらに綺麗で可愛い金髪の女の子が入社したかと思えば、やけに視線を感じたから。

入社したてで会社の人間模様でも観察しているのかなって思ってたけど、彼女は私ばかり見ていて。

「でも、見れば見るほどあたしの中にあつた塔子のイメージはどんどん崩れていった。きつと凄腕のトップライターなんだと思ってたのに、あんたはいつだってディレクション中心で働いてて、クレジットには個人名義じゃなくて会社の名前を載せるようにしてて……業界内で仲谷塔子を知ってる人なんて、ほとんどいなかった」

「出世欲とかなかったからね。今の会社、居心地いいし」

「……あんたが本気出せば、あたしより凄いシナリオだって書けるはずなのに」

「それは買い被りが過ぎるよ」

恨めしげな瞳を投げかけてくる白咲に、私は苦笑する。

「買い被ってなんかいいわよ。ただ、あたしがそう思ってるだけ。……今まですつと『手本にしたり尊敬しているライターさんは誰でもですか?』って聞かれたら、絶対にあなたの名前言うてるんだから」「それはまた、なんとというか……」
「……誰もあなたの名前にピンと来る人がいないから、毎度説明するのが大変なんだからね?」
「無名でごめんよ……」

半眼を向けられ、私は目を逸らした。
そっか……白咲、そこまで私のこと好きなのかあ……。

「……とにかく、あたしはあなたにどんどん幻滅していったの。憧れた人がこんな奴だったのかって。失望したり、自分の見る目のなさに凹みもした。自分勝手な理想像を押し付けて何様のつもりだって感じだけど、それでもあたしはこんな仲谷塔子は認めないって苛立った。……苛立ったんだけど……でも……」
「でも?」

歯切れ悪く言葉を切った白咲に、私は聞き返す。
すると彼女は切なげに眉根を寄せ、複雑そうに切り出した。

「……でも、嫌いにだけはなれなかった」

そうして、困ったように笑う。

「確かに憧れた姿とは違ったけど、でも塔子は魅力的な人だった。サバサバしてて気配りができて優しく……あたしみたいな面倒臭い拗らせ女にも嫌な顔せず付き合ってくれて可愛がってくれたし……」

言って、一息。

そうして、はにかんで。

「気づいたら好きになってたのよ。それを自覚したら、もう止まらなくなってた」

そこまで口にした白咲は、さすがに照れ臭くなったのか再び膝を抱えて体育座りになった。

白く綺麗なふとももと下着が露わになっていたけれど、気にする素振りも見せない。

「そっか……」

真剣に耳を傾けていた私は、息継ぎをするようにしてそれだけ呟いた。

まったく、いじらしいなあ……。

ここまで素直に好きだなんて言われてしまうと、どうしたって意識してしまう。

「……もうぜんぶ言っちゃうって決めたから言うけど、あたし、あなたのことを考えて、その……自分でシてるんだからね……」

「えっ、ん？ し、シてる？」

斜め上のカミングアウトに、私の声の上擦る。

私としては、シテるとい言葉だけでその意味は充分に理解できたのだけれど、戸惑う私を見て白咲は『意味が伝わっていない』と感じたらしい。

彼女は膝頭に口元を埋めて、恥じらいながら解説してくれた。

「……自分で慰めてたの。……その……塔子のことを考えてオナニしてたのよ……」

「えっと……それはその、ありがとっ？」

真っ赤になった白咲に釣られるように、私まで恥ずかしくなってくる。

いや、待って待って。あなたで自慰してますって言われてっひゃー！っってならない人とかいる？

間接的に私への羞恥プレイなのでは？

「それだけじゃないわ……」

「ま、まだ何か？」

「……塔子とえっちなことする妄想を書き散らして保存してるの」「それは私のこと好き過ぎるのでは？」

「……自分でもどうかと思わなくないけど、書きながら慰めるの……すごくキモチイイのよ……」

「そっかぁ……」

私は知らないうちに成長した孫娘を眺めるおばあちゃんみたいな表情になって、しみじみ相槌を打った。

「……ひ、引いた？」

さすがにカミングアウトし過ぎたと自覚したのか、白咲は不安げに伺ってくる。

「引きはしないよ。『ああ、本当に私のこと好きでいてくれるんだなぁ』って嬉しいくらい」

「ほ、ほんと……？」

「嘘なんてつかないよ。好きな人のことを考えながらシチャウのはおかしくないでないんだもの」

「そ、そうよね……！ オナニーくらい、誰でもするわよねっ！
……えへへ、よかった」

白咲はふとももを擦り合わせてもじもじしながら、頬を朱に染めた。

なんだその可愛いをぎゅっと詰め込んだみたいなりアクションは……ちよつと見惚れてしまっじゃないか。

「……とにかく、それくらい好きなのよ。今だって、すごくドキドキしてるんだから」

膝頭に顎を乗せて、白咲は熱っぽく言う。

カミングアウトの後のせいかわ、その『好き』という言葉は存外心に沁みだ。

このまま白咲のことをきつく抱きしめてやりたいくらいに、愛おしく思えてしまう。

でも、

どうしたって、エトナことが思い浮かんでくる。

私の帰りを待っていてくれていて、明日なんて初めて一緒にお出掛けすることになっている異界からの来訪者。

もし私が白咲の告白に応じたら、どうなるだろう。

エトナはきつと、びっくりしたり祝福したり応援したりしてくれらるだろう。あの子は、そういう子だ。そうして私に気を遣って距離を置いて我慢して……それで、出会った直後のような無理な笑顔ばかりを見せるようになるんだろうなあ……。

それは、心底イヤだ。

「……あたしの話はこれで終わりよ」

考え込んでいた私を見て何を感じ取ったのか。

白咲はぼつりと言ってベッドを降り、立ち上がって笑う。

「やっと好きって言えたわ。付き合ってくれてありがとう、塔子」

「うん……私も、ありがとう」

「別にあんたがお礼言うようなことでもないじゃない。ヘンなの。

さてと、仕事しないとマズいわよね。社長にも連絡入れないと」

言いながら、白咲はパソコンに向かおうとする。

その横顔。

無理やりに笑顔を貼り付けたような、顔。

それが見えた瞬間、私は立ち上がり、白咲の手を掴んだ。

「っ……！ な、なによ。びっくりするでしょ……？」

振り向いた白咲が、困惑気味に言う。

「ごめん。でも、ちゃんとっておかないといけない気がするさ」

私は決して逃すまいと白咲の手を握る力を強めつつ、

「告白ありがとう。でも、私はあなたとは付き合えない」

そう告げた。

瞬間、白咲が息を呑む。

「っ……！ 返事はいらないうって言ったはずよね？」
「そうだね。でも、私はそれを了承はしてないよ。白咲が勇気を出して告白してくれたんだから、私にはそれに応える義務がある。有耶無耶にしたまま、あなたを苦しめたくないもの」
「……今この瞬間が間違いなく一番苦しいんだけど」

白咲が険しい表情で睨みつけてくる。

「苦しみ続けるよりは、ずっといいはずだよ」
「……分かったふうに言わないで。あたしは、ただあなたに好きって言えたらそれで満足だったんだから」
「嘘。そのくらい分かるよ。何年も一緒に仕事してたんだから」

そう言うと、白咲は俯いた。

「……付き合えないのはあたしに魅力がないから？ それとも、女同士なんてありえないから？」
「どっちも違う。あなたは可愛くて素敵な子だし、私は女同士ってことに抵抗はこれっぽっちもないよ」
「じゃあ、他に好きな人がいるの？」
「……恋人同士になりたいと思ってるような人はいないかな。ただ、放っておけない子はいる」
「一緒に住んでる女の子のこと？」
「うん。エトナっていう名前なんだ」
「……そう、よね。だってあんた、そのエトナちゃんの話をする時、すごく楽しそうだったもの。だから返事はいらないうって言ったのよ……！ 初めから告白したって叶いっこないって分かってたから……！ こっちは笑って誤魔化して終わりにしようと思ったのに……！……！ こんな、傷口に塩を塗るような……っ！」

溺れながらも懸命に息継ぎをするかのように白咲は言葉を吐き出し、それからきゅっと唇を引き結んだ。

これ以上口を開いていれば感情のままに吐き出してしまいそうだったのだろう。

代わりに彼女は私のことを睨み上げてくる。

その目尻には涙が浮かび、今にもこぼれ落ちそうだった。

「最後まで聞いて、白咲。私はエトナのことを放っておけない。

でも、それと同じくらいあなたのことも放っておけないの。何も無いままでなんて、終われないよ」

「ッ！！ そんな、口から出まかせッ！！ あたしのことなんて、どうでも」

涙をこぼして叫び、白咲は私の手を振り解こうとする。

しかし私はそれを決して許さず、それどころか彼女の腕を引っ張って抱き寄せた。

「信じられないかもしれないけど、私はあなたのことをずっと見てた」

絶対離すものかときつくきつく白咲の身体を抱きしめながら、私は言葉を並べる。

白咲が関わってきた仕事などを確認していたこと。

シナリオライティングやユーザーからの評判、白咲がインタビューを受けた記事の確認、共通のクライアントからの白咲の印象など

それはテノルテに長くいる社員としての仕事という側面もあったが、それ以上に個人的に白咲のことを気に掛けていたからこそやっっていることだった。

「嘘……そんな戯言、信じないんだから……っ！」

私の胸の中で白咲は抗議の声を上げる。

だが、彼女が仕事で関わったシナリオタイトルを古い順に列挙して簡単な感想などを添えていくと、7つ目あたりで「分かった、分かったわよ……！ 信じる、信じるから……！」と言ってくれた。

そうして涙で濡れた瞳で私のことを見上げ、捨てられることに怯える子犬のような細く弱々しい声で訊いてくる。

「あたしのこと、ずっと見ててくれたの？」

「見てたよ、ずっと。それは見ちゃうに決まってるよ。何かと絡んでくるし、シナリオの腕は良かったし。社長から私の同人ゲームをプレイした子だって聞いてたし……まさか告白されるとは思ってなかったけどね」

そつと白咲の後ろ髪を撫でながら言う。

「告白を受けるとか断るじゃなくて、私はこれをきっかけに白咲と もっと素直な関係を築けたらいいなって思うんだ」

「素直な……関係？」

「恋人同士にはなれないけど、もっと白咲と仲良くなりたいたいのには本音だから」

我ながら勝手な物言いだとは思う。

でも、エトナとも白咲とも此葉とも仲良くやっていきたいというのは偽らざる本音だ。恋人という言葉に縛られず、もっと曖昧だけれど心地よい関係を積み上げていきたい。

「……なら、めいっばい甘えるわよ？」

「え？」

「今までずっと我慢してたもの……友人として、いっばいっばい、素直になるわよ？」

そう呟くと、白咲はぐつと体重を預けてきた。

押し倒される形になった私は、彼女を抱いたままベッドに背中から倒れ込む。

「このままぎゅってして」

胸に顔を埋めたまま、白咲が言う。

「えーっと、切り替え早すぎない？」

「……だって、付き合えないのにウジウジしてたって恰好悪いじゃない」

「だから友人の範疇で可能な限り甘えるってわけ？」

「そういうことよ。……ほら、早く」

多少の恥じらいを含んだ声で催促される。

私はやれやれと嘆息しつつ、左腕を彼女の腰に回し、右手で頭を撫でてやる。

「こんな感じでいかが？」

「ん……文句ないわ」

お気に入りのポジションを見つけた猫のように大人しくなる白咲。寂しがりな甘えたがりめと思いつつ、私は頭だけでなく背中までゆっくりと撫でる。

「はあ……もう死んでもいいかも」

うつとした声音で白咲が呟く。

「さすがに大袈裟すぎない？」

「大袈裟なんかじゃないわよ。……好きな人にハグされてるのよ？」

「……しかも、初恋の……」

「……初恋なんだ」

「……ええ。もう何年も片想いしてたんだから」

「それは、うん。ありがとう」

しおらしく言う白咲があんまり可愛いものだから、私は両腕でぎゅゅと抱きしめてやった。恋人にはなれないけれど、友人として、親愛を込めて精一杯に。

「塔子……それは、ダメ……」

「ごめん、可愛くってつい。痛かった？」

どこか苦しげな白咲の声に、慌てて腕を緩める。

「……そうじゃなくて……！ えっと……あんまり優しくされ過ぎると嬉しくて……その……濡れちゃう……」

「……濡れるって、それはつまり、そういうこと？」

「ごめん……さすがに口にするべきじゃなかったわ。こんなの、ただのいやらしい子じゃない……」

「今更遅いでしょ。まあ、私はそういうの別に気にしないから、素直になっておきなさいな」

気軽に言っただけで、白咲の頬にそっと触れてやる。

「っ~~~~！　そういうことされると、ほんとっ、我慢できなくなるからダメッ…………！」
「これもダメなの!?」

熱っぽく潤んだ瞳で必死に抗議してくる白咲に、私は素で驚いてしまう。

エトナにはいつもやってることなんだけどなあ…………。

なんて思っていると、白咲が真っ赤な顔のままおねだりするように甘い声を出す。

「ねえ、塔子。もう一つお願いしていい？」

「なに…………？」

「これからは名前で呼んでほしいの。…………ずっと白咲って苗字呼ばれるの、なんだか寂しいし」

ああ、そういえばそうだった。

それならお安い御用である。

「いいよ。これからは灯鞠って呼ぶね。　　灯鞠」

親しみを込めて名前を呼ぶと白咲　じゃなくて灯鞠はピクッと震えた後、私の胸に鼻頭を押し付けながら熱い息を吐き出した。

「やばっ…………塔子に名前呼んでもらえるのすごい…………どうしよう、キョんってきちゃったんだけど…………濡れるの止まらない…………」

「…………それは我慢してね？」

「…………分かってる。あとで、思い出しながら1人です…………」

声を震わせながらそう言って、白咲は何度か太ももをすり合わせ

その後、深呼吸を繰り返した。

そうしてようやく落ち着いたので「ありがと……もう、大丈夫だから」と言っていて私から身体を離し、今度こそ無理のない純度100%の笑顔を見せてくれた。

「よかった。本当に心配したんだから。次からは何かあったらすぐに言ってね」

「うん、そうするわ……今まで我慢してたぶん、いっぱい甘えてやるから覚悟しなさいよね」

「ほ、ほどほどにね……？」

若干の苦笑いを残しつつ、二人してベッドから降りる。

「灯鞠、とりあえず社長に電話してね」

「そうね。……ちゃんと謝って、もし許して貰えるなら、仕事頑張らないと」

「大丈夫だよ。社長は灯鞠のこと、待っていてくれるはずだから」

少しだけ不安げな灯鞠を励ますと、彼女は頷いてスマホを手にする。

私はそれを見届けつつ、ぐっと伸びをした。

「ねえ、塔子」

「ん、まだ何かあるの？」

「……もし心変わりしたら、いつでも言っただけよ。あたし、あんた以外を好きになるつもりなんてこれっぴぽっちもないんだから」

「ありがと」

はぐらかすような返事に、しかし灯鞠は何も言わず、スマホを操作して社長を呼び出し始める。

この後社長が「資金が貯まったらから自社製作のオリジナルゲームをやるう！」と言い出して、私と灯鞠がメインライターに据えられるのだけれど……それはまた、いつかのお話だ。

なんでもない時間が、いつまでも続けばいいのに。
(前書き)

ごめんなさい！！！！

転職とか色々あってあたふたしてます！！

なんでもない時間が、いつまでも続けばいいのに。

「ふひゅう……長い1日だった……」

18時過ぎ。

エレベーターを降りた私は、やれやれと息をついた。

灯鞠のことでドタバタした1日だった。

彼女が立ち直ってくれたようで一安心だけど、こうしてマンションに戻ってきた今、途端に疲労感が押し寄せてくる。肉体的にも精神的にも消耗しているようだ。

「告白されて断って、だもんなあ……」

改めて目まぐるしい1日だったと苦笑しつつ、玄関を開ける。

すると、とととつ　と耳慣れた足音が聞こえて。

「おかえりなさい、トーコさん……!」

黒いシャツの上に薄桃色のエプロンを着たエトナが出迎えてくれた。

私はいつも通り「ただいま」と返して靴を脱いで廊下に入り、鞆を置いてエトナを抱きすくめる。

「ただいまあ……」

エトナの柔らかな銀髪に鼻を埋め、囁くようにしてもう一度言っ。

「……えつと、トーコさんお疲れ……ですか？」

「うん、まあちょっとね。やっぱり分かる？」

「声がなんとなくしんどそうだったので」

そう言っつてエトナは私の背中に手を回し、小さな手のひらで優しくさすってくれた。

「お仕事お疲れさまでした。……わたしなんか言うのもおこがましいですけど、とてもご立派です」

労いと慈しみを込めた言葉。

それだけで、気だるい心がすつと軽くなる。

世界中の労働に勤しむ人々すべてにこの幸せをおすそ分けしたいくらいだ。いや、やっぱり誰にもあげたくない。独占したい。

「エトナは優しいなあ」

「そんなことないですよ……トーコさんが優しくしてくれたから、そのお返しをしてるだけです」

「良く出来た子なあ……」

ついつい可愛くて、むぎゅっと抱く力を強くする。

エトナは「あうっ」と冗談めかした悲鳴をあげて、されるがまま、可愛い。

温もりに浸ってふにゃふにゃになってきた私は、思ったことを考えなしに口走る。

「エトナと結婚する人はきつと幸せになるだろうなあ……」

「そ、そうですね……？」

「うんうん。可愛いし料理は上手だし気配りもできるし、やっぱり可愛いし」

よしよしと、エトナの頭を撫でる。

相変わらず極上の手触りだ。ずっと撫でていたい。

私がちよつとだらしない顔をしてエトナを撫で続けていると、彼女はそつと呟いた。

「……………それじゃあ、トーコさんもですか？」

「ん、なにがー？」

「もしわたしがトーコさんと……………その……………結婚したら……………幸せになつてくれますか？」

エトナが、純粹さと少しばかりの憂いを帯びた瞳で見上げてきた。だがすぐに自分が何を口走つたのか気づいて真つ赤になり、わたしをする。

「あ、あの、ちがうんです……………！ 結婚つていうのは言葉の綾で、えつと……………その、ただ、えつと……………トーコさんは、わたしといて楽しいのかなつて……………す、少しでも幸せになつていただけているならいいなつて思つて……………その……………」

最早収集がつかないといったように狼狽え、あわあわするエトナ。そんな彼女に向かつて私は微笑み、「当然だよ」と返す。めいいっぱいの親愛と実感を込めて。

「今だつて、エトナと一緒にいられて幸せだしね」

「……………っ！」

エトナの表情が、今まで以上に色づく。

「あつう……………」と可愛らしく呻きながら私の胸に顔を押し当て、「うれいんです……………」と消え入りそんな声でこぼし、身体を預けてくる。

「まあ、結婚は飛躍し過ぎだけどね。そもそも16歳からじゃないとできないし」

「そうなんですか？」

まだ赤らんだままの顔を上げ、エトナが疑問符を浮かべる。

「エトナがいた世界ではどうだったか知らないけど、この国ではそういう決まりなんだ」

「……そうなんですか」

目に見えて残念そうだった。

結婚願望が強いのかな？ 私なんてアラサーの域だけれど、結婚しようだなんて考えたことすらない。このあたりは世界の違いというか、文化の違いなのかな。単純に個人の問題かもしれないけど。

いや、結婚できないわけじゃないから。

ただ、しようと思わないだけ。それだけ。

……止めよう、この話は考えれば考えるほどドツボだ。

私は心と話題を切り替えるべくエトナに尋ねる。

「ところで、今日の晩御飯なに？」

エトナは目をぱちくりさせた後、嬉しそうに答えてくれる。

「鰯の照り焼きとコロッケを作りました。コロッケはタネからちゃんと作った自信作です」

「すごい。エトナの料理がほとんど手の込んだものになってる」

「美味しく食べてほしい人がいるからですよ」

ふにゆりと笑うエトナ。

あー、ちくしょう可愛いなこいつ。

「ほんつとエトナは天使だなあ。やっぱり絶対いいお嫁さんになれるよ……！」

最後に一度強めにぎゅつとした後、私はエトナから腕を解く。そうして廊下に放りっぱなしだった鞆を手に、意気揚々とリビングへ向かった。

だから。

私の背後。廊下で佇み、少し戸惑いがちに「天使じゃなくて魔女なんですけどね……」と呟くエトナの言葉も、その後に続いた「でも……トーコさんと少しでも一緒にいられるなら、なんだって構わないです」という囁きも。

何一つ聞こえなかった。

聞こえない、フリをした。

夕飯のち、入浴。

普段どおりの流れを普段どおりに営み終えたわたしは、寝室のベッドに寝転がってスマホをいじいじする。

エトナがお風呂から上がるまで、しばし1人の時間だ。

結局夕飯ではコロッケを3つも食べてしまった。

挽肉たっぷり牛肉コロッケは絶品だったし、鰯の照り焼きも夕

レのあまじょっぱさが絶妙で、ご飯が進むのなんの。
ふっくら炊けた白米を茶碗2杯も掻きこんでしまった。

「これは脂肪フラグ」

パジャマの上からお腹を触ってみると、やや柔らかい感触が返ってくる。

「あれ？ これ、本気で太ってない？」

冗談めかして言ったフラグが、秒速で回収された瞬間だった。
不摂生をしているつもりはないが、エトナが作ってくれるご飯のおかげで自然とカロリー過多になっていたのだろうか。美味しいからいつい食べ過ぎる……というのは幸中の不幸とでも言うべきか。

「……………運動するかあ」

食べる量を減らす、というのは却下だ。
作った料理をたくさん食べれば食べるほどエトナが嬉しそうにしてくれるので、その笑顔を今後もずっと見続けたいのである。
よって、運動一択だ。

ジムにでも通おうかな……………。

と、手近なジムをスマホで探してしばらくした頃、エトナが寝室に入ってきた。

もこもこのパーカータイプのパジャマを着た彼女は、手にバスタオルを持ち、濡れ髪のままだ。

「ちゃんと温まった？」

「はい。ちゃんと湯船で50数えました」

「よろしい。それじゃあ、おいで」

スマホを置いてベッドの端に腰掛けた私は、膝をぼんぼんと叩いてエトナを招く。

エトナはとことことこちらに寄ってきて、私の膝の上にちょこんと座った。

「お願いします」

そう言っつて、エトナは私にバスタオルを手渡してくる。

受け取った私は、バスタオルを広げてエトナの濡れ髪を優しく包み込むようにして拭いていく。綺麗な銀色の髪を傷つけないように丁寧に、そつと。

髪が長いエトナは、どうやら自分では上手く髪を乾かせないみたいだったので、私を手伝ってあげるといっわけである。

湯上りでぼかぼかのエトナの体温に心地よさを感じつつ、手を動かしていく。

時折くすぐったそうにエトナが身じろぎするので「ほら、動かないの」とおしおき代わりに耳にふっと吐息を吹きかけてやったりもした。

エトナは私と同じで耳が弱いらしく「ひゃっ!？」なんて声を上げるので、可愛げがあつてたいへんよろしい。あんまりやりすぎるとやり返されるのでほどほどに、というのが肝要だ。

「それじゃあ、次はドライヤーね」

髪を極力痛ませないように、弱風でさっと乾かしていく。

エトナの髪の極上の手触りとシャンプーの香りに浸りながら、数

分で完了。

ドライヤーを床に置いた私は、そのままエトナを後ろから抱きしめてベッドに倒れこむ。

「このまま寝よっか」

「はい……明日のためにも、今日はたくさん眠っておきたいです」

「いよいよ明日だね、お出掛け」

「すごく……すごく楽しみです」

エトナが溜めた感情をこぼすように、嬉しそうに言う。

「でも私が出かける場所決めちゃって本当によかったの？ しかも、この家の周辺でいいだなんて。ちょっと遠出すれば観光スポットとか色々あるんだけど」

「近くだからこそ、いいんです。トーコさんが普段暮らして馴染みのある場所のことが知りたかったので……それに、トーコさんがわたしのために考えてくれたんだって思えば、どこだって嬉しいですし。だから、問題なんてありません」

私の指に、エトナが指を絡めてきてきゅっと握ってくる。

「絶対に忘れられない1日にしたいです」

「そうだね……私もだよ」

私にとってはなんでもない暮らしなれた街でも。

エトナにとっては、特別な場所だ。

そう自覚した途端、エトナの手を握る私の手にも力が籠った。

「それじゃあ、おやすみなさい。エトナ」

「はい、おやすみなさいです。トー」さん

布団を被って身を寄せ合った私たちは、いつものようにおやすみを交わして目を閉じた。

明日の予報は1日晴れ。

絶好の、お出掛け日和だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n0625ev/>

アラサー女と14歳の魔女 ~ 異世界から銀髪魔女が転がりこんできたので、可愛がってやります ~

2019年12月14日22時46分発行